始

394
51

394-57
コ-318
1

日本から日本へ

西の巻

徳富健次郎
愛

12. 28, 315. Bern.

大正
10. 5. 20
購求

德富健次郎

愛

日本から 日本へ

西の巻

第五篇　伊太利……619

第一　S. S. Karlsbad.……621

第二　Brindisi から Napoli へ　632

第三　Napoli……638

其一　ナポリの日記……638
其二　Vesuvio……647
其三　Capri の嶋……654
其四　Pompeii 一瞥……663
其五　Napoli のータ……670
挿畫　ナポリのタ……675

第四　Roma ……682

其一　羅馬へ ……682
其二　羅馬日記 ……685
其三　羅馬日記(續) ……704

第五　Firenze ……725

第六　Milano ……733

第七　Como 湖畔 ……736

第八　Milano(二たび) ……772

第九　伊太利を後に ……783

第六篇　佛蘭西 ……787

第一　巴里へ ……789

第二　巴里日記 ……795

第三　巴里を出でて ……826

其一　Commissionaire ……826
其二　梨の一顆 ……830

第七篇　瑞西……837

第一　Genève……839

第二　Montreux……855

第三　Zermatt……860

其一　Matterhorn の下へ……860

其二　Zermatt……868

第四　Bern……875

其一　Bern へ……875

其二　Bern……879

第五　瑞西を後に……895

第八篇　獨逸……899

第一　Weimar……901

其一　Weimar へ……901

其二　Weimar……908

第二　伯林……916

其一　伯林へ……916

其二　伯林日記……922

挿畫　後備兵の歸宅……936

挿畫　私の五十二誕辰……940

第三　Potsdam……965

第四　Cöln……970

第九篇　白耳義から佛蘭西へ 983

第一　白耳義 ……985

其一　Bruxelles へ …… 985
其二　Bruxelles ……989

第二　Hun の荒らし ……998

第三　佛蘭西 ……1006

其一　Eiffe! 塔上から ……1006
其二　フランスのおんな ……1021
其三　巴里を後に ……1026

第十篇　英吉利 ……1033

第一　Great Silence …… 1033
第二　倫敦へ ……1042
第三　倫敦日記 ……1053
第四　Oxford …… 1087
第五　倫敦日記(續) ……1097
第六　蘇格蘭 ……1143
其一　Flying Scotchman ……1143
其二　Edinburgh ……1149
其三　Glasgow ……1158

第七　John Bright ……1160
其一　Manchester へ ……1160
其二　Rochdale ……1165

第八　Edward Carpenter……1177

第九　Avon のほとり……1185

第十　倫敦日記(續)……1199

挿畫　"1919"……1203

第十一　倫敦から……1210

第十二　倫敦日記(續)……1214

第十三　英吉利の女……1255

第十四　Plymouth……1261

第十一篇　北米合衆國……1271

第一　大西洋上……1273

第二　紐育……1283

挿畫　Suffragette の婆さん達と　1330

第三　入日を趁ふて……1333

第四　桑港……1352

亞米利加の女……1362

第十二篇　日本へ……1375

第一　太平洋(前)……1377

其一　新天新地 四海一家……1377
其二　春洋丸……1380

第二　布哇……1392

挿畫　舊王宮前……1393

第三　太平洋(後)……1403

第十三篇　日本……1437

其一……1439
其二……1447

第五篇

伊太利

第五篇 伊太利

第一 S. S. KARLSBAD.

(一)

大正八年七月四日の午後三時，私共は南さんの小艇に送られて，伊太利行きの汽船 Karlsbad に乗つた。約六千噸，ぱるねおゝ丸程の船である。

Leah さんと慶君が薔薇の花など持つて，見送つてくれる。甲板の乘客の中に，群一の女達が喧しく話して居る。何處の女でせう？と L さんに問へば，L さん日本語で九一と答へる。9+1=10= Jew。人聞きの中で，露骨に Jew と云ふかはりに，少しの日本語を操つて九一は好かつた。

南さんは私に一つの頼み事を殘して往つた。それは埃及模樣の壁掛けの餘白に何か書いてほしいといふのであつた。惡筆を省みず悦んで私は承知したが，坡西土の逗留十八日に及んで，到頭書く可きものが出て來なかつた。伊太利から

書き込ることにして，私共は其帷を旅鞄の中に收めた。

Lさんと慶君が別を告げて，小艇に乘つて去るとやがて，四時少し過ぐる頃，Karlsbad は動き出した。私共が半月の餘も其處から往く船來る船を羨ましい心で送り迎へたMarina Palace Hotel の三階のバルコニイが近くと見えて，今其前を過ぎて行く。濠洲行きの船をまだ大分待たねばならぬ猶太人の彼家族が，私共の姿を見つけて手巾をふつて居る。私共も振る。頭にチョン髷を結ふたあの轉婆娘が，盛にタヂルを振り廻はして居るのがよく見える。

港の口のLesseps さんの像も，私共を默つて見送る。

地中海に乘り出して，船が大分搖る。日が西に沉み，晩餐の銅鑼が鳴る。醉心地の妻を外の籐寢臺に殘して，私は早早に夕食を濟まし，それから相挈へて船房に下る。切符は，Brindisi まで兩人 4869 p を拂つて，正しく一等だが，船室の都合上亞歷山港まで二等にしてくれと云ふので，今夜だけ其處に納まる。搖れる。臭い。暑い。幸に疲勞が私共を眠りに攝取する。

十三年前私は坡西土からAustrian Lloyd の船の甲板に寢て，パレスチナのヤッフア港へ往つた。今度乘る船も，やはりもとはAustrian Lloyd の船なのだ。そんな事を考へながら何時しか眠に落ちる。

(二)

七月五日。さめると，亞歷山港が近い。まだ搖れて居るが，海は印度洋のあのSapphire を其ままに眼がさめる程羽しい色をして居る。

其海から白く低く盛り上つた沙地が追ゝ近くなる。八時には，浮漂をけつて危險を示した沉沒船を傍眼に見て，港內深く岸壁に横づけになつた。

Karslsbad は今明碇泊，明後午后出帆なのゆ，乘客の大部分は上陸した。私共は船に居殘る。"それでは，碇泊中の食費を頂戴しまず" とUmberto 式端の小柄な五十男の事務長が言ふ。

其事務長を促して，切符通りの船房に引移る。上甲板の左舷，2 Parth 1 Sofa の房は，先づBorneo 丸の最初の室位の處°直ぐ窓下が甲板のRecess になつて居るので，其處のベンチによく人が寄る。三十許りの伊太利子Maria と云ふのが用を辦ずる。テベリア湖畔のホテルの主婦に痘痕をぬいてよく肖て居る。カイロで買つたItalian Self Taught 片手に，妻が顏にBep の Sheets を取換へてくれ，日光に曝らしてくれと云ふが，中々要領を得ないBed pan の內容を拭掃除のバケツトにあけたりすると，妻は後で顏をしかめて居た。

碇泊中の食事は，ひどいものであつた，碌にバタもジャムもくれぬ。先づ餓ゑぬ程度のものである。食堂の羽目には，Karlsbad の壁畫がもとのままにある。W. C. のあるものに "Banco" ——銀行などしやれたのが，伊太利人らしい。

甲板椅子は硬いものばかり。私共は坡西土のホテルから籐の寢椅子を二臺持ち込むで，それを左舷から右舷，或は食堂前の前甲板と日蔭を追ふて持ち廻はり，大部分を外で暮らす。

少年二人連れた赤帽の若い船商人が來て，上陸を勸める。買物があるなら買つて來やう，と云ふ。水瓜とビスケットを頼む。程なく持つて來た水瓜は中々好いものであつたが，ビスケットはまづかつた。

上陸せぬ二等船客の中に，若い瑞西人が居る。Peirut から此船に乘つたので，長らく Peirut 大學の經濟學教授をして居た人。瑞西は ペスタロッチに名高い Neuchatel の人であつた。Syrian を如何思ふ? と問ふたら，所詮望みがない，すこしも愛國心がない，金ばかり拜む，と云ふ。狹い Saloon にピアノがある。教授は連りに妙腕を振ふて獨り樂しんで居た。

"Karlsbad" は Adriatic から小亞細亞 シリア 埃及 希臘と廻はつてまた Adriatic に復へるので，Beirut や Jaffa にも寄つて來たのだ。Beirut から大分乘つて居る。亞歷山港で上陸した一青年は波斯の Bushire の者で，商人の子，久しく Syria に來て久し振りに歸省すると云ふて居た。Beirut の大學を

自讃し，日本人でも來て居ると云ふたが，私は別に確かめもしなかつた。彼は回教信者で，Babaism には興味を有つて居なかつた。回教には，改めねばならぬ點があると私が云ふたら，睡食の習慣でせう，と彼は云ふた。青年だけに，面白い。

* * *

七月六日。上陸。岸壁に上ると やがて，埃及の役人が私の着衣のままの身體檢査をする。煙草を持つて居るか，と調ふのである。それから埠頭の旅券檢閲所に出頭して，Passport と引換へに上陸券を貰ふ。埃及の役人が愛想をする。

馬車に乘る。土人街で水瓜二個，パンなど買ふ。繁華な街に出て，野薔薇の香水，バタ，ビスケット，ジャム，シイロップ，ラッキョウ漬，菓物の罐詰など買ふ。唯有る本屋で "Persian mystic" を買ふ。

水瓜はまづかつた。がたがたと Winch の音喧しく今日も荷を積んで居る，小麥粉だ。

* * *

七月七日。朝，再び上陸。今度は婦人の官吏が妻を役所の一室に連れて往つて，身體檢査をした。

馬車に乘つて，Banco di Roma に往つて，埃及貨を伊太利貨に換へる。

唯有る辻で，仙人掌の實を車にのせて，立賣りして居る。馬車を駐め，下りて味はう。ナザレの Hotel Germania の主婦 F

さんが 大好き，と云ふた 實である。皮を剝いて 嚙めば，冷たい甘酸い 液が 出て，好い清凉劑で ある。ナザレでは，仙人掌の花がやつと 咲きかけて 居たが，埃及では もう 其實を 味はう。

それから，市場に行く水瓜車を とどめて，二個 18p で 買ふ。

公園を Drive する。椰樹 青空に 聳え，ブベンゲリア 紫に燃えて，新嘉坡あたりを 想ひ出す。

總じて 亞歷山は カイロ よりも ヨリ歐化して 居る。

埠頭に歸つて，上陸券を出し，Pass port を もらうて 船に 歸る。

（三）

午餐過ぎると，上陸して居た乘客，新しい乘客 續と 船に 上つて來る。

四時過ぎ 出船。

雪のやうな 埃及の濱が 退くと，綠の海は やがて Sapphire になり，眼が さめるやうに 美しい。

夕食から，觀面に 馳走がある。

伊太利士官の 卓がある。坡西土の 慶君が，伊太利の士官は おとなしい，と云ふたが，全く 若い士官ばかりの 其卓は 比較的靜かである。孟買から 日本の船で 坡西土まで 來て，此船で

Venezia まで 行き，それから 瑞西に歸る 商人の 家族連れがある。坊さんの裝をした 印度人の 僕を連れて，細君も 印度風に巾を頭に卷いて居る。高級船員と一卓に，亞米利加の 軍人組が居る。若い醫師らしい一人は，右の手が無い。附添ひの 看護婦は 眼が 凹んで居る。私共の 卓には，Beirut から 乘つた シリアの一組 と 亞歷山から 乘つた 恐ろしく ね轉婆な 小娘を 連れた 伊太利人夫婦が 居る。

今日の 水瓜は，好かつた。

＊　＊　＊

七月八日。終日 船が 搖る。妻は 船房に 籠つたきりで，三食にも 出ない。船房暑苦しく，臭いので，亞歷山で 買つた 野薔薇の 香水を 枕に ふりまく。

波あるる　しぶきの音に　文月の
雨多き　日の　故國　しぬばゆ
あい

上と下　ベッド　に　いねて　故郷の
蟬の　鳴く音を　まねて　たのしむ
あい

今日の水瓜は 少し落ちた。

(四)

七月九日。天明 クリイトの 島が 現はれる。希臘領で，我四國の 約半分程の 島 である。近づくままに 島の高峰 海拔八千呎 イイダの 嶺が 雪を いただいて 白い。波も 穩やかになつたので，妻も 甲板の 籐寢椅子に出て，共に 眺める。昨年の 今日は，丁度越後の 赤倉に 居て，妙高山の雪が あんなに 白かつた など 話す。

妙高の 雪 おもはゆるかな クリイトの
イイダが峰 に 白きを 見れば

船は 島の南から 東に 廻はり，更に 西に 折れ，正午 カンデイア港に 着く。人口約二萬五千の 要港。兵隊が 潮干ノ磯に 貝をとつて居る。子供が 數多 泳いで居る。船側から 見下ろすと，印度藍色の 水 澄んで，深く 魚の 泳ぐのが 見える。日光落ちて，金糸の 蜘蛛の網が 水中に 張られる。二三の客を のせたばかりで，午后 やがて 拔錨。

片脚の 米國軍醫が 左の手で 邪魔な椅子を かたづけ，看護婦と 甲板運動を する。丈高い 伊太利士官が 米國に往つた 話など して居るが，伊太利士官の 語調には 掩はれぬ不快 が 漲つて 居

た。

瑞西の 若い教授の 言葉を 裏書きするやうなは，私共と一卓の シリア人組である。Beirut の 商人さうな。若い一團の彼等は菓子を喰ひ，水瓜を呼び，日かな一日 カルタを して 居る。負けた一人は，夕食も食へずに ふさいで居る。眉目の黒い頬の紅い 細君が 中心である。毛皮の 被を 取りにやる，椅子を持つて 來させる，男共を こき使ひ，隙を見ては チヨコレエトを 男の 口へ 口から うつしてやる。

今夜は 月が 好かつた。

(五)

七月十日。船は 希臘の西方 Ionia 群島の 間を駛つて居る。船房の夜は 可なり 暑いが，日蔭の甲板は 涼しく，私共は 瀬戸内海を 駛るやうな 氣もちで，船の 進行に つれて さまざまの趣を 見する 島 島を 籐椅子から 眺める。

Milano に 行くと云ふ 埃及生れの 若い 伊太利人と 話す。戰爭の話を する。伊太利の爲には 何にもならない。十年以内に，瑪逸が 復讐する と云ふ。

前甲板の賑合に ひかれて，私共も 上から 覗く。三等船客の伊太利兵士が，Violin の 音に つれて 二人相抱いて 踊つて居る。一人は 孕み女に化け，毛布を スカアトに 卷き よた よた 踊つて

居る。一曲終ると，懐から毛布を出して，笑ふ。滿船の喝采である。

今宵も月が好い。

＊　＊　＊

七月十一日。未明希臘の西北端 Corfu 島の Corfu に投錨。

錨下ろせば　灯影　ちら　ちら　鷄鳴いて
コルフユ　の　島に　天　明けむとす

檢疫などある爲に，午後晩くなつて拔錨。

島はカイゼルの別莊で名高い。それは夜の中に過ぎたので，見る事を得なかつた。

伊太利人はよく歌ふ。而してよく踊る。客の中に夫婦娘の藝人家族がある。日蔭の Passage で今日も家族の合唱が賑やかだ。頭の禿げた小柄の伊太利士官が，娘の背を搏つてふざける。室に歸ると，外の甲板でまた皆の合唱が賑やかだ。

明日は Brindisi に着くので，手荷物など片づける。

私共の籐椅子二脚は船に寄附する，と事務長に言ふたら，大悅びした。明朝早く私共の Card を剝がうとして見れば，寢椅子は手早くもう何處かへしまひ込んであつた。

＊　＊　＊

七月十二日。天明，Karlsbad は Brindisi の燈臺に迎へら

れ，やがて港の奥深く入つて，岸壁に着いた。

船中で旅券の檢閲がある。埃及生れの伊太利人が私共の爲に通辯して，上陸證が渡される。

Guide に荷物萬端一任して，朝食の後私共は Karlsbad を下りる。船は Brindisi を明日拔錨してアドリアチック海を北上し，Venezia までも行くのである。私共も此ままずうと船で水の都のヱネチアを見に行きたいが，さすればまた羅馬ナポリと後戻る要があるので，矢張最初のを通り，長靴の踵から上つて，斜に前脛部のナポリに出で，それから羅馬，Firenze, Milano と追追に北上する事にする。

八時，私共は Karlsbad を下りて，初めて伊太利に私共の脚を立てる。

伊太利の　かがとに　立ちて　つまだちて
のぞかん　と　思ふ　歐洲の門
あい

第二

BRINDISI から NAPOLI

(一)

案内者の顔で税關は無檢査で通つた。馬車で私共は Brindisi 唯一の然る可き Hotel なる "Europa Nuova" に導かれたが，滿員で，今度は Hotel Central と云ふひどい Hotel に案内された。兎も角も二階の表通りの一室に納まる。暗い汚ない Hotel で，W. C. の不潔が私共を惱ます。Boy は Argentino の者で，三階には英吉利の士官が下宿して居る。

午餐には案内者の先導で，Europa Nuova に往つた。恰も伊太利が私共を歡迎するかの如く，鯛の鹽燒が食卓に出て，私共を悦ばせる。Dessert の小さい夏梨，Prune も嬉しいものであつた。

Karlsbad で顏馴染の亞米利加の軍醫や看護婦も來て居る。此連中はナポリから亞米利加行汽船に乘るべく今夕の汽車で立つさうな。私共は一泊して疲れを休め，明朝の汽車で沿道の風物を見ながらナポリへ行く事にする。

携帶の信用狀で，伊太利貨幣を引出さうと，Cook の事務所を探がす。戰爭で五年來閉店して居るとは，さもあらう。案内

者の言によれば，戰後人氣殊に荒く，同盟罷工も頗るで，多少の血も流れたと云ふ事である。ホテルの二階から覗くと，表通りの彼處に一群，此處に一團，さしたる用も無げの人人が簇がつて居るのは，夕涼とばかりは受取れず，穩やかならぬ狀である。

私共が二たび Europa Nuova に夕食に往つて歸るさ，子供の一人私共の後姿に何か罵聲を浴びせかくると，土塊の如きものが飛んで今し上らうとする階段下の舗石に落ちたも，嬉しくない事の一つであつた。

(二)

七月十三日の朝，案内者が馬車で迎へに來た。直ぐ停車場に行く。停車場には辨當を賣らぬので，人込みの食堂で珈琲とビスケットで朝食を濟まし，直ぐ汽車に乘る。案内者一切の拂ひは，佛紙幣でする。伊太利の Lira は佛蘭西の Franc よりやすく，それで伊太利人も Lira を Franc Franc と呼んで居る。此頃の Franc の下落と共に，Lira も下落し，一 Lira は約我二十四錢弱に當る。ホテルを別にして，ナポリ迄の汽車一等賃金共すべて 263 Lira の揃に Tip 共 100 F 紙幣三枚を與へたので，もとより異議はなかつた。

七時半發車。

汽車の硝子窓が破れたままになつて居るのも，戰後の國ら

しい。

ブリンデイジイを出て，當分丘地を走る。麥は苅られて，取り殘された白い條の橄欖や深い綠の無花果がパレスチナのつづきを旅する感を，私共に與へる。やや久しくそんな丘地を走つて，Taranto で海に出る。長靴の土蹈まずに來たのである。たしか坡西土の南夫人の父祖の地で，先頃南さんも來たとかいふ事であつた。停車場に兵の爲めの英語の標示が殘つて居るのも，今の戰爭で如何に英吉利の魂が伊太利に入つて居たかが卜せられる。

Taranto から Metaponto まで汽車は海を左にして走る。窓の風が凉しい。小松の沙原，パレスチナはナブルスの回教墓地で見た龍舌蘭に似た假植物が長長と花梗を擡げて居る。

Metaponto から海を見捨てて汽車は西北へ山地を上つて行く。小麥がまだ苅られずに居る。蟋，蟋，蟋と蟬の一種が鳴く。川の流れを追追下に見て，道は草山を攀ぢて行く。山を彩つて黃金の叢又叢，野生エニシダの花盛りである。

午を過ぎて，日は熱し，腹は空いた。飢ゑ又渴く。Taranto で食物を調へ損ねたので，食籠を開いて亞歷山から買つて來た茶ビスケットと，晶子漬を喰べる。勿論腹に滿たない。やがて山上の驛 Potenza に來たので，私は急ぎ下車してパンと全熟卵と肉饅頭二個を買つて戻る。

分水嶺を過ぎて，下りになる。隧道又隧道。午下の日の熱

に，渴くこと甚しく，二度下車して魔法罐を滿たした。"L'acqua——L'acqua" と停車場で子供が水を賣つて居る。

兀兀した岩山。やがて海近い山。Vesuvio は何處と心當に戲める。沿道の崖腹に，栗の大木がふさふさと花をかぶつて居る。

海近い平地に下りた。柘榴，葡萄，桑，無花果，其他の果樹，芭蕉や棕櫚の園が，綠は綠に接し，別墅風の家點點として，顧みれば山の上，山の腹，色美しい建物が風景を彩どつて居る。阪神間の御影住吉あたりの氣もちがする。Salerno である。避暑にでも來たかと見ゆる瀟洒とした裝の家族連れが，どやどやと乘つて，汽車の內賑やかになつた。

Sorrento 半島の岐れ口，高い崖を路白くくねり，家面白く高低し，適に美しい海水を見下ろすあたり，名は知らぬが好い景色と夕日に見て過ぎる。

（三）

日が西に入つた。突然妻が

"Vesuvio!"

と叫ぶ。窓から頭を突き出して見る。行手の方，金を流した夕空に倚つて一座二峰の山，其西の峰からもくもく噴き出す烟が眞黑い雲の柱を横ざまに捻ぢ倒すやうに東に渦まき流

れて居る。えらい勢だ。

汽車は南から西北と Vesuvio を半周して走る。日がとつぷり暮れる。

不圖"囚はれたる文藝"と云ふ抱君の文が頭に浮ぶ。歐羅巴から歸りに，ナポリの灣に船かかりした事から書き起したあの文である。抱君から直ぐ須子が浮ぶ。私共の日本を立つ三週間前に，彼女は縊れた。相識でもなかつた間を，今年に限つて彼女は年始のはがきなどくれた。抱君が歐羅巴を立つ時，恐らく須子の存在をすら知らなかつたであらう。然し抱君がナポリ灣頭に此 Vesuvio の煙を眺めた時，不幸な斯の男女の運命はもう定まつて居たのだ。瞑目して，兩人の菩提を吊ふ。

汽車は轟轟と海に傍ふて走る。時々燈火明るい停車場に來る。ナポリ？否。中々ナポリに來ない。

十時近くなつて，燈火がまた明るくなつた。窓から眺むると，美しい火光が點點と朱の眞珠の弓形に海を抱いて光つて居る。

到頭汽車はナポリに着いた。

（四）

Brindisi を立つ時，案内者に頼み，ナポリの Hotel Victoria に電報をうつて置いた。汽車を下りても誰も來て居な

い。荷夫に荷物を持たして，改札口を出ると，客引が初めて顔を出した。Hotel Victoria は閉鎖したので，Hotel Continental へと謂ふのである。

Trunk や Portmanteau の鍵を彼に渡して，私共は馬車に乘る。

Hotel は中々遠い。鋪石の凸凹路をごとがた小一時間も搖られて，所謂 Continental Hotel に來た。

直ぐリフトで三階の十七番に導かれる。

四十疊も敷けさうな大廣間が私共を悦ばせる。

海が見えるか，と問ふと，Manager は直ぐバルコニイの鎧戸を開けた。其處には黑い海の面に十八夜の月がきらきら流れて居た。

圓い大卓に，晩い夜食が齎らされる。Chianti に鑛物水，冷肉，パン，果物の皿に桃や Prune が美しい。

やがて停車場から荷物も來た。

私共がナポリの第一夜の夢に入つたのは夜の十二時過ぎであつた。

第三
NAPOLI

其一
ナポリの日記

(一)

七月十四日。私共が落ちついた Hotel Continental は，日本人泊りつけの宿であつた。日本人泊りつけの宿には，日本人馴染の案内者があつて，私共が泊ると翌朝早速やつて來た。Antonio と云ふ五十男。出した信用帖には，多くの日本字が書かれてある。皆好い評判を與へて居る。私共は，四五日休息して後，案内を頼む事にする。

Napoli を海に凭る E 字とすれば，私共のホテルは丁度中央の突出部にある。低い石垣で海を隔てた潤い Promenade が，前を通つて居る。大きなホテルの並んで居る内の一つである。直ぐ鼻先に Castello Dell'ovo の出島がある。海から築き上げた茶褐色の小さな城である。其處には温冷浴場，劇場，小さな Restaurant などがある。城への道路の左手は舟つき，Restaurant

など。右手は水泳場で，男女大人子供が朝から泳いで居る。

私共は午后歩いて町に出かける。街頭に玉蜀黍を燒いて賣つて居たり，葉つきのレモンを飾つてレモン水を賣る屋臺店などが私共の眼を牽く。

Piazza del Plebisaito の畫肆で，伊英袖珍字典，ナポリの英語案内記など買ふ。

ナポリに昨夜着いて，今日早速不自由を感じはじめたものがある。砂糖だ。珈琲紅茶の際にも，薄い角砂糖が二片以上は來ない。葡萄酒に和して飲むにも，不自由だ。今日の外出の目的は，砂糖の補充にあつた。それで眼ぼしい通りの眼ぼしい食料品屋からある菓子屋まで砂糖を聞いてあるいた。一軒ではてんで相手にせぬ。一軒ではそれでも無い，と云ふ。一軒では他の一軒を教へてくれる。往つて見ると，砂糖が硝子箱に見えて居ながら賣つてくれぬ。私は肝癪を起し，こんな時の日本語と車夫馬丁も耳を掩ひさうな惡言毒辭を日本語で並べて悶悶を遣る。妻が笑止な顏して，慰めかねて跟いて來る。また一軒有望らしい店に會ふて，最後通牒を持出すと，買物に來て居た紳士が紙入から電車の回數券見たやうなものを取り出し，これがなければ砂糖は買へぬ，と云ふ意を眼顏で語つた。砂糖が切符制度で制限されて居るのだ。獨逸では覺期して居たが，伊太利，殊に平和になつた今日伊太利では一寸案外であつた。私共は今本當に戰爭上りの國に來たのだ。吐いたばかりの毒

言惡罵が 忽ち自己の頭に 還つて，私は 伊太利が 氣の毒で ならなく なつた。戰爭したお蔭で，砂糖も 思ふやうに 貰められぬ，とは 何と云ふ 情けない 事であらう？

私共は 徇歩いて，ホテルに 遠からぬ 裏小路で Show window に Baedeker などが 見えて居る 一軒の店に 來た。おかみはよく英語を話す。私共は 此處で 兩三日前の Daily mail や Times や繪葉書，ナポリ 案内記，歐羅巴旅行圖，それから どうせ Pompeii に行くから 少年時代に 翻譯で 讀んだ Lytton の "Last days of Pompeii" を 買つた。店は 英書や文房具，繪畫や 小さな塑像などを 並べ，裏は Bar に なつて居る。藝術家などが 飲みに 來るのでであらう。おかみさん 砂糖を 譲つて くれる かも 知れません，と 妻が 云ふ。談じて見る と さもさうず と 云ひ顔に，おかみは 恩きせまわつて，半封度の砂糖を 3Lire で 譲つてくれた。

（二）

七月十五日。昨日の午餐から，私共は キモノで 食堂に出る。食事の時間を，十三時，——十五時，などと 二十四時間割にして掲げてあるのは，午前午後の 面倒がなくて 好い。

昨日の 巴里は 凱旋式で 非常な賑合 であつたらしい。五十年の鬱憤が 霽れたのだもの，尤である。今度は 獨逸が ふさぐ番だ。

"Why, let the strucken deer go weep,
The hart ungalled play;
For some must watch, while some must sleep
So runs the world away."

の句が 突と 頭を走る。

私共の バルコニイから，下の往來が さまざまの 見物を 私共に 與へる。朝早く 馬糞など ちらばつてる 下の通りを よく女が箒で 掃き清めて居る。戰地の 罹災者に 生活の便を 得させる爲に政府が 各地に分けて，かかる仕事をもさす と云ふ事を 後で 聞いた。下が 海水浴場なので，それ等を當に 朝からパン賣り 菓子賣が ダマスコの パン賣りを 思はせて 立賣りする。何とか "フレスコオ" ト 云ふ。"燒き立てのパン" と 謂ふのだ。れもん水賣りが屋臺を立てる。Grind organが ホテルの前で のべつに 鳴らす。自動車も通るが，それよりも 夕方近くなると 二頭挽，一頭立ての 馬車が Drive する，瀟洒とした 麥稈帽の紳士や ナポリ美人を のせて。鷄の羽など 帽子に飾つた 或種の兵士。黑と金と青との 濱手な裝した 若い憲兵さん。藝術の國だけ あつて，すべてが Picturesque である。

夕方，私共も 夕涼の群に交つて 散歩する。Promenade の 南の角あたり まで 行くと，Vesuvio が よく 見える。乞食が帽を出す。豆賣りが 豆をすすめる。Castello の 出島へ 往つて見る。アセチリン瓦斯を ともして，お手輕 貝料理の屋臺が 夥しく 路傍

に 並んで居る。馬刀貝 赤貝 牡蠣の 生を肴に 身輕に氣輕な ナポリ男女が 酒の一盃を 樂しむて居る。そろそろ 劇場があくので 此人ごみの中を 馬車や自動車が 乘り入つて 來る。

(三)

七月十六日。雨，電光，雷鳴，日本に歸つたやうだ。今日は 終日 ホテルに籠つて，書き物をしたり，“Last days of Pompeii” を 讀むだり。海荒れ，波高く，Promenade の 石垣を 打越す。水浴場も 今日は 休みで 淋しい。

(四)

七月十七日。Taxi 馬車で 博物館に行く。Pompeii から 掘り出した 希臘藝術の粹と云はるる 二尺五六寸 青銅像の 名作が三つ一室に 並んで居る。自己の影に 見惚れてか 遠い木魂に 聞き惚れてか うつとりした Narcissus の やさ男の 和らかい Repose も 美しいが，爪立つた足，ふり上げた 兩手の指尖から，ふり仰いだ 羊角鬚の 其面から 野氣 蠻氣 生氣 の 迸る “踊る Faun” は 尙よく，力を脫いて 今や大地に 平太張りさうな “Silanus” の 醉像は 更に好い。

Venus 室では，白大理石を 思ふさま しなやかに 言はせて居

る 希臘藝術に 感心する。然し 裸にし，石にして見れば，男の Apollo は 女の Venus より より美しい。

Pompeii, Herculanaeum の 壁畫は，司馬江漢の畫でも見る心地。男女の畫家が 摸寫をしつつ，客を見ては 買へと すすめる。本を左手に 右手の Pencil を 輕く 唇下にあてて居る バンドの下から ちぢれ前髪を垂らした 二皮眼の女 所謂 “Sappho” の 摸寫でも 愛想に 買はうか と 思ふたが，あまり 肖て居ないので，やめた。

歸つて 和服に更へ，リフトで ホテル屋上に 上る。夥しく 洗濯物を 干してある。洗濯女達が 珍客を迎へて 喜ぶ。ナポリで 日本人は珍らしくない が，日本服の日本女は 珍らしい。それが 夏の日ざかりに 物干しまで 上るなどは 分けて 珍らしいであらう。思はしく話せないのが，双方の 遺憾だ。ナポリは 丘に據つて 居るので，海岸通りの ホテルの 屋上に上つても，裏手には いくらも 高い家が 上から 上と 重なつて居る。あんな處に 何して 居るのか と ふと 思ふたりするやうな 高い處で，日日の 營みを して居る。

(五)

七月十八日。今日は Vesuvio に 上るつもりで，案内者 Antonio を 呼んだら，昨夜 羅馬から 日本の人が一人着いたさうで，

私共の登山は 明朝に 延ばした。

私は 室の中央の Armchair であまり面白くもない " Last days of Pompeii " を 讀む。妻は 化粧臺の前の 低い 女椅子で，裁縫をして居る。午前十一時頃で あつたらうか，私は 兎に角 "Last days of Pompeii " を 飛ばし讀みに 讀み終へて やをら立ち上り，扉に近い 大圓卓の 椅子に 移つて ふるい日記の 欠を書きはじめた。椅子が 少し ぐらつき，明りが 十分でないので，苦情を 云ひ 云ひ 私は ペンを とる。妻は もとの椅子で 裁縫をつづける。

ド，ド，ドシン，——ガタリ，ガタガタ——凄じい響がしたと 思ふと，私は 茫となつた。天が 落ちた，地震，Vesuvio の 大破裂，Last day of Napoli——そんな考が 電の如く 私の頭に 閃めいた。我に復へると，濛濛とした 白煙が 室内に 立つて，室内の模様が 變はつて居る。氣がぬけたやうに 椅子にかけたままの妻を引立てて，此方に 立退いたのは，可なり長い 秒時の後 で あつたらう。

眼が 明らかになると，それは 天井の一部が 落ちたのである事が 分かつた。白塗りの天井が 一坪あまり 落ちて，後には 木地を見せて 居る。旅順砲臺の ペトンの破片を 見たやうな 厚さ 六七寸もある セメントの 塊が，一坪も 落ちて 來たのだ。二分前に私が " Last days of Pompeii " を 讀み終つて 立退いた Armchair が 眞逆樣に 顚覆つて 居る。壓落の 勢で，金びかの 頑丈な

窓框が そつくり 打はなされ，それが妻の かけて居た椅子を 擊たうとして，前の化粧臺で わづかに 支へとめられて居る。スリ硝子の Stand は めちや めちやに 破れて，のせてあつた 私共の 大切な銀茶瓶の柄が はづれ，出發前 同志社の舊友 丹波の 藥劑師 井君が 父子で 調劑して 贈つてくれた 胃の藥の瓶が 碎けて居るのを見たは，大分後の事である。落ちたあとの 天井は，近接の部分にヒビが入つて，今にも 第二の 壓落を 脅かして 居る。

私共は 吻と 息を ついた。

私が " Last days of Pompeii " を 終へて 立ち上るのが，唯二分 おくれたら，あの厚い セメントの塊の 落下で 私の頭は 微塵になつて 居たのだ。" Last days of Pompeii " は 今ちつとの處で "Last day of Tokutomi Kenjiroh " に なる處だつた。それからあの 化粧臺が 身代りになつて 窓框を受けとめて くれなかつたら，妻も 金びかの 頑丈な 窓框に うたれて 死んで居たに 違ひない。

後で 不圖 刻暦の 記入に 氣がつくと，今日は 七月十八日 正に 妻の 46 誕辰で あつた。誕生日に 妻は 命を 拾つた。

氣が 落ちつくと，呼鈴を 鳴らして，人を呼ぶ。女中が來，男が來，Manager が來て，皆 天井を 見上げつ 床の落塊を 見つ 驚いて居る。

私共は 四階の 39 番に 移つた。前の室の 三分一も ない 狹い室だが，感謝して 其處に 納まる。狹いと 云ふても 船房より

廣い。それに此處から Vesuvio の一端が望まれる。どちやどちや持ち込んだ荷物をそれぞれ整理して，それでも可なり住み好い室になつた。

珍事はホテルの評判になつた。夕食に給仕がかはるがはる來ては無事を祝ふてくれる。米國 Y. M. C. A. の人で私共の食卓に來て，無事の慶を述べるのもあつた。

其二
VESUVIO

(一)

七月十九日の朝九時，案内者のAが私共を Vesuvio に導く可く來た。

馬車で，Vesuvio 一周絲停車場へ。それから數臺連續の電車で，小一時間走つて，V山下の Puguliano に下車。線路を横ぎると，登山電車の Vesuvio 停車場。Cook 會社經營の電車である。Cook 會社と云へば，Thomas Cook は英吉利の田舍に生れて，十歳から園丁の手傳をしたり，挽物曲木細工など習つたり，活版工になつたり，仕事の傍はら村の傳道師をして禁酒運動に盡力する内，1841 年に初めて禁酒大會參列員の爲に鐵道會社と特約して割引乘車をさせたが原になり，昔がそれを便利とする處から Cook さんの旅客世話事業は見る見る發展して，其組織は世界に廣まり，ゴルドン將軍の蘇丹行き，果ては其ゴルドン將軍救援隊一萬八千人の賄も引受ける程になり，カイゼル維廉二世のパレスチナ漫遊すら其手をかけた位で，今は父死に子死に孫の時代になつても，Cook の蜘蛛手は六大洲に廣がつて居る。私共はエルサレムで死海エリコ行きに Cook の世

話になつたが，今 伊太利に 來て，Vesuvio の 絶頂まで わが有貌に 架けて居る Cook の 登山電車の 厄介に なるのである。

夏 Orange 賣を 見つけて，三個 2 L で 買ふ。“まづいですよ”と 登山仲間の 人が 云ふ。妻と十二三の男の子を 連れた彼は，露西亞人で，今希臘に 居ると 云ふ。Orange は 果して まづかつた。

(二)

やがて 電車が 出る。

私共と 案内者と 露西亞人の家族を のせた 電車は，北西から 次第に 山に 這ひ上がる。山腹は 皆 果園。御葡，無花果，柿榴，橄欖。栗は白つぽい花。胡桃は 綠の實。梨は 枝も折れさうに 果實に撓み，桑の實の大きさ，杏，李は 處處に 摘み殘りの 孤果を 見せて居る。此火山に 斯樣な 果樹園がと，果物好きの 私共の眼を 瞪らせる。

約 半時も 走つて，中央停車場に 來た。これからは 勾配が急になるので，線路は 鋸齒狀の一條を添へ，後押しの電車が つく。

眺望の爲，山を背にして 腰を かける。

ひどい 勾配で 上る。$\frac{25}{100}$ と云ふ處がある。座ながらに ナポリ灣が 段段 下に 廣く 開けて 來る。

果樹園は ただの 雜木になり，それも 稀になる。赭黑い 熔岩

の 峨峨と 凄じく 流れ下つて居るの は，1906 年四月の大噴火の紀念と云ふ。それは 丁度 私が 備後丸で 順禮行の 門出を 日本からした月である。Vesuvio の 標高 1223 米突だが，1906 年の大噴火の際 大分崩り，1911 年に また 崩れて，今は 相並んだ 北峰 Somma と いくらも 違はぬ，と云ふ事である。電車汽車が ない時分は，ナポリから 馬車で 來たさうで，舊時の 登山道が まだ うねうね と 殘つて居る。

やがて 火山の 觀象臺に 來た。海拔 608 米突。正に 半腹である。私共が ナポリから 遥に望んで，噴火山の下，綠の裾野の上，別莊見たやうなものが 立つて居ると 見たのは，此建物で あつた。此處には 私共の 歸りに寄る Restaurant もある。

觀象臺を 過ぎて，しばらく 走つて，電車は 止まつた。これから 索道車で 絶頂に 攀づるのである。電車を下りて，富士の 剛突八丁の樣な 殆んど 直立と 見ゆる Cone を，上の 停車場まで見上げた時は 好い氣味 では なかつた。此邊は 熔岩砂礫 膚をなして，處處に エニシダの 金色が それを 彩どつて居る。

段段形になつて居る 索道車は，徐徐に さながらの 宙乘りをはじめた。妻は 眼を瞑つて居る。車は 上る。天地は 見る 見る 廣くなる。鐵軌は しつかり敷いて，コンクリイトで 固めてあるが，やはり あぶなげで ある。

中途で，下りて來る車と 行き違ふ。

やがて 頂上の 停車場に 來て，車を 下りる。客を待つて案内

の爺さんや 若いのが 五六人居る。露西亞の家族は 其一人に導かれて 行く。私共は Aの後から ざら ざら ざく ざく した 火山礫を 踏むで行く。頭上に 何かの廢墟の樣な建物は，以前の 停車場で，それは 山頂陷落の区 見捨てられたのである。

（三）

低いと 云ふても 海拔四千呎，麓まで ざら ざら 落しの 山の上，つとめて 傍目を ふらず 案内者の後から ざく ざく 狹い 路を 歩いて，噴火口壁の 好い 見晴らしに 來た。傘や ステッキを突立てて，熱と 坑内を 見下ろす。

直徑半哩 もある 摺鉢の底，私共の足下 二三十間の處に 大小 二つ 硫黄で 黄ろくなつた Mound が 相隣つて，煙を 噴出して 居る。其處らぢう 硫黄が 黄ろく 流れて居る。熱と 見て居ると，噴火孔から 時時 朱の如く赤く 血の如く紅い火が 白晝に ちちよろ ちよろと 燃え上る。其中から 時時 黑いものが 飛び 出しいからからと 音立てて Mound の 四邊にころげ落ちる。

濛氣もなく，鳴動もなく，唯それぎりである。

今日の樣な 清明は 稀れ， と 案内者が云ふ。山の 上機嫌の日に 來合はした 私共は，心易く 眺める。まことお鉢の 穩やかさ，あの 赤い火の ちよろ燃える Mound のあたりでも，少しのあぶなげもなく 穩やかに，下りて 散歩も 出來さうだ。

不圖 私は 一つのものを 見つけた。白いものが ひらひら 坑内 火と朱にもゆる Mound 近く 飛むで居る。それは 一羽の蝶であつた。

私共は 火山國 日本の 火の國 肥後に 生れた者共だ。私は明治二十一年 私の廿一歳の夏 阿蘇に登つたが，其日は 風雨で，噴火口壁に 立ちながら 耳は 轟轟を聞き， 眼は 唯雲霧の白きを見て下つた。明治二十六年には，國民新聞の 特派員として，新に活動を始めた 岩代の 吾妻山の 噴火を 見に 上つた。明治三十八年の二月 紀元節には 私は 鹿兒島灣を ナポリ灣：見立つれば，即ち 薩摩の Vesuvio である 櫻島 頂に 上つた。それは 櫻島が 大活動を 開始する 九年前であ た。以上を外にしては，淺間にも，温仙にも，霧島にも，其他 日本國中何の 火山 にも 上らぬが，富士には 二度 上つた。二度目は 櫻島に上つた 其年の夏 妻と上つたが，頂上の風雨に ブランデイを 飲んで，私は 三日 人事不省になり，妻のお蔭で 生命を とりとめた。勿論 お鉢廻り どころでなかつた。今日程 山運の好い事は ない。私共は 何の惜氣もなく あけすけに 見する 山の心を 其靈の火を，心ゆくばかり 眺めた。

案内者は，火坑の 見た所の 心易さに 侮つて 無理に 下り，不意の 噴出に 一命を落した ブラジルの 一紳士の事を 話した。

大部分の 煙は 中央から 立つが，圍壁の 其處此處から 噴氣は 上つて居る。北西の口壁に 危く 壁ちかからうとして居る 建物は，先刻仰いだ 舊停車場の跡である。北東の方，此摺鉢に 向ふは，

更に 大きな 半かけの 摺鉢に なつて居る。それは Somma 山の 孔噴火坑で，歴史以前に 大活動した 跡で ある。總じて Vesuvio は 少なくも 二倍の高さで あつたのが，度度の噴火で 自分を 低くし 低くし，今日に 到つたものでゐるさうな。

Vesuvio 未だ 荒れず，Somma 活動をやめて，美しい 綠の山と 見えた 其麓から 半腹かけて，希臘の末，羅馬の初，人は 市を 建て，果樹を 植ゑ，華やかに 其生を 樂しむで居た のだ。それが 十六年の 警告的 雷鳴 地震の後，耶蘇降生 七十九年の 八月二十四日に，Vesuvio は 大荒れに 荒れに あれて，麓に 榮えた Herculanæum, Pompeii, Stabia の 三市は 一擧に埋れ，千五百年間は 其存在をすら 人間に 忘れられて 居たのである。

Herculanæum の 跡は，先刻 私共が 上つて來た Pugliano 停車場の 方角で，此處からは 見えない。Pompeii は 彼と 案内者が 指す 指さきを 見れば，それは 私共の 足下から 南に 流れ下る 山の線が 平地に下りて 綠になつて居る處に，ごちやごちやと 家らしいものの 見ゆる處が それで あると云ふ。案内者は 猶も 其南に 海近く 白い 建物の ちら ちら する邊を 指さし，あれが Castellamare で，昔の埋れた 市街 Stabia の 跡と 云ふ。

ぶうんと 大きな 山蜂の うなりのやうなのが 聞こえる。其方を 見ると，私共が 立つ 山と海の間の空を 眼八分に 物が飛んで居る。それは 飛行機であつた。Napoli の 方から 飛んで來て，見る見る近くなり 大きくなり 低くなり，Pompeii の 址近く 着陸し

た。昨夜眠れなかつた私は，白日の下，山の上からの展望に，眼かくらくらしさう。熔岩の片など 拾つて，ぽつ ぽつ 下りる。私共より 向ふに 往つて居た 露西亞人達も，私共の後から 來る。更に上つて來る人も ある。

頂上 停車場に 來ると，靴の塵を 爺さんが 拂ふて くれる。1L の 紙幣をやつて，索道車に乘る。下りる氣もちは，上るよりわるい。

(四)

觀象臺附近の Restaurant で，晝食。Dessert の 杏が うまい。好い眺望の家，一夏を 過してもよい處である。食を終へて 停車場に行く。片手 Grind organ を 鳴らし，片手を 口笛に 吹いて居る 男が居る。案内者の A が 私共に代はつて，金を與へる。

下りは早く，片時の間に Pugliano 停車場に 下りる。

今度は 別の電車で ナポリに 歸る。海水浴場 斷念し，それから 心憎い別墅が 沿道に 並んで居る。

其處を 過ぐると，やがて ナポリの 貧民窟。今過ぎて來た 別墅と あまりに 著しい 對照が 氣に障る。

停車場に 着いて，馬車に また 乘る時，唯有る 店の前に 大勢行列を 作つて居るのを 何かと見れば，煙草屋の前で 順番を待つので あつた。

其三

CAPRI の島

(一)

七月二十日。今日は Capri 島に 往く日だ，Garibaldi が流された島，"即興詩人" で 馴染の 琅玕洞を 見る筈に。

Aが 來て，八時半こ 私共は ホテル近くから 他の滯乘客と小艇に乘り，更に 灣内回航の 汽船に 乘つた。日曜で，滿員の游客。

九時船が出る。今日は また 無類の快晴。船が ナポリ をはなれ，對岸の Sorrento を 指して 乘り出すにつれ，ふりかへれば，丘に據り 海に接し 高低參差として 人口八十萬 伊太利 隨一の ナポリは，殘りなく 其姿を 私共に あらはすのであつた。ナポリの Virgil の墓 から，ナポリを 前景に Vesuvio と 灣の景色を眺むる 眺望は 一番好いと されて居る。私共は 未だ其墓こ 上らぬ。然し ナポリを はなれて，海の上から ふり かへつた ナポリも，美しい ナポリである。ナポリから ずうと Vesuvio の 麓にかけて，連珠の如く 小さな邑が 灣の東邊を 緣どつて居る。昨日 上つた Vesuvio が，今日も 穏やかに 私共を 見下ろしてゐる。烟も眞直に 上つて居る。

お雛樣のの樣な Tiny cup に 酒など ついで 船の物賣りが す

すめる。接待酒かと 虫のいい事を 思ふて 居ると，ちやんと 代をとられる。

妻は 窓から Vesuvio の Sketch を し，それから 向ふに かけて居る 伊太利婦人を Sketch する。其良人らしい 紳士が Aを介して 見せて くれと云ふ。失禮を詫び，Outline だけだと見せる。紳士は 失禮どころか 嬉しい事です と Aを以て 挨拶する。

Aは 五十で 其妻は 三十二，十一になる 男の子がある。A自ら謂ふ所によれば，細君は 良いレデイだが，七ヶ月前から 發狂して，今は 病院に居る。Aが 浮かぬ顏の 仔細が よめた。

ナポリから 一時間 南東に 灣を 横斷して，船は Sorrento にとまつた。藍色美しい水を 分けて 色色のホテルの旗を立てた小舟が，上下の客を のせて 群がる。

Sorrento は 濱と云ふもの 殆んどなく，海から 赭白い巖崖が壁の如く立ち，上には 赭，白，綠，さま ざまの色の ホテルが 大きく 小さく 並んで居る。絶壁には ホテル名を 表した Lift が 幾處となく 設けられて居る。後は 柑橘 橄欖 などの濃い綠か ずうと山懷に 入つて居る。ナポリ から ちら ちら 白い建物などの 見ゆる Sorrento は 此である。ツウルゲネフの "めぐりあひ" などに出て來る Scene，私共も 其ホテルの一つに 泊つて 見たくなつた。

(二)

やがて 船が 出る。

眼鏡を かけた 三十過ぎの 小柄の 日本人が，私共を 見かけて 挨拶する。下——君である。東京高等師範の出，ダンテ研究から 伊太利語の 研究を はじめ，ダンテに 牽かれて 伊太利に 來て四年，今は ナポリの大學で 日本文學を講じ，日本語を教授して居る事も，下さんの 江戸っ子肌が 伊太利人の 肌合に ぴつたり 合つて，首相 Nitti の爲には，日本に關する無官の 顧問になり，戰爭中は 伊太利軍の 第一線 に 進んで 塹壕の 中まで入つて見て，D'annunzio に 愛されて 飛行機に 同乘 したり，凡そ 日本の事とし 云へば，頼まれて 引受けぬ事なく，頼まれいでも 引受くる 伊太利人にも 日本人にも 無くてならぬ人で ある事は 追追に 知つた。今日は， 船上 突然の 初對面に， 下さんが 携帶の 寫眞機で 私共の 寫眞を 撮つた後，私共は 此界隈に關する 種種の話 を 聞くに止めた。伊太利の 西海岸は，十年に 一寸づつ 沈下し，カプリの島も 同樣である。Sorrento は，"Jerusalem delivered" を 書いた Tasso の 生れ 故郷で，Napoli は Virgil や Leopardi の墓を 有つて居る。Sorrento は，恍惚 縹緲として 夢見る樣な景色。山を越へて南面の海は 豪壯な 景色で，其處の Amalfi 附近の 小島が "Siren" の 岩である。Amalfi には，Ibsen も居て "海の婦人" を書いた。Gorky も居た。下さんは また 其アマルフイから 昔出た 一介の 漁師で ナポリ公國の 陸軍大將になり，果ては 非業の最期を 遂げた 俠客肌の マサニエルロを 輔隨院長兵衛を 紹介するやうな 熱心で 私共に 紹介した。

私共が そんな話を 聞いて居る間に，船は Sorrento を後に，今にも 海に 崩れ込みさうな 古い別墅か 碧 の跡や，橄欖の山，山上の別墅などを 左にしつつ，次第に Capri の 島に 近づく。前後二つの 嶺に分れて，Capri の島は 海から 峙つて居る。高い方の Monte Solaro は，海拔 1920 呎もある。

下さんは Capri の 島について 私共に語る。羅馬の 第一 皇帝 Augustus は，ナポリ人に Capri と Ischia の 島とを取り換へてもらつて，Capri に 隱居した。其子の皇帝 Tiberius は，十二の神を 祀る爲に 十二の 別莊を 島に建て，自身は Jupiter を祀つた山上の 別莊に 住んだ。逆鱗に觸れた 罪人などは，よく あの高い處から 海に 突落さした，と 傳へられて居る，と 下さんは 今 船が それを 左に かはしつつある 峨峨とした 岬角を 指した。

其岬角を 過ぐると，低い 鞍部には 綠茂り 人家がならんで居る。其向ふの 山上に，古城址の 樣なものが 見えるは，中世有名の海賊 Barbarossa が據つて 覇を唱へた處，と下さんが 教へる。

やがて 船は，島の "大港" に 着く。下さんは 他の連れ衆と小舟で 島廻りをすると 謂ふて，此處で 下りた。

（三）

船は 下りる人を 下ろして，また 暫く 斷崖に沿ふて 西に 進行を つづける。

海の色の 美しさ。それは 安南沖や 印度洋で 見た海の色とはまた 異つた 碧色で，本當に美しい。前者は少し 紫が 勝ち，此處のは 青が 勝つて居る。 練りもののやうに ねとねとして，手で掬んだら 手も染まり，白絹を 浸けたら 絹が碧地に 染まりさう。空氣が清く，空の色が 美しいから，海が斯く 美しいのだ。 私は 景色の好ゝ 日本でも，此樣な 美しい海の色を 見た覺がない。

船が 止まつた，唯有る 巖崖の前に。波に搖られて居た 小舟が十五六も 漕ぎ寄せる。小舟は 船頭共三人を 限られて居る。 私共は 一の舟に乘り，Aは 他の舟で 隨ふ。珊瑚の 頸飾りなど賣る 女の舟が 寄つて來る。 それを 後にして，私共の舟は巖崖の 一つの口に 向ふかと 思へば，蒼地一枡 最早 洞に 呑まれて 居た。

洞の内は 濶い。 長 53 米突，幅 32 米突，高 13 米突，而して 水深 21 米突ださうな。手で 水を 攪ぜると，手が 白青く輝き，水が 青白く光る。 暗い奥の岩に 黑い像が 立つて居て，いきなり水に ドブンと 飛び込むだ。 洞内の水は 螢の如く 光り，人の像が水中に 白く青く光る。ポツケツトの 銅貨をつかみ 出してやると，不承知を 云ふので，私は 暗い洞内で 兎も角も Cinque 一枚取り出して 與へた。

此洞から 羅馬時代の 別莊の 一つに ぬけ路が ついて 居て，今は ふさがれて居るさうだ。 先刻 下さんが 琅玕洞は 一方 光明ばかりでなく，西の方からも 光が入る隙がある と云ふ話をした。兎に角 動く時の 水の色は，實に 美しく 涼しいものである。

洞を出て，物賣り舟に 後見せつつ，船に 歸る。

やがて 洞見の 客を 收容し 終つて，船は 首を廻らし，大港に 錨を 下ろす。

小舟で 上陸。

（四）

カプリの島は 人口約八千，漁と 葡萄つくり，それから お客相手で 暮らして居る。

私共は 上陸すると，Cable car に 乘つて，葡萄や 柑橘の茂つた 傾斜を ずうと Capri の 本邑に 上つた。店があり，ホテルがあり，別墅がある。

Aは 私共を 一ツ靜かな ホテルに 導いた。 其處で 午餐を食べる。江の島あたりに 遊んで居る 氣もち。特に魚を注文したら，カサゴ 見たやうなものの 一皿を つけた。此處の 白，赤葡萄酒は 名高いもの さうな。二重に醉を 恐れて，私共は 飲まなかつた。

Parlor で 畫はがきなど 書く。遊びに 來たのか，逗留して居るのか，男女三四人の連れが 居たが，若い女の一人が "わたくし日本人は嫌い" と 云ふた。 それが 生憎英語で，私共の耳に分かつた。然し 日本人の私共も 時時 日本人の自分に 愛想を盡かすから，伊太利女に 嫌はれても，別に腹は 立たなかつた。 勿論嬉しくも

なかつた。

日ざかりの日は熱し，直ぐ其處のやうに眼には見えても可なりの上りになるので，私共は Tiberius の別莊跡も見に往く事をやめた。Aは別莊の間の狹い路を先に立つて，私共を Augustus Vill の公園に導いた。それは獨逸人の有であつたらしく崖の端近く腰掛があつて，其處から Capri 島の南面の海が望まれた。迫か下の崖に白い波が寄せて居る。海は眼がさめるやうな紅綠の色をして居る。瑣玗洞附近の海の深い碧色と，此處の海の純な綠の色とは，私共がカプリの島から持ち歸つた二つの美しい紀念である。

自然の Arch をした岩が，磯近く峙つて居る。Siren の岩と云ふのがあるさうな。然し下さんの話では，それはもつと Amalfi に寄つた半島の海にあるらしい。

私共はやや久しく此處の俯瞰の景を愛でて後，歩を返して町に出で，一の店で瑣玗洞の小さな油畫，寫眞帖や繪はがきを買つたり，れもん水をとつたりして，而して索道車の停車場に往つた。其處の Terrace から北の海を見晴らす。ナポリの西に當つて大きな島が見えるのは，帝 Augustus が此 Capri の島に換へてナポリの人に與へたと云ふ Ischia の島である。

會長に斑白の髯を垂れた，シヤツに股引赤帶と云ふ裝で跣足の爺さんが來て會釋する。漁師の Spadaro と云ふて，よく Model になるカプリの名物爺さん。

私共は Cable car で大港に下り，しばらく艀の出るのを待つた。白や紅珊瑚の Necklace を賣るかみさん達が五六人日本の婦人珍らしく，妻と眼顔の話をして居た。

やがて船は Capri の客を收容して，五時歸りはじめた。

下さんは私共が Tiberius の別莊すら見て居ない不熱心に少し興ざめて居た。下さんは連れの人人と小舟で島を一周したさうな。普通三時間で島廻りが出來る。瑣玗洞の外に赤洞，綠洞，白洞などあつて，中中景色が好いと云ふ。

（五）

船が Sorrent に着くと，ナポリに歸るお客の外に，小形の水上飛行機が一臺私共の船に曳張られて歸るのであつた。

崖の上の Sorrento を後に，夕風の海を船は快く駛せて行く。Vesuvio は夕日を帶びて茜鬧の山から金塵を噴き，ナポリは眩しさうに夕日を迎へて，然も追追はつきりして行く。

突然頭上に發動機の爆音が響いて，鵬の影ナポリに向ふと見れば，船に牽かれて來た水上飛行機が，自力で飛び出したのである。

下さんに別れて私共がホテルに歸つたのは，夕七時の頃であつた。

* * *

明くる日の午后，下さんは私共の狹い四階の室に，一人の伊太利人を連れて來た。前頭の禿げた柔和な二皮目の紳士。Raffaele Uccella と云ふ彫刻家。三十五歳になる。農家の子で，天才拔群の處から官費で美術學校を出で，今は錚々の名を成して居る。十月頃日本に行き，四五年留つて製作をして見たいと云ふ。私が妻の手縫ひの絹紬の寬濶な Gown を着て居る姿をつくづく見て，下さんに何か云ふて居る。下さんは N君が私の像を作りたいと云ふて居る事を傳へて，私共を嬉しがらせる。

下さんは尙 Napoli 擇りぬきの藝術家新聞記者の一團が，明後日の夕方私共を晩餐に招きたい事を傳へて，私共をますます悅ばせた。私共は明後後日の筈は羅馬へ立たうと思ふて居たのだ。それに明後日の招きは，誠に玉つて嵌めたやうなもの。ナポリの自然が美しくも，其靈に觸れずに去るは，なんぼう口惜しい事であつたらう。私共は悅んで其招きに應ずる旨を答へた。

其四

Pompeii 一瞥

(一)

七月廿二日。今日はポンペイに宛てた日である。見物などはしなくてもよいが，萬更見ないとさて氣が濟まぬ。兎に角往つて見やう。

少し贅澤でも自動車を飛ばして，と思ふたが，先日來ナポリの自動車掌が Strike をして居るので，今日は汽車にした。例の如く A 案內。

今日は空も少し曇つて居る。妻の言に從へば，人に化つた Vesuvio だと云ふ私も，昨夜來あまり安眠しないので，機嫌も頗る斜である。窓から覗く山の Vesuvio はそんなにひどく烟を噴いて居ない。

電車や船で往來度重なるので，Vesuvio の麓路は最早あまり珍らしくもない。一人の伊太利兵士が無賃乘車を發見されて，追ひ立てられ，妙な顏して下りて往つたのが，變つた車中の出事であつた。

ポンペイの停車場に下り，少し歩いてポンペイの發掘處に來た。

ポンペイ の 創始は，紀元前 約六百年。盛衰興廢の 幾代を閲して，羅馬の所領と なつたのが 紀元前八十年の頃 で あつた。羅馬帝國になつて，ポンペイ は 追追に 羅馬貴族の 避暑地になり，豪奢な別莊が 營まれた。其内 紀元六十三年に 大地震があり，ポンペイ は 一旦廢墟になつたのを，地震が止むと共に，再建された。それから 十六年目の 紀元七十九年の 八月二十三日に，Vesuvio が 大噴出を はじめ，三日に 渉つて ポンペイ を 降り埋め，逃げ損ねた程の 人畜を亡ぼし，建物を 埋めて了ふた。

それから ポンペイ は 地下に 忘られて，殆んど 千五百年の長きに渉つた。紀元 1592 年に 一技師が サルノの 川を アヌンチアタ の邑に 引くとして 偶然 掘り當てたが，其時は Stabia であらうと 思はれ，ポンペイ と 云ふ事は 分からなかつた。それから 約二百年を經て，1748 年に Herculanaeum が 發掘されると共に，ポンペイ の 探檢が はじまり，農夫が 鍬の尖に 彫像が 出て來たが 緣と なつて，懲役を使つての 發掘が 始まつたが，一向氣が入らずに のび のびになり，1860 年 に到つて やつと 眞劍に 發掘が 始まつた。云はば ポンペイ が 再び 世に 出はじめたのは，六十年來の事で，古ポンペイの出現 即ち新伊太利の歴史だ。

（二）

私共は，ポンペイ の 西門 海の門から入る。今 二哩も はな

れて居る サルノ の川が 昔は ポンペイの つい近くを 流れ，ポンペイ から 海までは，一哩を 出でなかつた さうな。アアチに なつた 可なり急勾配の 阪路を 上ると，直ぐ右手に 小さな ポンペイ 博物館がある。入つて見る。硝子箱に 青黑い ざらざら した人間の死體が 幾箇，ままざまの 態度を して居る。此は 發掘の當時，凝灰が 自然の Death mask の型になつて居たのに，石膏を流がし込んで，髣髴と 二千年前の 臨終委を 再現せしめたものである。犬の死體が 人のより 更に あはれだ。陳列された 凡百の器具工品は，單に骨董としても 面白いもので あらうが，今日の私の頭の狀態では のんきに 翫賞の 氣にも なれぬ。

唯一人で 月夜に 歩いたら，いや 白晝にでも 凄いで あらう。二千年の 市の 死骸は，好い氣味の ものでない。ポンペイ址とし測定された 面積は，約 468,500 餘坪で，既に 發掘されたのは 三分二にも 滿たない と云ふが，歩けば 可なり濶い。二千年の昔に溯つて，想像を 逞ふしながら 歩いたら，何日 かかつても 容易に見盡せまい。然し 今年 今月 今日の 不快な氣分の下にある私は，妻を促がし，A の後から 迷宮の樣な "死の市" を 導かるるままに唯歩き廻はる。先日 讀んだ " Last days of Pompeii " などの Scene を 思ひ起す 氣にも ならない。

稀に 遊覽の客に 會ふ。重なる家には，番人が 鍵を もつて居る。然し 要するに "死の市" は 寂しい。

三角の Forum は，三角形が 面白い。色々の 神殿の廣場が，

廢墟になつても，くつろぎを 與へる。埃及の神社などが ある。裁判所で，判事が 宣告する 座席の下が 窖になり，天井の孔から窖内の被告が 宣告を 聞いたなどは，妙な感を誘ふ。案内記によれば 此窖内には ごつの骸骨が あつたさうだ。何樣な罪人で あつたか。

街幅の 狹いのが 著しい。車馬道は 二臺と 車が並べない。左右は高く 歩道になつて居る。處處 街の 要目の處には，向ふ側へ飛石がある。

石の Fountain が 處處に 殘つて居る。皆が甕をつけ，手をついた 跡が 凹く なつて居る。

パン屋の 竈は，火が 消えて 二千年。酒屋の 店頭に 酒壺酒甕が 今も 並んで居る。

掘り出された ポンペイ は，青天井の下にある。唯 處處 稀に瓦を葺いて，昔の態が 復活されて 居る。

大小劇場の跡。風呂は 可なりの 大仕掛で，二重壁の間を 蒸氣を通じた 蒸風呂の 設備などがある。

貴紳富豪の家も 二階が普通，三階は 稀である。四角な前室の中央に 雨水の溜があり，奥が 回字形になつて 中央に庭園噴水をとつてある 家の 構造は，何れも 似たものである。主人或は 主婦の 書寢室が 小さい。一番不快なは，庖厨に 便所を 設けた 事である。饗宴室に 小溝のやうな ものを 通じてあるのは，羅馬人の惡習慣で，馳走滿腹り後 直ちに 吐する爲，と 云ふ者もあり，さ

らでない と 云ふ者もあるが，何れにもせよ 感心した ものではない。

或家の 窖には，發掘當時の ままに，骸骨が 五つ 殘してある。男のも，女のも，子供のもある。壁に 爪痕が 歴と として 居るのは，窖に避難した彼等が また 逃れ出んとして もがいた 苦の跡であらう。其頃の ポンペイ住民は 三萬内外 と假想される。發掘の死體が 案外 少ないのは 市の滅亡は 一瞬の間で なかつたので，逃げる 餘裕が あつたからで あらう と 云ふ。

富豪の家には，何れも 財寶珠玉を 入れたと 覺しい Strong box がある。それが 硝子で 蔽はれてある。寶匣に 何か白つぽいものが 纏ふて居る。唯見ると，それは 新しい 蛇の ぬけがら であつた。寶のある所に 心もまた ある と云ふ諺通り，二千年前のポンペイ人の 財寶に對する 熱念を 具象したやうな その蛇のぬけがらを 私が 熟と 見て居ると，“澤山 蛇は居ますよ” と Aが云ふ。

（三）

暑く，疲れた。廢墟の石壁から，木苺が 長 ゝと とげだらけの枝を さしのべて，眞黑に 實が 熟して居る。私共は それを摘んで喰ひ，敷石の間から 咲く 野花を 摘みつつ，Aの後に從ふ。

四辻の やや 潤 處に出る。

A が 聲を落して，遊廓の跡 御覽ですか と，私に 問ふ。見

ない，と 答へる。

Vetti の家は 美しい。壁畫は 生生しい程に 新しく，床の Mosaic も美しい。Cupid の 百態は 唐子遊びを 思はする。自分の家に もつて來ても 憎くはない 可愛い もノである。中庭には，昔を想はす可く 草花や Laurel が 植ゑられ，小さな噴水が 白い水を 飛ばして居る。壁畫などの 殊に まざまざ と 新しいのは，地震後 再築して 間もない頃に 埋められたから でも あらう。まるで ポンペイの市を 新しくして 二千年後に 見せん爲に，埋葬前の地震は あつたやうな ものだ。

Vetti の 家は，三階に なつて居る。設けられた 階段を上つて，屋頂に 出る。好い展望臺で，頭蓋を 剝いだやうな 死の市が，一目に 見渡される。北面すれば，Vesuvio は 直ぐ 其處から 見下ろして居る。今日も 好晴で，薄い煙が 眞直に 上つて居る。ちつとも 二千年前 こんな 大袈裟な いたづらを したりげな顏を して居ない。然し つくづく 見て居ると，ナポリも 今に さうなるかも知れぬ，否，あなたの處の 富士山が 醒めたら 東京も こう ならぬものでもない，と 山が云ふやうにも 受けとられる。

街の一所に，板圍ゐをした 處がある。それは 今發掘して 居る 處なのである。戰爭中 一時 中止されたが，今また 始めて居る。圍ゐ隙から 覗くと，其處には 發掘工夫の 屯があつて，多少の 掘り出しものが 散らばつて居るが，鶴嘴を 抑ふて居る 容子は 見えなかつた。ポンペイの 全面積 百五十億町歩の内，まだ 三分

一强は 發掘を 待つて居るのだ。

鎖でつないだ 番犬を 玄關の鋪石に Mosaic に して，"Cave Canem" "犬寄用心" と しやれた 所謂悲劇詩人の家は，また 見ものの一つで，それは ナポリの博物館で 私共が 感心した Dancing Faun が 其中庭の 中心を飾つて居た Faun の 家と共に，名高いものであるが，見物に くたびれて さうさう 見る氣にも ならぬ。

私共は 最早 "死の市" の 見物に 飽いた。

見物を 打切つて，"死の市" を出で，停車場左くの Hotel Suisse で 午餐。

私共は，多行松などと 共に 南伊太利に多い 傘松の ひよろ高く 青空を 撫でて居る近景を Vetti の 家の 展望所から 見たが，Amphitheatre には 往つて 見なかつた。新らしい建築ながら 旅客の誰も 來て見るといふ 美しい寺院 も 近邊には あるさうなが，それも 見る氣にならぬ。寫眞，繪葉書など 少し買ふて，A を促し，馬車で Maccaroni の 產地と云ふ Annunziata に 往つて，其處から 汽車に乘り，午后四時 ナポリに 歸つた。

A は 頻に Amalfi 行きを 勸める。然し私は 彼所見物も 最早澤山になつた。明日 下さんの 伸電の 晩餐を打止め に して，明後日は 羅馬へ 轉興を 移す事に する。羅馬の Hotel に 打電して置く事と，明後日の朝 停車場まで 送りに來る事を 托して，A を歸へす。

其五
Napoli の一夕

(一)

七月二十三日の午后七時近く，私は 紹の紋付羽織，袴の上に夏マントを着て，フエルトの草履をはき，妻は白襟 蒋オリイヴ縮緬の單衣の上から セルの道行きを着て，同じく 護謨草履と云ふ裝で，私共の Hotel Continental の 四階から Lift で 玄關に下りた。玄關側の 小さな客間には，下君を初め，一昨日 下君と 來訪した 彫刻家 U君，それから 郵便集配から 身を起して 今は 流行唄の作者として ナポリは おろか 伊太利全土に 其作歌は 歌はれて居る まだ若い Mario 君，畫家 Gariza 君，詩人 Yenco 君，外三名，何れも 三十前後の ナポリ擇りぬきの 藝術家達が 待つて居て，私共を 迎へた。U君が 一同を代表して，一つの花束を 妻に贈つてくれる。白い Carnation と 白い 山梔子の花を，綠白赤伊太國旗の三色に 染め分けた 細い リボンで 結はへた ものであつた。Brindisi の 鯛は 偶然で，此花は 生きて居る。私共は 悦んで 此贈物を 受けた。妻も 私も Italian self taught で "Tante grazie —— 多謝" を 言ふ外に，其人々の國語で 謝意を述ぶる事が 出來ぬを もどかしく 思ふた。せめて 佛蘭西語でも 話せたら，

と 思ふたが，急場の要には 立たぬ。諸君は あまり 英語を 話さない。

贈物の花を 水に生け置くべく Boy に頼むで，私共は一同の後について ホテルを出る。小宴の席は ナポリの市の 西のはづれで，電車でも 往けるが，興趣の爲 特に 舟を 擇ばれて居た。先日 Capri に 往つた時の やうに，ホテルに近い 埠頭から 私共は 小舟に乘つて，それから 三角の帆を 張つた やや大きな Yacht に移つた。

(二)

Yacht は Castello Dell'ovo を 後に見て，やや沖へ乘り出す。夕日の 光は 今ナポリ灣に 溢れて居る。灣に沿ふ 市々邑々，一として落暉を 帶びて 眩しく 輝やかぬはない。Vesuvio も 腹一ぱい夕日を 浴びて，茜の色に 燃えんとし，風微にして 直く上る烟も，金香を燻らして居る。近いナポリは 山の上から 水の 滸りまで，大小 さまざまの建物，ことごとく 夕日 の金に鍍せられて きらきら きら 日の都とばかり 輝やいて居る。

山の上に ドツシリと座つた 一のCastel は，今 監獄に使はれて居る。下さんは それを指して，曾て其處に 監禁された伊太利遊女の一人を 慰問した話を 私共に 聞かした。その女は 俳優の 宗之助に 肖た女で，日本の若い船員と 戀に 落ち，港から 港へ行く

其船の後を追ふて Livorno から逃げ出して 此ナポリに來て，捕へられて 獄に 入れられた。何と云ふと 直ぐ 持つて來られる下さんは，此時も 頼まれて 女を慰問に 來たのである。伊太利女の 情熱は まあ そんなものです，と 下さんは 誇り顔である。

下さんは また，ナポリの Virgil の 墓に近い Piedigrotta のトンネルの 年祭に 當年の流行唄が きまるので，ナポリの唄は やがて 伊太利全土の 流行になる事を 話した。Mario 君は 中でも Popular な 作家で，最近の作には，戰爭を歌つた " Piave の河" ちよつとしたものを盜むでも 刑罰があるに，私の大切な心を 偷んだ女に 何で 罰がないのか，と 謂した "女賊" などがある，と 下さんは ちよい ちよい 要領を 利共に 話した。

詩人Y君は，日本の詩歌の 研究紹介者で，現代では 與夫人を特に 紹介したさうな。私共が 出發の時，妻に 與夫人から 歌が贈られ，其返歌を妻が 紀州沖から 無線電 でした事を 私は 話した。下さんが それを 披露すると，舟中皆興じ，U君は 手を拍いて 喜んだ。

私を 下さんが 何と 皆に 紹介したか，私は知らぬ。手ばしこく 日本のトルストイでは，トルストイも氣の毒だが，私も可愛さうだ。トルストイは トルストイで，德富健次郎は 德富健次郎だ。其德富健次郎は 齢五十に及んで，唯一の しつかりした作物も 出しては居らぬ。彼は肉的に まだ 子を もたぬ。我子と誇るべき作物をも 有たぬ。彼はまだ 子を生まうと 思ふて居る。自分の仕事は

これからだ と 思ふて居る。彼は 日本でこそ 少しは 名を知られて 居るが，日本を出ては 全くの 無名氏である。下さんの話によれば，伊太利の赤本に "Nami e Takeo" と いふのが あるさうな。それは 不如歸の ほんの梗概を 傳へたものと 云ふ事である。そんなものを 諸君が見てないのは 當然である。私は 私の不逸弦が私を もどかしい位置に 置いた事に對し，じれつたくて ならぬ。

然し 若い 舟中皆の 隔てはない眞率な態度が，私を 固くさせなかつた。

下さんが 話の中に，一の珍聞が あつた。それは D'annunzio が 九月頃 五臺の飛行機を率ゐて，日本に行く と 云ふ事である。下さんも同乘，東道の主人と なるといふ。"今頃は 日本で 騒ぎで居ませう。" と 下さんは 騒がずに 曰ふた。

話の中に，日落ち，風は止み，Yacht は 一の埠頭に着く。

(三)

上陸した處は，ナポリの市はづれの 漁村で，水泳場がある。馬車に乘せられ，また 下ろされ，電車を待つ。日本服が 珍らしいので，私共の周圍は 忽ち 人の山を 築いた。老幼，男女，皆顔を見，足を見，珍らしさうに 悦んで居る。和裝は 一人，日本人は 三人たが，連れの ナポリの ちやき ちやき七人男も，矢張日本人と見られて，見られる側に立つ。Mario 君が 何か言ふと，偖ては と

群衆が 皆笑ひ興ずる。 背丈，顔色，髪の色に，そんな 類似が 日本人と 伊太利人の間には あるのだ。

やがて 電車が來た。

十分餘も 走ると，私共は 電車から下りた。 而して 電車通りに面した 建物の一つの階段を 上つた。

私共は 夏外套と道行を脱いで， 紋服姿になり， 二間の廣間の一端に 設けられた 長い卓に ついた。

此處は，ナポリの市の西はづれ， Eの字の下端に當り，小高い岬をなして，遊樂地の 一つらしく，Restaurant や Hotel などが數多ならんで居る。灣を一目に 見晴らす。日落ちたあとの 夕風の海は 白く光り，Vesuvio の煙も 穏やかに 立上つて居る。

外は 明るいが，内には 最早電燈が ついて居る。

白襟には Olive 色縮緬の 無地の單衣， 秋草を薄墨に出した白い羽二重の 帶には 翡翠の帶どめ，——好い趣味です，色の配合がまことに好い，と 下さんの通辯で 皆が ほめる。

Maccaroni が 出る。 Maccaroni を 食べる時は， Napkin を子供の如く 頸までかけるが例で， あさりの剝き身を 入れたのが通つたもの，Maccaroni は 小さく硬く，半煮えが通です，と 下さんが教へる。

私共は 氷を和して Mineral water を 飲み， 諸君は 葡萄酒の盃を 擧げる。M 君が しばしば 私共の Cup に 注いでくれる。

何か 好きなものを と 問はれ，魚 を所望する。小魚のフライ

Raffaele Uccella
Mario De Vellis
Napoli 23 luglio 1919
DA FOTOGRAFIA DELLA
COMPAGNIA FOTOGRAFICA

や 烏賊のフライが 出る。

(四)

私共は 且食ひ 且 飲み，諸君の話に 笑を酬ひ，其間には 次第に暮れ行く ナポリ灣ノ景色を 眺める。空の 美しさが，私共の心を 奪ふ。それは 埃及の夕空より 少し薄く，從つて より鮮明な濃い琉璃で，見れば 心も 其中に 消え入るやうな 美しい空だ。花やかで，清むだ空だ。私共は 今夕 はじめて 所謂 italian sky の美しさを見た。それは 琅玕洞付近の海の色の 碧と，カプリの島の南に見た 綠の水と共に，忘れ難い色の饗で ある。

ナポリ灣の 長い繪葉書が 持ち來られ，諸君は それぞれ 署名する。M君が 短詩を書く。下さんが それを 英譯して 私共に 見せる。

”我儕は すべての 苦痛を 忘れん，

歌人の 海を 我儕は 有てば。”

Sea singing と 下さんが 譯したを，M君が “Singer sea” と した方がよい，と云ふ。

Singer は 海ばかりでは なかつた。眼には見ても 海の音は聞こえぬ此 Restaurant の 二階に，私共の 宴の半から 歌者の一組型の如く 現はれて，Violin や Mandolin に 合はして，太い腹を突出した男が，太い好い聲で 歌ふて居る。私共の外にも 幾組の

客が居て，食べながら 聞いて居る。歌ゞは M君の顔を見て，M君の作歌を 盛に 歌ひはじめる。歌詞の分からぬが 遺憾である。 曲終ると，席の誰やらが 金をやつて居た。

M君は 私共へ 馳走に，自作の歌を 歌ひはじめた。席の一人が ピアノを弾く。 其側に立つて 此方に向ひ，M君が 頻に歌ふ。それは 矢張戰爭を 歌つたもので，聖母マリアの像の前に 燈明が一つ ともれて居る，と 歌ひ起してある，と 下さんが 囁く。

私共も 何か 酬ひねば ならぬ。

通譯は 後で 一まとめに 下さんに 托して，私は 立上り 私の國語で 一場の 挨拶をした。

“私共は Brindisi から 上陸して，此ナポリに來た。途中も 日本らしい感がした事 一再では なかつた。 日本の山水は 美しい。ナポリに 來て見ると，伊太利の山水も 實に美しい。Vesuvio に上り，カプリの島に遊び，成程 ナポリを見れば 死んでもよい，と云ふ 伊太利の諺も 思ひ合はされた。然し 美しい山水を 見たばかりで，其靈に觸れずに 過ぎ去るのは，畫いた美人を 見て過ぐるやうなもので，物足らない 限りで あつた。 今夕は ナポリの魂である 諸君に 招かれて，私共の滿足 これに過ぎぬ。明日は 安心して羅馬に 立たれる。

私共は 先日 Vesuvio に 上つた。Vesuvio や Etna をもつ 伊太利は 西の 火山國で ある。休火山の富士を冠にして居る 日本は東の 火山國で ある。殊に 私共は，其日本の火山國中でも 有力な

活火山をもち，歴史以前の 噴火跡として 世界隨一と 云はるるものをもつ 阿蘇ゝ肥後に 生れた 人間である。人間は兎角 完成したもの，固形物，甚しきは死物として 地球を 考へたがる。自然が生きて居，未成で居，不測の變化を 豫期して居る事を 具體的に 示すものは，火山である。地球が 未成品である如く，人類も 勿論未成品である。何れの國にも，火山がある。何人の靈魂も，火山である。對獨戰は 止んだ。然し ヨリ大なる戰は 之からである。 それは 世界を通じて，新天新地に ならんとする 火山の活動である。勞働問題，婦人問題，人種問題，色色にそれは現はれつつある。造り，改造し，絶えず 面目は 變つて行く。 自然は 恒に新で，新になるもの 卽ち 藝術である。私は 先日 Vesuvio に 登つて，噴火坑を 見下ろした。稀な 清明靜和な日で，朱の火を時時 ちよろ ちよろ 吐く 噴火孔から 噴き出す石が， Mound の側を ざら ざらと 落ちる響も，分明に聞かれた。 山巓に立つて坑内を 熟と 見下ろして居る內，不圖 私の眼を ひいたものがある。 白いものが 其噴火坑內に ひら ひら と 躍つて居る。それは 一羽の 白い蝶ゝであつた。怒れば Pompeii を 唯一息に埋める Vesuvio も，靜かな時は 長閑に 蝴蝶の舞を 舞はせる。火山と 一羽の蝶——何と云ふ懸隔，而して何と云ふ調和。一方に 火山をのせ，一方に 一羽の蝶をのせて，自然の秤は 正に 平である。火山の蝶——威力と愛，男性と女性，自然の二面を 象徴して，意味長いものである。 何樣な危地にも 樂地がある。如何に急遽な場合にも 客觀の 餘裕を 不可

思議な人の心は 有つ。其處に 藝術が生れる。火山の蝶は，殊に伊太利に ふさはしい。

光榮ある過去を 有つ事は，往々にして 朽く石，頽の攪臼と後繼者の爲には なり易い。政治的に 古の世界を統一した 羅馬帝國，それが 過ぐれば 法服した覇王の 羅馬法王，ダンテ や ボンチ，ミケランゼロ，ラフアエル を 有つた伊太利は，殆んど あまりに 輝やかしい過去を 有つ。然し 伊太利は 過去の重荷に 壓倒さるべきではない。現に伊太利は 自ら新にしやう と もがいて居る。Vesuvio の烟が 上る間は，伊太利魂は 燃えて居る。新伊太利の 新藝術を 私は 期待する。

國交を溫めるに，所謂外交機關の所作は 知れたものである。心と 心を 結び，血に血を 通はすものは，藝術であらねばならぬ。其意味に於て，ダンテに率かれて 伊太利に來て 身を以て 日本の文學を 傳へつつある 下君の如きは，日本が特派した 無官の使節と 云はねばならぬ。聞けば D'annunzio 君も 飛行機で 日本に 往くさうだし，此席に居らるる U 君も ゆつくり 日本に 行かるるとの事，喜ばしい事である。日本も 相應の過去を 持つて居るし，山水も美しいが，要するに 何も これからの事で，現在の日本については，諸氏の失望を 私は恐れる。然し 皮相に 囚はれず 生きたものを見る眼は，必凡百の不完全，幼稚，亂雜の内に，活きて働く生命 を 見てくれるだらうと 思ふ。"

私が 話して居る間，L'illustration の 通信員である 畫家の G

君は，紋服袴の私を 鉛筆で 寫生した。而して それを 妻に 示して，批評を求めた。妻は もつと立派に 描いて欲しかつたかも知れぬが，Model は それで 滿足を 表した。而して 小學二年の筆跡で，傍に 署名した。

下さんによつて 通譯された 私の挨拶は，わるい印象を 與へなかつた。下さんの 通譯が終ると M君が 下さんを 通じて 斯の意味の言葉を のべた。

"大變 感動しました。"

さうして あとで 電車にのる前に 改めて 私に むかひ M君は 訛りがちの英語で，"一同に代はり，お禮を申します。"と 挨拶した。

皆好い 機嫁で 立ち上る。下さんは 稍に 足もとが 少し危ぶまれる程に なつて居た。

（五）

滿員の電車に，はなればなれに 乘つて，妻の外は 皆立往生する。ホテル附近で，注意されて下りる。下さん外二名が ホテルまで 送つてくれる。

ホテル玄關で 二人に別れ，三人は Lift で 四階の私共の室に歸る。

此戰爭について，何か 私が書いたものが あるか，と 先刻の會衆の一人の 新聞記者が 問ふた に 對し，私は 少し 言及してあ

る"新春"を以て答ふる外はなかつた。下さんは未だそれを見て居なかつた。私は,

"山水美しきナポリに來て,思はずも其處に年來住みて日本と伊太利の情感疏通に骨を折らるる下君に會ひ,君の心盡しにより ナポリ屈指の藝術家數氏と一夕の歡を借にしたる紀念として"

と Fly leaf に題して,一本を下さんに贈つた。明日は大學が忙しい日と謂ふので,私共は懇に握手して下さんと別れる。

* * *

七月廿四日。今日はナポリを立つ日である。女中の Katie に妻が 30L やつたら,三十女悅んでいきなり妻に飛びついて Kiss した。これで此行出發以來妻は Kiss を三つ博する。第一がテベリア湖畔のシリア婦人。二番目がエルサレムで Miss Claridge。今度が三度目である。

案內者の A が Testimonial に書いてくれと出す。書いてやる。而して此方の Album にも書かせやうとしたら,字が書けぬときまり惡るさうに自白する。早く親にわかれ,これんぼかりの時から自活したので,學校にも行けなかつたと,A は自分の腰きりの高さを手まねで見せた。

馬車でホテルを出る。

雨が降り出した。

Corso Umberto の通りを行くと,綠色の表紙の本を手にした人が傘もささずに歩いて來る。大學に出勤がけの下さんであつた。綠色の本は,"新春"を讀み讀み歩いて居たのである。私共はここに二度目の別を下さんに告げる機會を獲た。

中央停車場に着き,兎に角車室に納まる。

頃日來何角と面倒を見てくれた案內者の A を犒ひ,諸拂を濟ました後,其發狂した妻に花を,子に菓子を贈る可く,100L 札一枚を A に與へる。

悅んで A が去ると,やがて彫刻家の U 君と詩人の Y 君が,昨夜の人人の總代で見送りに來てくれる。昨日贈られた花束を妻は車窓から示して,あらためて感謝する。クチナシの伊太利語を手眞似で問ふ。莞爾ゝゝした U さんが何とか云ふたが,忘れて了ふた。私共は車窓から手を出して,兩君に握手する。Y さんに "Addio。" U さんには "Au Revoir"——それは "何れ日本で" を意味しての。十月伊太利を立てば,私共より餘程早く U さんは日本に往つて私共を待つ事になるのだ。

汽笛が鳴る。汽車の上と下とで,四人は目禮をかはす。

今ナポリを後に驛を出る汽車を目送して,朝の雨のぽつりぽつり降つて居る無蓋の歩廊に,釜底形の帽を振つて居る莞爾ゝゝした額の禿げた U 君の顏が私共の頭に殘つた。

第四
ROMA
其一
羅馬へ

(一)

七月廿四日の午前十時，汽車は ナポリを後にした。淋しい心になつた 私共は，今其北の裾野を通りつつある Vesuvio を求める。雨煙る野の末，Vesuvio は 雨雲の間から 青い姿を 少し現はして，私共を 送る。

小麥は 苅られたばかり。麻の畑が つづく。

車室は 狹い六人詰。中氣病みの 六十男と それを扶ける 三十左右の其子。他の六十近い男。四十餘の Barrister。Barrister は 此戰爭で 伊太利は多大の 犧牲を 拂ひつつ 何の利益も獲ない，といたもの こぼして居たが，其内 彼は 食堂車に往つた。

パレスチナの ゼニンから ナプルスまで 私共の馬車に 便乘した 黑眼鏡の男を 思はす 肥えた爺さんは，網棚から 濶口の Valise を 取り下ろす と，先づ 謹謨の Gown を 被り，皿や折込みの

ナイフ，フオグ を 取り出し，パンや 鹽うでの鷄腿，Orange に 菓子，瓶詰の水など，次次に出して，午餐を はじめた。あの Orange は 屹度 自園のでせう，と 妻が囁く。

私共も 食堂車に 往かうと したが，ボギイ式の車でないので，往來上下の面倒と きはどさを 厭ふて，やめる。爺さん 菓子を妻に すすめる。辭して，食籠の Chocolate など 出して，口を 欺ます。

雨は 追追止み，汽車は 高からぬ山，深からぬ 谷の 濡れた綠の中を 行く。蕨がある。野ひなげし が 咲いて居る。紫の花がある。時時 峨峨とした 巖山の 上の 古城址を，伊太利らしく 眺める。

(二)

羅馬が 近くなつた。

羅馬の名は，やはり 私共の心を ときめかす。

日本を出て以來，掠めて通つた 支那にしろ，印度にしろ，少しは滯留した 埃及にしろ，パレスチナにしろ，また 其海を通つた 希臘にしろ，此伊太利にしろ，何れも 過去に光つた國だ。古い國だ。古い國の 古さを 唯賞翫に 私共は 來たのではない。古い文明の 墓參に 私共は 來ない。古い國に 如何な 新しい 生命の芽が ふいて居るか，を 見定めれば 足りる。

然し羅馬はやはり羅馬だ。"天下の道は羅馬に達す"だの，"羅馬は一日にして成らず"の，"羅馬では羅馬人に倣へ"だの，"永遠の都"だの，讀むだもの聞いたもの想像したものが，今其處に近づくに隨ふて頭の中に出て來ては，私共の心をときめかすのである。

ナポリから一路せせつこましい山谷を通つて來た汽車は，夜が明けたやうに濶とした處に出て來た。足下から沃野が開け，遥か向ふには連山起伏して，其處に都があり氣である。これ太古の海底と云ふCampagnaの野，羅馬は其の野末山の下に蹲つて居るのだ。

葡萄畑の一面に連なる野を，爪先下りに汽車は北西に走る。

向ふの山が近くなる。山の下の羅馬が午後の日にきらきらと現はれて，遥ゝ眼の下で成長する。

羅馬を廣告する古の高架水道の跡を眺め眺め，汽車は生きた羅馬の硝子張りの停車場に着く。午後三時。

ナポリから打電して置いたので，近へに自動車が來てた。荷物萬端をHotelの者に托して，私共は自動車で直ぐExcelsior Hotelに往く。

其二

羅馬日記

(一)

七月廿四日。午後四時少し前，Excelsior Hotelに着く。羅馬の北部Pincio公園に近く，皇太后離宮と相對した著名なホテル。能樂の猩猩面のやうな顏をした帳場の男が，私共を案內して，二階の居間附の室を見せる。一日75Lは少し手重なので，Bath附45Lと云ふ室があく迄，127番に納まる。裏通りに面した二階。窓は一つしかないが，住むに不自由な事はない。並べればSofaになり離せば腕かけ椅子になる腰かけも，二つのBedも美しい。洗面の水が一一女中によつて運ばれるのが，羅馬としては不自由である。電氣時計が壁に默つて四時を示して居る。簡便正確だが，耳にもの言はぬのが物足らぬ。

七時半，羽織，單衣，草履で食堂に下りる。立派な食堂である。葡萄酒に砂糖を求めたら，パラフイン紙の小さな袋に茶匕二つ程の砂糖を入れたのを一人前としてくれた。砂糖飢饉を覺悟する。

(二)

七月廿五日。日本から持參の 五千圓足らずの 信用狀も，エルサレムを 手はじめに，坡西土や ナポリ と 追追に 引出して，殘り少なに なつたので，朝餐後 Taxi 馬車で 先づ 中央郵便局に往き，文淵堂に 三千圓の電報爲替要求を 打電する。出版業者の中でも 日本一の 金もたず 借金持ちの 文淵堂に 金を借らうとする 此方も 日本一の 物好きかも 知れぬ。

それから 日本大使館に 行く。あたりも あまり美しくない Gesù の 街に 面した Court を入つて，Lift もなしに，彫像などの 立つて 居る 階段を 大分 上つて行き，それから 玄關番の伊太利人の 案内で 狹い通路，危急な 小階を 上つて 事務所に通る。大使は 未だ 巴里に居るさうで，代理公使の 今さんの室に 私共は 通された。今さんは 私が 飛び出した あとで 同志社に 居た人で，外交官となつて 年久しく，伊太利も これで 二度目さうな。

西園寺さんも 十九日に 歸朝の途に上つたさうだ。何と云ふても 青島を 收めたは 西さんの力，と 今さんは 語る。

講和會議の中，亞米利加の 差出で 伊太利が肝癪を起し，講和委員が 席を 蹴つて 一旦引揚げた事や，日本も 青島では 危く伊太利の 轍を 踏む處であつた事の消息，人種平等案が 時期尙早の名目で 葬られた事などの 消息を聞く。

日本が 歐羅巴に來ても 白耳義 伊太利程にも 中となれまい，と 今さんは 悲觀して居る。

伊太利の議會は，非戰說であつた。然し 國民が 戰爭を欲した。それには D'annunzio が 與つて 尤も力がある。戰後の衛には，Nitti が 双肩を入れて居る。四十左右の 有爲な男で，戰爭で儲けたやうな富豪から ドシ ドシ 取り上げて 財政の欠を 補ふなど，思ひ切つて てきぱき やつて居る。

大使館から 馬車で 書肆 Finale に 往き，羅馬の地圖，案内記，英吉利新聞など 買つて ホテルに 歸る。馬車賃 30 L に上つた。それは 長待ちの爲ばかりではなく，妻は 馭者が Taxi metre に 逸早く 毛布を 打被せたのを 注意した。

午餐後は 大使館から 一抱へ 借りて來た 日本の新聞を見る。去る 四月に エルサレムで 三月初迄の 新聞を見た 以來，三月ぶりに見る 故國の消息である。竹田宮さんを初め 色色の人が 死んで 居る。太刀山友綱が 出羽に負けて 退隱する。支那の 梅蘭芳が 來て 踊つて居る。耶蘇出臨問題が 基督教界を 騷がして居る。

先刻 今さんの話では，米が 圓 に一升に なつたと云ふ電報が來たさうだ。昨年の 米騷動が 起きた 時節だ。

久しぶりに 新聞で 日本に 歸つて，鬱陶しい 沈んだ 氣分になつて了ふた。

夕食後 讀書室にかけて居ると，四五人の 露西亞人がやつて來た。背の高い 若紳士が 自ら語る處によれば，海軍大將の子で，十

歳の子供の昔 長崎や 東京に 一年ばかり 居た事がある。私共の キモノ を ほめる。

Bolshevikiを 避けて，皆 こんな處に ぶらぶらして居るのだ。

羅馬の季節は 冬なので，平時も 夏は 閑きうな。今は 戰後で，却て 雜多な客が 入り込むで居る。

(三)

七月廿六日。柏谷の生活の 延長である 私共の旅行は，飽くまでも 氣まぐれ旅行で，Programme などつくつて 見物の義務は一切 負はない。羅馬とても 同斷である。然し 何處に 往つても，成る可く 大觀は して見る事に して居る。今日は 其處の屋上から羅馬を 見下ろすべく San Pietro に 往く。

電車は 四方に 通じて居る。然し 勝手が 面倒なので，今日も Taxi 馬車で 出かける。市の西部 Tevere 川の 彼岸 Vaticano 丘に 東面して San Pietro は 立つて 居るのだ。

濁水漫く流るる Tevere の 川に 架した 石橋の 一つを渡つて，手長猿の 兩手のやうな 左右の 廻廊に 抱かれた 寺前の 廣場に來た。廻廊の上には 耶蘇教の 五百羅漢式人形が ずらりと 立つて 居る。廣場の中央に，Obelisk が 一本立つて居る。羅馬帝國時代に 埃及の Heliopolis から 取り寄せたのを，羅馬法王が 此處へ据ゑたのである。去三月 私共が 往つて見た あの Heliopolis の

Obelisk の 兄弟なのである。斯樣な處に 出世するより 埃及に歸らう 埃及に歸らう と，ある夜 此オベさんも 呼んだことが あるかも知れない。

廣場から 寺を 見上げた 觀望は，廻廊が 大袈裟過ぎる上に，Dome が 小さく，前にも云ふた 手長猿でも 見る樣で，あまり 好い感じでない。法王宮の 建物が 寺院に くつつき しがみついて居るのも 氣障である。

馬車を 下りる。Taxi metre には 90 Centesimi と 出て居るが，市の課する稅則の表示を楯に，馭者は 3 L を 徵する。ナポリでは さうで なかつたが，"羅馬では 羅馬に從へ" である。

案内者が つきまとふ。それを斥けて，案内書片手に 私共は大理石の 階段を 上つて 寺内に入る。

サン ペチロ が 出來て 約四百年になる。其建立に 百七十六年の歳月，約一億圓の工費，巨匠 名工 無名工の 無數を要し，173 法王が 此處に葬られ，幾多の歐羅巴帝王が 此處で 戴冠 た，基督教の 建造物で 一番大きく 且つ 一番尊いと せらるる San Pietro の 寺は，青天井を好む 私共ならずも，一見 そんなに 大きくは思はれない。案内書を 見るも 面倒に なつた私共は，足に任せて，大きく 處處 薄暗い 寺内を 歩き廻はる。寺の内の寺，畫像や塑像の數は 限りもない。Michelangelo 25 歳の作と云ふ 聖母が死んだ耶蘇 を抱く "Pieta" の彫刻は，見なかつた。彼が 七十二歳の時 引受けて 死後 初めて 成つたDome の下には 立つて 仰ぎ

見た。下の重味に 比して，Dome は 寧輕いに過ぎる。巨匠の手が重いものを輕く 見せるのだ。自然の手が よく 然する。榮の冠がまさに聖彼得のドオム である。Dome の根方に ぐるりと 金字で書いた 羅甸の句は，"汝は ペテロなり 我が教會は この磐の上に建つべし，陰府の門は これに 勝つべからず，又われ 天國の鑰を爾に 與へん，爾が 地に於て 繫ぐ事は 天に於ても 繫ぎ，爾が 地に於て 釋く事は 天に於ても 釋くべし" の 句である。其ペテロの墓だと云ふものは，寺の奥の院の やうになつて，眞僞は知らず 大切にされて居る。墓の背の黄ろい硝子に 烏が二羽 描いてある。鷄なら 露骨だが，烏だけに 婉曲な 皮肉に 取れる。墓は つまらぬが，此方の壁つきに 立つて 居る ペテロの 青銅像は ふるびて 古光を放ち，其足指は 皆が Kiss する爲に 凹んで居る。撫で坊主が 日本の寺で 手澤に 光つて居るのを思ひ出す。正直者のはやり男の 氣弱の ペテロどん，先生に 可愛がられて 叱られ 睨まれ，パウロから 人前で 脂を とられ，それでも 羅馬にまでやつて來て，傳說によれば，"先生同樣では 恐れ多い，逆磔に してくれ" と云ふて，自分は 逆磔になつて死んだ と云ふ。卿は 矢張可愛い男だ。だから 皆が 愛するのだ。それにしても えらくゞが咲いたものだ。エルサレムの 先生の 所謂墓や 所謂十字架の址に 建てられて 居る あの Church of Holy Sepulcre は，三つも四つもすつぽりと 此大寺の 腹中に 納まりさうだ。"弟子は 師よりまさらず" と 先生は 曰ふたが，ペテロどん，おまへは 少し 出世過

ぎた。然し それは 卿の 知つた事ではない。"神は靈なれば 拜する者も 靈と誠を以て 仕ふべし" と 言ふた 先生に 皆が 氣象ねし敬意を拂ふて，卿を ダレに 斯う 飾り立てたのだと 云へる。十字架も榮光も 相もちだ。卿は やはり 謙遜な心のペテロどん だ。

私共は 一人前 50 C 宛拂つて 切符を 買ひ，寺の一隅に設けられた Lift で，寺の屋根に上る。先づ Dome の 內側に入り，圍くつけられた 欄杆に傍ふて廻はる。Dome の 周圍が 630 呎ある。卽ち 下から 見上げた "汝はペテロ——" の 金羅甸が 一周して居る處だ。Mosaic で 天使天童の像が 壁に 現はれて居る。欄杆によつて 下の錦石を 見下ろす。歩いて居る人間が，人形程に 見える。見て居ると，飛び下りて 見たくなりさうで，大概にして出る。

それから Dome の 二重になつて居る 間に設けられた 螺旋階を上つて，ドオムの額に出た。ドオムは 屋根の上 308 呎，Dome の 頂を 踏まへる 十字架の頭までは 地上からは 453 呎あるさうな。羅馬を 眺むるに 恰好の 展望臺である。

ぐるりと 欄杆がついて居る。私共も 地圖と 双眼鏡を 手にしながら ぐるりと 眺めて廻はる。曩つて 今にも 降りさうな空の下に，西の文明を 產み出した 齡二千年の Matron 羅馬は 雄偉と 云ふよりも 美しく 落ちついて 横たはつて居る。七丘の都 古羅馬はもつと 南に 廣がつて居たさうな。今ノ羅馬は 北へ寄つて，周圍五里强，人口は 六十萬弱。三百六十の寺，十五の門，四十八廣場，大きな 面桶の蓋を とつたやうな Colosseo を はじめ，色々の 建

物が 眼を 牽く。多くの子を 生むだ Matron 羅馬は，まだ 美しいと 云はれる。

Lift によらず，約二百の 階段を 一つづつ 踏んで，私共は 地上に 下りた。

廣場から 馬車に乘る。雨が降り出した。私共の輕を掩ふて後，馭者は 尨大な傘を 馭者座に 廣げた。行き逢ふ馬車は 何れも それを 擴げて居る。畫家の 寫生傘より 大きく，緣日傘を 洋傘に したやうなもの。伊太利らしく 興がある。全く 伊太利は 所謂羅巴でない。より多く 東洋色を帶びる。私共が 埃及から パレスチナ，それから 伊太利と 渡つて 來たのは，頗る 道の順を 得て居る。

（四）

七月廿七日。今朝三階の 250 番に移る。回字形の內閣に向ふては居るが，窓が二つ，Private Bath と外に Private W. C. がついて居る。此旅行に，Bath つきの Room は，今度が初めてだ。室料 45 L は 高くもあり，高くもない。これで 私共は 落ちついて 生活が 出來る。

目曦で，寺寺の鐘が鳴る。エルサレム以來だ，お寺の鐘の 合唱を聞くのは。

（五）

七月廿八日。から から から と 響がする。何かと見れば，回字の內部に ずつと 日よけを 張つたのだ。日よけは よいが，青空を拒み，光を 暗くして，私共には 一向 嬉しくない。

午後四時頃 から 散歩に 出かける。地圖をたよりに，Pincio 公園に行く。それは 眼と鼻の 近い處であつた。松林がある。大通りには 散策の 自動車 馬車が 麥稈帽の紳士 淡化粧の レディをのせて來る。Race Course の 榎椋の下では 子供が 木の實を 拾ふて居る。

Goethe の像がある。伊太利復興の時，佛蘭西は 墺地利を 助けるが 通論であつた 中に，Victor Hugo 一人 伊太利の肩を もつた。それを 伊太利は德として，Lyre をもつた Hugo の像を 此 Pincio 公園に 建てた。やきもち屋の Kaiser が 氣にかけて，ゲエテの像を 寄進したのだ。先日 大使館で 讀書家の 今代理公使は，伊太利の事を 書いたものでは Goethe の 伊太利紀行が やはり 一番好い と云ふた。私は 讀んで居らぬ。然し Wilhelm Meister は カアライルの譯で 昔讀むで，Mignon の 爲には 三夜も眠れなかつた 親しみがある。ゲエテの像に 倚りかかつて 居る娘は Mignon でなければならぬ。"伊太利へ連れて往つて！" と云ふ顏 をして居る。伊太利に もう 來て居る ではないか？

美しい 色に牽かれて，私共は 明るい道に 左に 折れた。道を 夾んで 薬竹桃ゥ 眞盛りである。紅あり，白あり，紫あり，一重あり，八重あり，美しい事だ。エリコや ガリラヤ湖の 薬竹桃に 記憶が 返へる。

薬竹桃の道を 行き盡すと，森が開けて 小さな Obelisk が立つて居る。それから 歩いて Bench など 程よく並べた 見晴らしに出た。上野の 竹の臺に 立つたやうな氣もち。羅馬の半分は 眼に入る。一昨日往つた 聖彼得の大伽藍が，此方を見て居る。直ぐ下の廣場には 大きな Obelisk が 立つて居る。Piazza del Popolo の廣場。

其オベリスクの方に下りて 顧ると，私共が 今し 立つた見晴らしは，卽ち 美術館の 平屋根であつた。

羅馬の市中には 重なる Fountain が十二，何れも お手のものの彫像觀像を 取り合はせ，見ものだ。此處にも 其一つがある。

Fountain ついでも 可笑しいが，竹を割つたやうな 屋根なし 掩ひなしの 小用所が，羅馬に來てから 殊に 眼につく。其處は 始終 水が 出て 洗ひ流すが，何となく 汚ない。

Corso Umberto の 通りを ぶらぶらあるく。蕎口を 買はうとしたが，戰爭のお蔭の 革拂底で，碌なのはない。中央郵便局前の Café で 氷珈琲を飲む。唯有る花屋で すばらしい美しい Pink rose の 束を見て，値を聞いたら 50 Lire で，見るに止める。

夕食後，自室で綠茶をいれる。ナポリの天井落ちに，私共の

身代りになつて，臘銀の 水茶瓶の柄が とれたのを，妻が はりがねで 細工して また用ふるのである。

全く あの ナポリの 天井落ちは，あぶない事 でもつた。

（六）

七月廿九日。午前は 例の Taxi 馬車で Colosseo 行。軒毎に 黑い旗章を 出して居るのは，何故だらう？

想像した Colosseo は，あたり 淋しい 荒草荒野の中に Mammoth の如く 蹲つて居たが，馬車は Colosseo 通りを經て，場末の街を 行きなり Colosseo に 來て了ふた。

"Colosseo が立つ間は 羅馬は立つ。

Colosseo が 倒れる時は 羅馬は倒れる。

羅馬が倒れる時は，世界が亡びる。"

と 古諺にあるさうな。エルサレムを攻め落し，猶太國を亡ぼし，其猶太人を 三萬人使つて 紀元七十年に 此 Colosseo を 羅馬 帝 Titus は 完成したと 傳へられる。それから 約二千年，地震や 雷電に 荒らされ，中世には 建築材料に 其石 Travertine，灰華石を 持ち去られたりして，昔の三分一しか ないさうなが，それでも矢張大きなものだ。外周五丁弱，長徑 615 呎，短徑 510 呎，高さが四階の上まで 100 呎，面積約二町五反を 覆ひ，世界一の觀場で，また 世界一の 慘忍の 紀念である。

馬車を下りて，西の口から入る。物賣や 案内者を 斷はつて 全底の三分一 もとのままに 殘つて居る Arena に 立つた。 而して 青天井の下に 大きな骸を殘して居る 此怪物の容を見上げた。約四萬五千の座席，約八千の立見席 を もつて居たと云ふ觀覽席は，四階から 三階に または 二階に 崩れ落ちながら，次第に ぐるりと Arena を 圍んで居る。昔は 青天井の かはりに 雨よけ日よけを 張つたものさうな。

Arena は 281 呎 に 177 呎の 楕圓形。私共は 青天井の下，其處に 夏の日が 明らかにさして居る Arena の地面を 二回 ぶらぶら と 歩いて廻はる。紀元八十年 帝 Titus が 落成祝に 百日の祭をつづけて，九千の猛獸を 此處で殺し，三千の人を 此處で鬪はして以來，紀元 四百〇三年 帝 Honorius I. が 人間の流血をとどめ，紀元 523 年を 打止に 猛獸の血を流す事も 廢せらるるまで，人と人と，猛獸と人と，猛獸と猛獸との 鬪ひが ここに 演ぜられ，あるひは 水を張つて 海戰までしたのだ。 而して 耶蘇教が打勝つて 國教になる迄は，代代の皇帝の爲に 耶蘇信者，老幼，男女の血が此處に 流れたのだ。

それは 昔の事で あらうか？

否。否。つい昨今の事だ。歐羅巴から 亞細亞，其陸から 其海にかけて，四年四ケ月が間 陸も水もArenaでは なかつたか？千萬を以て 數ふる 人畜死傷の血は 其處に流れなかつたか？ それは此 Arena が 擴大された ばかりである。二千年間の人間の足歩は，唯

同じ所を足踏みして 居たに 過ぎない。

其昔 兎も角も 此 Colosseo を 廢墟にした 耶蘇の魂は，何處に往つた？

"Quo Vadis, Domine?——主よ，何處に往き玉ふや？" 彼は何處へも 往かぬ。彼は 死んでは居ない。彼は 生の身を 今 廢墟にした此 Colosseo に立つて，斯く叫ぶ。

" 劍をとるものは，劍に亡ぶ。世界の軍國は，必此 Colosseo の通り 廢墟になる。

人の 惡の日は 盈ちた。

生命が 自ら Assert する時は 來た。

十字架の時代は 過ぎた。

犧牲の血も 最早澤山だ。"

Arena の 大部分は 發掘されて，地下の構造を 露出して居る。Arena を 支ふる柱梁，猛獸の窟，あるひは 血を流す可き人の 溜りも 其内に あらう。

Arena を 半周して，Seat の 下を くぐる。中世 鐵の乏しい時代に 鎖 を はづしたと云ふ 穴の痕が，到る處に 歷歷として居る。座席の配置 出入りの設備は，秩序訓れた 羅馬人の 頭の働きが それでも 覗はれる。

番人が 居合せない爲に，二階三階に 上つて見る事は 出來なかつた。

物賣りが勧めるままに羅馬の寫眞帖を買ふ。妻はみやげものに Mosaic の襟止を幾個か買つた。其言により今日の黒旗は，刺客の手にかかつて崩じた先王 Umberto 一世の第二十回忌である事を知つた。現王朝創業の Victor Emmanuel の英邁は知られて居る。二世のウムベルト一世も競馬行幸ときまつた日ナポリの虎列刺猖獗と聞いて“朕はナポリに行く”と惡疫流行の檢分に往つた人だ。刺客は Umberto 一世を弑して却てサヴイ王朝の命脉を長めたと云はれる。現王 Umberto 二世は，英吉利の Victoria 女皇が其青年時代に，歐羅巴の諸皇公子の中で一番有望と折紙をつけたもので，見込違はず新伊太利の元首として從容と險はしい局に當つて居るのは，皆人の知る所である。

Colosseo を後に，私共はちとの買物をしながらぼつぼつ歩いて歸る。辻賣りの花屋のかみさんから薔薇カアネエションを四Lで買ふ。而して馬車で歸る。ホテル近い阪を上る時，口髭のある三十男が突と馬車に寄つて，右の手を突き出した。拳がない。合點して 30c の白銅をやる。戰爭か。工場かも知れぬ。

此處は日が永い。夜は八時半でもまだ明るい。緯度が東京よりずつと北のせいもあらうが，或は例の“日光節約”かも知れない。私は自然に反して，邪合で時間の伸縮をする仕方を好かない。

(七)

七月三十日。昨日は伊太利先王 Umberto 一世の二十年忌で，今日は日本の先帝明治天皇の八年忌である。

午前は自働車で聖彼得に往つた。十五分で來て了ふ。

それから徒歩で本章の背を廻つて，Vaticano——法王宮に行く。それは法王に敬意を表せん爲でなく，Michelangelo と Raphael を見ん爲である。羅馬帝國の舊巢に巣くうて歐羅巴の帝王の上に法王の威勢を振ふたそれは昔の夢となつた。今は此 Vaticano 外二三の小さな法王領に領土は狹められつつ，猶加持力教徒の元首として威張つて居り，日英米の外は特に Vaticano 特派の大公使を置いて居る。Vaticano は約五町五反の面積を占め，公堂私室禮拜堂博物美術館等大小一千室に上ると云はれて居る。

門がある。そこには紫の帽，赤，青，黄，華美な竪縞の中世時代の服裝をした戟を持つた番士が立番して居る。服裝は Michelangelo の考案に係るものさうな。豪華なところが如何にもさもある可く思はれる。

私共は其門を右に見て，奥深い爪先上りの路矢を入り，普通見物人の入口から入場料 2 L を拂つて上る。番人も青の勝つた紫の背廣揃ひである。

Vaticano に見るものは，限がない。私共は Sistine 院を指して，一直線に，今鋪石を踏んで來た路を，今度は折りかへしに長い長い二階を通つて後戻る。彫刻室がある。ずらりと古代の地圖を掛け列べた室がある。Raphael の圖案によつて織られた綴織の室がある。横見ても，上見ても，美しいものが眼に滿つる。それ等に眼をとめず さつさと歩いて，曲折した狹い階段を下りて，Cappe'la Si-tina に來た。

縱 133 呎に横 4[illegible] 呎の長方形の Chapel，左右に六個の窓があつて，午前九時の光が折よく相應の明を與へる。二三の番僧が居る。時が早いので，先着の見物は唯一組居たばかりであつた。先づ拜壇背の "最後の審判" に立寄る。高さ 33 呎，幅 66 呎と云ふ此大壁畫は，Michelangelo が六十歳から七十八歳にかけて之作さうな。年月や流煙蠟燭にくすぶり，後人のあらずもがなの修整糊塗に擾はされながら猶四百年前の面影を殘して居る。私はあまり此れを好まぬ。右の腕を振り上げた基督が私の意に滿たぬ。やや下手に聖母を配してあるのは，審判の座にも女性を要する自然の告白であらう。

壁畫の Last judgement にいささか失望した私共は，天井畫に向ふた。大體の感はあまりごちやごちやして小うるさい感がある。然し一つ一つに眺むれば，流石に逞ましい天才が 31 歳から 38歳迄の氣力横溢した時代の作と頷かれる。其 Brush はさながらの鑿で，個個の人體は力の美を極め，創造の驅

喜が一つ一つに溢れて居る。頸が痛くなるまで双眼鏡で眺める。果ては Mosaic の Pavement の上に，私は大の字なりに仰臥してゆつくり眺める。"人の創造" が矢張一番私の氣に入つた。妻は Bench に仰臥して眺める。私が鋪石の上に大の字形になつて居ると，後から來た一組の見物は 怪喫驚して眼を瞪り，案内者は心配氣に立ち寄るのであつた。天井が畫がかれて四百年，見た者の數に限りはあるまいが，鋪石に寢て見た者が何人あらう？ こんなにして私共に見られる Michelangelo は果報者である。

今 Dresden の畫堂を飾つて居る Raphael の所謂 Sistine Madonna は，昔此院内を飾つたもので，Raphael 圖案の綴織も此處の羽目を掩ふたものさうな。其頃の壯觀が思はれる。

左右の壁は諸名匠が新舊約に關する題目の壁描で一ぱいになつて居る。目力を惜しんで，それ等は見なかつた。

Michelangelo に別れて Sistine 院を出て，また階段を上つて今度は Raphael Stanza を見る。Raphael は美しい。38 で死んだ天才が，26 歳から 38 までの力が此處に殘されて居る。私は "School of Athens" が好きだ。窓隙を透かして白雲の搖曳する青空の悠遠が，殊になつかしい。哲學を描いたそれは，"詩" を描いたそれよりもヨリ詩的で美しい。"Disputa" の基督の顏はあまり Effeminate で，M の Last judgement の基督が私の氣に入らぬと異なつた意味でやはり氣に入らぬ。所詮

二人を 一緒に つきまぜて，初めて 私の氣に入る 基督が Brush から 生れるのかも 知れぬ。

八歳違ひの M と R とが，三十代 二十代の 血氣盛りに，時を同ふして 此 Vatican に 畫筆を振ふて居た 其時代の 光景が 偲ばれる。

自然は 配偶を好む。M と R とは，まことに 恰好の夫婦 であつた。

歸る時，ナポリで 會つた 大大尉が 他の一人と 來る に 會ふた。

(八)

七月卅一日。羅馬も夏らしい。正午は 八十度に近く，夜間も七十三度を 下らぬ。

一週間の Bill を 拂ふ。室料食費一切で 一週間 1025 L。パレスチナの 一ケ月が，羅馬の一週間に當る。卵一個 日本貨の 六十錢，梨桃一個が同じく 六十錢，肴一品 四圓八十錢と云ふ樣なホテル 値段。パンは 一人に付 八十グラム と 限られて居る。普通のパンの外，長さ一尺餘 拇指大の 硬燒パン がある。かき餅など食べる意味で 食べられる。

夕食後，廣間で 珈琲を飲んで居ると，額に 黑い髯の いちじるしい 若い Lady と 小柄な 若い男が やつて來た。男は 埃及人，

巴里で學び，詩人で 新聞の小說など 書いて居る。少し英語を話すので，通辯をしてくれる。レデイは 25 歳，露西亞人で，小說を書く。父は死し，母は 莫斯科に居り，良人は 辯護士で Roumania に 住んで居る。叔父は 伊太利の 陸軍大臣をして居る。男は 24 歳，父は總領事として マニラに 居た事があり，公使として アビシニアに 在住中 病死した と云ふ。今は 母や 叔父と 此羅馬に 住んで居る。妻は 獨逸譯 佛蘭西譯の 不如歸 と 新春 を 持つて來て Lady に 見せる。"齡の上では あなたは 私の娘です" なんか英語と 手ぶりで 妻は云ふて，髯の生へた Lady と 手を把つて相歡んで居る。

其內 Lady の 叔父で 陸軍大臣だと 云ふ 柔和な顏をした老紳士が 來たので，私共は 挨拶して 立ち上つた

其三

羅馬日記 (續)

(一)

八月一日。日本を立つて，半歲過ぎた。矢張り日本の夢ばかり見る。夜中眼が さめると，此處は何處かと よく惑ふ。羅馬に居るのだつた，と思ふ。

午後大使館に行く。今さんは 家族と 避暑に Assisi に往つて 留守であつた。書記生の 山君も居ない。二年前に來たと云ふ彫刻修業の青年中君が 私共を 案內して，大使館の 公室私室を見せる。十六世紀來の 貴族の邸で，日本大公使館としては 歐羅巴第一の美しいものさうな。成程三間つゞきの客室は，天井も壁も 繪畫だらけで，蠟石や きらきらしい 金屬を 使つた扉の美しさ。伊太利の大使館には ふさはしい ものであらう。

Hotel に歸つて，借りて來た 新聞を見る。外米管理局の 若い官吏が 米商鈴辨を殺した記事が，著しい新聞である。

六月十九日の 東京朝日に "私の所望" が 出て居る。

夕食後，隣の藥店に往つて 薄荷油など買ふ。日本から 來たのですよ，と云ひ顏に 卷脫脂綿と 清凉劑を 店の主が 見せた。小さな瓶の薄荷が 日本では 20錢 坡西土では 5P で 五十錢 羅馬では

5L で 約壹圓二十錢 と 妻が比較を云ふ。

(二)

八月二日。女中部屋を 不圖見入れたら，紅の蓮の蕾が七八本も 大バケツに，挿してあつた。

午後四時から 馬車で Piale に 出かけ，畫はがき新聞など買ひ，それから Mosaic の 店で みやげ物の 襟止めなど買ふ。Hotel では 砂糖が 不自由だ。ナポリの 書店飛ベアの おかみさんから 二度目に 仕入れて來た 一封度の砂糖は 使ふてしまつたし，砂糖はあきらめて Department store の "Old England" に歸途寄つて，蜂蜜を買つた。Syrup を探しても，何處にも なかつた。

午餐と晩餐に，日本人を 二人 見かける。

私共の 部屋の窓から 北斗七星が 丁度 正面に 見える。可なり高く 見える。羅馬の緯度が 丁度北海道位に 當つて居るのだ。あの 北斗七星が 海に 尾を曳いて 居た時も あつたが，と 相語る。

(三)

八月三日。午餐後，珍らしく 私共の部屋に 來客があつた。南滿醫學堂の 久醫學士，鐵道局の大技師，中外貿易會社の松君。松君は 戰時 英吉利に居，二君は 米國から 佛蘭西から 來たのだ。

Palestina では 唯一人の 日本人にも 會はなかつた。伊太利も，ナポリから 羅馬に來ると，ざらに會ふ。

Padrewski の Piano の 名人が 波蘭の 首領となり，D'annunzio が 伊太利を 戰爭に 動かした。藝術家が 政治に たづさはるは，極めて 自然だ。人情に徹し，人心に 尤もよく 觸るる ものが 尤もよく 人を動かすのは，不思議でも 何でもない。活きた時代に活きた魂が 働くは，これ程 自然な事は ない。所謂政治 所謂外交の時代は 過ぎた——十字架の時代が 過ぎた如くに。

アルコホル を 買ふ。日本値段の 十倍で，妻も 驚いて居る。

(四)

八月四日。文淵堂から 金を送つた と云ふ電報。日本まで電報の往復に 十一日を 要した わけで ある。エルサレムでは，往復十二日を 要した。

夕食に 葡萄酒を 注ぐとて，Cup を破る。それが緣となつて，私共の給仕と話す，英語で。戰爭中は 步兵の 軍曹で，三度負傷したと 云ふ。

(五)

八月五日。午餐後，單衣 草履のままで，Hotel の向ふ角の新聞賣場に 新聞を 買ひに行く。水をうつた玄關に 滑つて，大の五

十男が 立派に ころんだ。Boy や Porter が 兩三人，笑ひを殺して 傍見て居た。

Times に 一將軍の 露西亞に關する 投書を のせて居る。佛蘭西革命の時には，英吉利は 手を出して 革命を 壓倒しやうとした。而して 何の 獲た所があつた乎。今度は 露西亞に關して 百年前佛蘭西で した失敗を 重ねやうと して居る。露西亞は 放任に限る。自然に治まる。云云。卓論で ある。

耶蘇の譬話に，農夫が 麥を 蒔いたら 惡魔が 夜稗を蒔いた，何方も 生へた，下手をすると 稗をぬくとて 麥をぬく，まあ 其ままにして 收穫まで措け，と云ふのが 正に 此處 の事だ。

客が 少ないので，今夜は 女中部屋の 大賑合ひが 少數の 客安を 妨碍する。

戰後で 伊太利の女も 氣が立つて居る。まだ いろいろ 男の働をして居る。ナポリでは 大道掃除婦を 見たが，羅馬でも それを見る。電車の車掌も居る。十七八の娘が 赤條入りの黑の制服着て郵便を配達して居る。汽車で 旅しても 大きな停車場につくと W. C. の掃除は 皆女がして居る。氣の毒に思ふ。

(六)

八月六日。朝徒步 書肆 Pinle に 行く。ホテルつづきの山手の町を 步いて行く。靜かな 朝の街，人通りも少ない處に，朝つぱら

から 竪琴と Violin の 合奏を やつて居る。街を 出ぬけて 少し打開けた處に 來たと思ふたら，正に Spanish steps の上に來て居た。此階段は 開いた 釘拔形に なつて居て，其鉤の間に三一會堂が 立つて居る。上の左右二段は，十三段宛二段になり，下は十三段づつ 九段になつて居る。下から見上げた 眺めは，好い形である。畫家彫刻家の Model 商賣の者が 平常は 此處に 集まる例になつて居るさうな。今日は それらしい 女も 男も 見えなかつたかはり，下の段には 花賣りが 大分居た。カアネエションを 買ふ。Shelley, Keats 等が 居た家が 附近にある。見ずして，Piale に行き，Baedeker の 北伊太利，白耳義，和蘭など 買ふた。

歸りに，一包の茶を買ふ。砂糖なし，Syrup なし，蜂密は値が高い。妻が智慧を出して，Condensed milk を買ひませう，と云ふ。名案である。二三軒聞いてあるいて，到頭 Hotel 近くで一罐の "Latte Condensato" を買つた。

午後茶を入れる。今日買つた 古い 古い 錫紙に包まれた茶は，"Soochow" とある。支那茶，蘇州茶であつた。それに妻が名案の Condense milk を入れる。かきまぜて したり顔に 碗を取り上げ，一口 又二口。根から 甘くない。"おい，此ミルクは甘くないねえ。" "少ないからでせう，もつと 入れませう。" 妻は また 幾七か それを入れる。飲んで見る。やはり 甘くない。如何したのだらう？如何したのでせう？私は ミルクの罐を 取り上げた。よく見ると，"Senza Zucchero" とある。"Zucchero" の砂糖は よく知つて居

る。"Senza" を 伊英字書で 引いて見ると，"Senza" 即ち "Sans" で，"無し" 若しくは "ヌキ" だ。"Senza Zucchero" は 正に "砂糖ぬき" だつた。うまく 裏を掻かれた。あつと ばかり 夫妻顏を見合はせる。

Condensed milk と 云へば 甘いにきめて居た 此方もだが，待つて居ましたとばかり 砂糖ぬきは 先方が 一枚 上手だ。落語にでも ありそうな 取り合はせは，苦笑以上の 興味を 私共に與へた。私共は 甘くない Condensed milk の 罐を 眺めて，殘つた蜂密を 和して 蘇州茶を 吃した。支那茶の風味は，支那料理を 思ひ出させて，香港の 廣東料理が また 食ひたくなつて了ふ。

（七）

八月七日。馬車で 大使館行。今さんも 昨夜 歸つて居た。夫人が Assisi で 發熱して居るといふ。

歸ると，驟雨が 沛然と來た。鬱陶しい 日よけが からからと 捲かれて，雨ながら 室内 快活に なつた。

夕食後，Saloon に くつろぐ。此宏大な ホテルの 大廣間，電燈が かん かん ついて居て，客と 云つては 誰もなく，全く 私共二人のもののやう。

歸りは Lift に よらず，腹こなしに 總計 97 階段を登つて室に歸る。

（八）

八月八日。五時に眼ざめ，六時半に 朝運動に 出かける。妻は傘のかわりに カイロで買つた 日本物の 竹根ステッキを 持つて居る。

Pincio 公園は しつとりと 朝の露に そぼち，冷えした空氣が水の如く 私共を 迎へる。 妻は羅馬を 美しいと謂ふ。私も異議はない。折角の事に もつと 清潔を心がけたら と 思ふ。テベリアの美しい 湖畔を 蔑だらけに して居る 土人のやうに，羅馬人士も此點に 申分がある。 支那人の 小便無用に使ふ "君子自重" を 此處にも すすめたい。

樣の並木を通る。八月と云ふに もう 黃葉しかけて，落葉がある。 下町に下りず 山上を 別路から ずんずん 戻ると，正に Spanish steps の 上に 來た。

歸ると，日本大使館から電話で Credito Italiano 銀行から 手紙が來た と 云ふ。爲替が 着いたのだ。午後 其手紙が 屆いた。夫妻して 其手紙を 讀む。袖珍伊太利語字書では うまい工合に 譯語が 出ない。"Piano" など 云ふ語がある。 銀行のピアノは，妙な取り合はせ， と 思ふたら，Piano は 卽ち階で， 銀行の二階にお出なさい， と 謂ふのだつた。 伊太利のやうな 藝術の 古つはものは すべてが 美的だ。 日本大使館の所在 Gesu を ゲス と

勝手に發音して，何と云ふ下司な，と 思ふたら，ゼズ卽ち耶蘇であつた。 伊太利語には，母音で終る語多く，ガギグゲゴのやうな 濁音は，滅多に 無いやうだ。伊太利は 藝術が 何でもなくなる程に 藝術に 浸つた國だ，好惡は別として。

夕食後，Saloon に 居ると， 埃及生れと云ふ彼若者が 來て話す。亡父は 埃及人だが Damascus に 生れ，母は シリアのレバノン生れで 新聞の 政治記者をして居た事がある 新しい 女である。若者は 巴里の "Matin" に 小說を書いて， 一行 50 Centime から 一法の 報酬を獲る。 名家は 一行五法も とると云ふ。 若者は亞剌比亞語を 話すが 書く事は 出來ぬ。 書くのは すべて 佛蘭西語で すると云ふ。要するに もう 埃及人ではない。

（九）

八月九日。馬車で Credio Italiano 行。Passport を 見せ，まごつきながら それでも 金を受取つた。4273 L 餘。

此は 日本貨の 何程に 對する爲替か。 文淵堂には 三千圓 云ふて やつてある。然し 三千圓に對する Lire では 少ない。 文淵堂の 返電には，千出した，あと直ぐ，と 云ふのだつた。千圓としては少し 多過ぎる。 銀行で問ふても，日本貨を 扱はぬから 知らぬ と 云ふ。 これは 倫敦の正金支店から 轉送の 爲替である。ホテルに 歸つて 色色 揣摩する。 私の參謀總長が また 智慧を出し

て，新聞に 爲替相場が ありませう と 云ふ。Daily mail を見ると，恰も好し，丁度 其日の新聞から あらためて 銀行爲替相場を掲載してある。それによつて，ほぼ 壹千圓に 對する Lire と分かつたが，それにしても 如何に Lire が 賤いと 云ふて あまりに多過ぎる，と また 疑惑に落つる。

(十)

八月十日。六時過ぎ 起きぬけに Pincio 公園に 散歩に 行く。丘の一端に往つた。朝霧 茫茫 として 夢の樣に蒼い。

十七八 から 十三四 までの 娘子供が 五六人 向ふから來たが，妻を要して "Signorina" 何とか 云ふ。四十六の妻は "お嬢さん" と 言はれたのだ。皆は 話したげ，妻も話したいが，何分，言葉が 通はぬので，眼に ものを 言はせて，口には唯 "Buon giorno"——"今日は" と 言ふて過ぎる。妻は 此日 Cairo で 買つた夏の 略帽に 白い レエスを ひら ひら させて 居たので，殊に若く見られたのであらう。

午前は 今さんから使で 新着の 日本新聞が 屆き，午後は電話で，自動車の 郊外散策の 招きであつたが，腹工合が 思はしく ないので やめる。

(十一)

八月十一日。早朝さめて 思ふ，D'annunzio 君が 飛行機で 日本に行く，珍らしい事だ，丁度 此方は 伊太利に 來ては居るし，下手な歌でも 祝ひに 贈らう。

六時に起きて 書きかける。

其内 また から から と 日よけを 張り出したので，私共は私共の別莊——Pincio Park に 出かける。

途中の店で パンを 買つて，公園に行く。而して Goethe の像近くの 樹蔭の芝生に 足投げ出して，私共は パンを 食ひ，歌を書いた。頭上を通る 飛行機の音が，私の興を助ける。

D'annunzio の 飛行機に乘じて
日本に 行くを 送る 歌

(1)

日子日女の 西巡して
山水美しき 伊太利の國土 に 駐まれる時
人あり 突と 足下より起ちて 天翔り
却て 彼等が出で來し 日出づるの國を 訪はんとするを 聞きぬ。

誰　其人は？

Gabriele D'annunzio!

（2）

ガブリエレ　ダンヌンチオ！

天下　何人か　君を　識らざる？

ペン執りて　くさぐさの　美しきもの　書ける君，

劍執りて　飛行機に　乘りては

敵國の　都の空に　天翔り　行き

生命を　傷る　爆彈ならで

國旗を　象どる　三色の紙に　文字刷り

そを　天花と　雨ふらしたる　君，

ペンとりて　往往　天馬に　乘り得し　君なれば

不思議は　あらじ

其飛行機に　いと安安と　乘り得つるも。

（3）

ダンヌンチオ！

何の爲にか　君　日本を　訪ふ事を　思ひ立てる？

極東の　島の國　と

歐羅巴の　半島の國　と

其處に　何の　因緣が　ある？

青空を　衝いて　火山　烟を　噴き

琅玕ゆらぐ　碧潮の　ひた　ひた　と　陸を　洗ひ

南の丘には　柑子　黃金に　實のり

水田すら　ちらほら　見ゆる　其村には

春蠶　桑を食みて　玉の緒を　吐く

其國土の　肖たるが　爲めか？

身材高からず　黑眼黑髮　稀ならず

マカロニ　と　生の貝の　淡泊なるを　食ひ

よく　歌ひ　よく　躍る　樂天的にして

しかも　血の　上ること　早き

其人情の　ひとしき　爲めか？

（4）

羅馬　帝國

羅馬　法王

詩に　藝術に

世界　に　覇たりし

光榮の　過去は　一夢。

内靜 外侮に 精力 潤れ
"地理上 の 名のみ" と 敵國宰相の 放言せし
其沉淪より 奮ひ起ちし 伊太利 と
極東 に 偏在して
二千年の 歴史は 古けれど
世界的 に 眼ざめては
未だ 半百の 年を いくらも 過ぎぬ 日本と
維新の 歴史の 似たるが 爲めか？
そも 近代文明の 母とは 正しく 名のれども
生ひ立ちし 子等の 勝手に のさばりて
いざとしなれば 思ふに 任せぬ 伊太利の もどかしさと
二千年來 外侮を 受けず とは 誇りつつも
世界の 舞臺に 乘り出しては
未だ 羽翼の 成らぬ を 嘆つ 日本と
其心情の 同じき 爲めか？

（5）

日本 と 伊太利 と
因緣は 一朝夕の 事には あらず。
マルコポオロ の 夢物語に
黄金世界の 日本を 思ひ

西廻はりして 其日本に 達せむとして
却て 亞米利加を 見出せし
コロムブスは 伊太利人 ならざりし乎？
扶搖萬里の 風を待ちし 遣はし主の 心は 知らず
手には 慇懃の 辭令 携へ
往復 數年の 辛酸を 嘗めて
羅馬法王廳に 使ひせし
支倉六右衛門は 日本人 ならざりし乎？
伊太利 と 日本 と 其因緣は もとより 一朝夕の事にはあらじ。
ダンヌンチオ！
君今 東に 翔りて 日本に 達せば
コロムブスの夢は 君に 遂げられむ。

（6）

ダンヌンチオ！
君 何の爲に 日本 を 訪ふ？
黄金淨土を 日本に 求めば 君は 失望せむ。
然も 薔に 花を見 涓滴に 大海を觀る 詩人の眼は，
皮相の 外に 見出すもの なくてやは。
人あり 四國同盟を 說く。
伊，獨，露，日，同盟して

アングロサクソンの 專横に 對抗すと 謂ふ？

說者 眼 何ぞ 小なる。

知れ，日輪は 見る眼に 小なれど 世界を 光被し

日本は 地圖に 小なれど 心は 四海を 抱かずば 止まざるを。

色 何もの？ 種族 何もの？ 歷史 何ものぞ？

四海 一家の 春に 會ひて

各自の花を 發け との 天つ御親の 心を 知らずや。

（7）

ダンヌンチオ！

東を 指して 翔り行く行く 君試に 下し見よ。

希臘！

埃及！

小亞細亞！

印度！

支那印度！

支那！

朝鮮！

皆 是れ 古代文明の 死火山。

火山は 永久に 死せりや？

然らざるを 火山國の 人の 余も 君も知る。

榮えし國は また 榮えん。

新なる民 これより 興らん。

そは ふるき 亞細亞に 限る 事かは。

亞弗利加

南米

グリインランドの奥

タスマニア の 端

日の照らむ限り 人住まむ限り

文明は 光被す可し。

唯自ら 奮はむのみ，他を 奮ふべく。

（8）

往け ダンヌンチオ！

君が行をば 天 人 祝ふ。

伊太利 から 日本 へ

人の子の 拡張る 土をし 踏まば

山河 九千 の 路 遠か なれど

君が行く 大空の路には 關も なきものを。

さしのぼる 朝日 日出の國に 向ひ

爆音 高く 心の ときめきを 聞かせ

前機 後機 相 顧みて

さはやかに 往け 天鼓せ 使。
風よ 伏せ 雨降るな
霧 晴れよ 雲 披け
日光 と 青空 と 恒に 汝が 途に あれ！

兎も角も 書き終へて，正午過ぎ Hotel に 歸る。

横濱で 買つて來た 美しい 色紙がある。D君 いよいよ 出かける と なつたら，其色紙に 此歌を書き 英譯添へて 送らうと思ふて居たが，D君 Fiume に それたので，到頭 歌は 贈らずにしまつた。

（十二）

八月十二日。早朝 また Pincio Park に 往く。松林の こなたに 大きな "Latteria" が ある。ミルクホオルだ。後園の 椅子卓子で，珈琲，乳，水と 乳入ビスケットで 朝食を 済ます。L 2.50。20 C を 給仕にやつたら，勘定書を見ると ちやんと 40 C を Service として 取つて あつた。

樹蔭を 尋ねて 新聞を 讀むだりして 正午近く ホテルに 歸る。

今日は 暑く，頗に 發汗するので，四度 Bath に入る。人力を使はないので，心安く 四度も 入浴する。

Credito Italiano から 手紙。第二の 送金が 着いたのだ。

夕食に 日本人が 二人。一人は 軍人。

廣間に 憩ふて居ると，今さんが 話に來た。先刻の軍人は 山海軍大佐で，講和會議で 日本の 委任統治と きまつた もとの獨領カロリン群島の 加特力の處分について 羅馬法王廳に 打合 はせに來たので あつた。大佐は 加特力信者 さうな。

今さんは 此處の Nitti 首相が 思ひ切つた やり方について話す。國債 250 億に 及んだのを，戰爭成金などから ドシドシ取り上げて 忽ちに 始末をつける 意氣込で 居る。今日 私は ある人に 手紙を 書いて，"老年の ゲエテを ハイネが 評した やうに，'美しい花の 咲いて了ふた 温室' で 伊太利は あるかのやうな 心地がする" と 云ふた。それを 打消すかのやうに，今さんは 伊太利の 活氣について 話した。伊太利が 講和會議で 散散の目に 遭ふた結果，伊獨露日 四國同盟を 云ふものが 多いさうだ。

（十三）

八月十三日。朝 Credito Italiano に 行き，文淵堂の送金を 受取る。歸途 大使館に 寄る。東京朝日の 通信員 鈴君，製麻會社の 1君が 來て居る。今さんは D'annunzio が 講和會議の不快から ヰルソン大統領に 憤激し，私共の ホテルの 向ふ角 Regina Hotel の バルコニイから 街上の群衆に 演說し，豐富な 伊太利語を 縱

廣に 驅使して 米國を罵り，キルヲン夫人を "牝豚" など 罵つた事を 話して居た。

金も 溜いたし，神興を移す 時が 來たので，私共は旅券の 裏書をして もらつた。それを ポヲケヲトに 收めて さつさと歸りかけると，書記の山さんが 追ひかけて來て，氣の毒さうに 裏書の手數料が まだ 濟んで 居ない事を 告げた。私は 疎忽を 謝して，5L20C の 手數料を 拂つた。

夕食後，先刻 大使館で會ふた 鈴君が Hotel に 來訪した。鈴君は 西園寺さんと 同輪して 巴里に來，それから 逸早く 入閣して，講和條約調印當時の 獨逸を よく見たので，私は 講和會議の話，獨逸話を さまざまと 聞いた。伊太利が 鐵と 石炭とに 不自由しつつ，强大國の 間に 伍して行く 苦心の 幾分も 聞いた。D'annunzio の 日本行を 歡迎して 朝日新聞では D'annunzio 號を 出すさうだ。鈴君は 其用向きで 羅馬に 來て居る。鈴君はD君と 同じ Grand Hotel に 泊つて居る。D 君が 羅馬に居る事は，私に 初耳で あつた。"何なら 御紹介しても ようございます" と 鈴君は 言ふ。大使館で 晩餐會でも 開いて 表向きの面會なら 兎も角も，こつそり 會ひに行くなんか は 威嚴に 關する。"まあ よしませう" と 私は 答へた。然し 何しろ 飛行機で 日本行は 珍らしい事だから 日本へ 出發の日が きまつたら，祝ひの歌を書いて 贈らう，と 云ふ意を 述べた。

（十四）

八月十四日。朝 馬車で 瑞西公使館行。八月一ぱいは瑞西でと思ふたが，瑞西も 食料節約で 二日以上の滯在は 本國へ 照會の上ならでは 許されず，電報往復でも 約二週間を 見つもらねばならぬ，と 謂ふので，瑞西を 通りぬけて 巴里行きときめ，唯通過の裏書を してもらつた。東京で 各大公使館に 旅券の 裏書をしてもらう時，瑞西の 公使館が 一番面倒だつた。私共の爲に それ等の 面倒を 見てくれた 福永書店主人が，佛文の不如歸を 持つて往つたりして 見せたが，それは 半分ばかり Page を切つて 返へし，兎に角 村役場の 身元證明を 持つて來て くれと云ふのであつた。日本政府が くれた 旅券に，村役場の 裏書が 入用では，外務省が あまり 輕過ぎると 私は 腹を 立てて 到頭 裏書きは とらずに 來て了ふた。然しこれは やはり 此方が 惡かつたのだ。瑞西の樣な 色色なものが 逃げ込む國，戰爭の 眞中に 別天地を 維持した國，あの 小ちんまりした 世帶の國には，そんな 手數の 面倒を見る必要も あるのだ。兎に角 通過は出來るが，瑞西の 消夏はおじやんに なつた。

瑞西公使館を 濟まして，今度は 方角違ひの 佛國西領事館に行く。明日來い，と云はれて 歸る。Passportの 裏書もらひ程 好い忍耐の 實習は ない。歸途 市場を過ぎて 圓い 水瓜を見つけ，

一個 五Lで買ふ。

其水瓜をはまづかつた。

夕食を 食ふて居ると，今さんから 聞いたと云ふて，Associated Press の Cortesi と 云ふ人が 面會に 來た。"あなたは 書かれるさうですね。伊太利人は 日本に 心を 傾けて 居ます。何か新聞に 書きませんか" と 云ふ。D'annunzio は Venezia に 往つたさうだ。世界を 一周の 此行に，外國の新聞記者で 私共を尋ねて 來たのは，天にも 地にも 唯此一人 で あつた。然し 私は 氣がすすまないので，書くとも 書かかぬとも はつきりした 返事をしなかつた。

（十五）

八月十五日。朝 また佛蘭西領事館行。戸が 開くのを待つて居ると 自動車で 日本人が 三人 乘りつけた。それは 先日 大使館で會つた 製麻會社の 一行であつた。I 君は紅葉山人の 舊弟子 さうな。諸君が 裏書きを 終へて 去つた後で，私共の 裏書も 濟んだ，英佛袖珍字書が 要を辨じて。

歸りに 昨日 水瓜を買つた 露天市場で 頑固婆さん から 梨を六個 買つた。

古い 羅馬の 見物もせず，新しい 羅馬にも 會はず，暑い羅馬の Hotel に 寢たり 起きたり して，兎に角 三週間餘 過ぎた。

明日は 北へ 往かう。

第五
FIRENZE

（一）

八月十六日。朝八時の汽車で，羅馬を立つ。

車内は 臭く 蒸暑く，車外は凡景。ホテルから 持參の辨當を出して つかう。魔法壜の水を 飲む。

途中驛から 人に扶けられて 三十餘の 士官が 乘つた。青い軍服，短い 髯だらけの顏は 蒼ざめ，墓場近い 感を 與へる。病か傷か。いづれ 戰爭の 名殘だ。

恰も それと Contrast を するやうに，四十左右の 人の好い彼ダマスコ 途中で パンの屑を拾つて喰べた あの 小父さんを思はすやうな 將校が居る。從卒に 持つて 來さした 辨當を 開き，片手には パン，片手に 鷄の腿を 持つて 立ちながら 甘さうに 食ふては 骨を しやぶり，桃を 三つ四つ むいては食ひ，葡萄酒の瓶から 喇叭飲みに して居る。其れを病將校が 熟と 見て居る。

午後二時 Firenze 着。

馬車で 市の中央にある Hotel Savoia に 往く。羅馬から打電して 置いたので，二階の一室に 導かれた。街に 面して 騒しいが，可なり 濶い室である。ナポリ以來 ホテルに 着くと 一番に先

づ天井を見る。此處のは，白雲の上で女神が竪琴を彈いて居ると，可愛い Cupid が譜本を廣げて見せて居る畫が描かれてある。落つこちさうにもない。

妻は中暑の氣味。携帶の氷嚢が初めて役に立つて，大分氣分がよくなつた。然し食氣がないので，夕食は室内に取り寄せ，私一人で濟ます。

(二)

八月十七日。今日は妻も元氣に復した。床屋を呼んでもらつて，髪を五分刈りにする。香港で一度，ダマスコで一度，これで三度目である。

街通りであまり騒しい。室を移らうとしたら，女中がひどくしをれたので，一兩日の事ではあり，移る事をやめる。

大きなホテルだが，食堂休業中で，裏の小路一つ隔てた Restaurant に往つて午餐をする。

私共が Firenze に來たのは，Michelangelo の "David" を見る爲だ。午後馬車で美術館に行く。閉ぢて居るので匆匆に歸る。歸途切り賣りして居る水瓜を見つけ，馬車を駐めて一個5Lで買ふて歸る。歸つて割けば，羅馬で食ふたのとは違ふて甘かつた。

日も傾いたので，私共は輕裝して地圖を片手に徒歩散歩に

出かける。Firenze は目下人口二十餘萬，そんなに大きな都會ではないが六百五十五年前ダンテを生れさせた處として，Michelangelo や Leonardo da Vinci や Raphael や理學者の Galileo も或期間住んで仕事をした處として，藝術の都 Firenze は爭はれぬ位置をもつて居る。1864年から1871年羅馬が陷るまでは，現王朝も此 Firenze を伊太利の都にして居た。

私共は雜踏しい街を出ぬけて，Arno の川に架した古色蒼然とした Ponte Vecchio を渡る。橋上は長い建物になつて，頭上が即ち美術館の一つである。

Neptune の噴水がある山上公園に行くつもりで，一つの丘を上ると，要塞に來て了ふた。驗はしく淋しい阪を下り，車馬などの自由に上りつつある彼方の丘を指してややしばらく行き，長くしい石段を上つて，快活な丘の上に來た。高臺の中央に大きな裸男の青銅像が立つて居る。好い作だなと思ふと，それは繪や寫眞で見馴れた "David" の模造で，Michelangelo の紀念碑であつた。David の下には，同人作の朝夕の四像の模造が四方に据ゑてある。私共が來たのは Piazzale Michelangelo の公園であつた。

高臺の端にはずらりとベンチが据ゑられ，輕裝した Firenze 男女が夕涼みして居る。自動車，馬車，電車などが新な客をのせて來る。

私共もベンチの一つに腰かけて眺める。大きくもあらぬア

ルノの川悠悠と流れ，川に発り，緑の丘につつまれ，更に丘つづきの山に圍はれ，其處に Duomo の大きな屋根の著しい Firenze は物靜かにふりて，如何にも京都の感がある。入日のあと美しく，丘の上の晩凉に，私共は土地の人にまじつてややしばし旅情を慰めた。

私共はやをらベンチから立ち上り，高臺をあとに歩道を下りかける。汗になつたので，私は行く行くパナマ帽を脱いで，五分刈頭を夕風に吹かせる。臺上に遊んで居た子供の數人，私共を見つけて何か呼ばはると思ふと，小石が二つ三つ足もとに飛んで來た。つづいてまた三つ四つ前後に飛んで來た。其一つも私共には中らなかつた。中てるつもりの石ではなかつたのであらう。何れにもせよ，それは Brindisi の土投げと共に嬉しくない事の一つであつた。

私は羅馬で聞いた話を思ひ出した。我外務の當局者がある新聞記者に講和問題の話をして，日本にとつてそんなに大した問題でないものの一例として Fiume を擧げた。それが新聞にあらはれ伊太利に知れると，伊太利人は憤つた——伊太利人に Fiume は大問題であるのだ。そんな事で小石の二つ三つは投げられても不平は云へぬ。然し何かと云へば直ぐのぼせ，それが外國人であらうと，日露戰爭中の上村さん宅であらうとも，直ぐ石など投げる我日本の輕佻を今此處で見せつけられる心地して，私は恥かしい氣がした。日露戰爭後間もなく露西

亞を通つて，唯一度莫斯科で子供が何か罵つた外，成人からも子供からも絶えて不快の感を私が受けなかつた記憶に照らして，私はいやな氣もちになつた。而して途と話もせずにホテルに歸つた。後で聞けば，投石は古來 Firenze 人の癖で，現に其昔 Michelangelo の "David" が位置を移さるる場合にも何かの不滿で石を投げたりした者があつたさうで，"David" 其ものが投石の親玉だから，無理もない處かも知れぬ。

夜は祝捷會ででもあらう，私共のホテル傍の大廣場で陸軍樂隊の Concert があつて，さしもの廣場が一ぱいの人になつた。向ふの家のバルコニイでマグネシウムの紅の火が燃ゆると思ふと，私共のホテルのバルコニイでも軍服の人がマグネシウムを燃して紅の壹を幻出した。

(三)

八月十八日。朝馬車でまた Accademia 行。まだ時間が早いので，菓子を買ひ，妻のピンを買ひ，市場に往つて梨や紫の李を買ひ，妻は馬車を下りて露店からレエスを買つた。私共の伊太利語はまだ單語以上に進まぬが，兎に角それで間に合はせる。店に行くと，品物を指して "Quanto?" と問ふ。"いくら?" と問ふのだ。伊太利數字は音調が面白い。"五" の Cinque——チンクエ—— "狆食へ" と聞こえる。五十が "Cinquanta" で，"Ot-

tanta" が八十だ。先方の言ふ數字が分からぬと，直ぐ此方の手帳を出して書いてもらう。妻もこんな事で，一寸した買物は出來る。

それから美術館行。

三度目で私共はやつと內に入つた。入口の外からもう白い大きい像が奧の方に見えて居る。2Lを拂ふて入る。

頭をとつた十字即ち丁字形の建物，其處には Michelangelo のさまざまの彫刻の模造が陳列されて居る。縣局で見なかつた Moses なども居る。Medici の墓を飾る朝暮の四像も勿論好い物であつた。然し私共は圓蓋の下に立つ "David" の若い美に今更の如くうたれた。Napoli の美術館で，希臘藝術の Apollo を美しと見たが，"David" はもつと生きて居た。Michelangelo が廿七歳の秋から二年四ケ月かかつて造り上げた此 "David" は，即ち Michelangelo 彼自身なのだ。人は自己以外のものを創造せぬ。Michelangelo の David が Michelangelo であるに不思議はない。以前の彫刻家が沒義道に深く鑿を入れて疵物にした無恰好な大理石の大塊から，此大きな美しい生生したものを鑿り出した愛ゝ腕力はげに素晴らしいものである。全く生きて居る。血が出さう。釋尊が說法前に額の白毫から光明を放つたやうに，今大敵に向つて自信の一石を投げんとする美青年の四肢五體，筋と云ふ筋，肉と云ふ肉，活動前の生命の意志に顫へて居る。Sistine Cappella の大壁畫大天井繪に設令如何

樣な批が入つても，此 David はほめずに居られぬ。これなれば一石 Goliath をうち殺せる。これなれば若い女が片端から惚れるに異存はない。もと此 David は約四百年間此處の Public Palace の廣場に青天井の下に立つて居たのを，四十七年前風雨に損するを惜んで，此屋內に持つて來たのだ。好い事だ。また惜しい事だ。粕谷の恒春園に持つて來てもよいものがまた一つ出來た。

Firenze には，Dante 誕生紀念の家がある。二三美術館には世界的名畫が數知れぬ程ある。市中の往復に度ゝ眼を聳立てる Duomo ——其外觀の色彩は Mosque of Omar などを思ひ起させ，其扉の一枚一枚，其處に立つ聖者等の像の一つ一つに好奇の眼を睜らせるやうなものもある。然し "David" を見ただけで，Firenze に寄つた甲斐はある。滿足してホテルに歸る。

夕食に Restaurant に行くと，隣のテエブルから若い女が話しかける。米國は Los Angeles の者で，一人で歐羅巴見物に來て居る。Los Angeles なら太平洋が唯一重，近いお隣りですね，と云ふと，笑つて頷く。Firenze は Columbus についだ亞米利加の發見者，而して America には名親の Amerigo Vespucci の生れ故鄉である。伊太利人が何千萬と云ふ程亞米利加人になつて居るのも偶然でない。亞米利加から此樣な娘がぶらりと遊びに來るのも自然だ。

明日は早い汽車で Milano に立つので，夜の中に Bill を濟

ます。帳場取込みと見えて，計算が 100 L も少なく誤算されて來た。注意してやると，帳場は悅んだ。妻が心附をした女中も心から感謝して居た。

第六
MILANO

(一)

八月十九日。祝捷會で散々飲んだと見えぐでぐでに醉つぱらつた馭者の馬車で早朝停車場に駈けつけ，六時廿分の汽車で Milano に向ふ。

Firenze から Bologna まで約四時間，汽車は山上山間を走る。隧道が四十五もある。山は栗の花盛り。

Bo'ogna からは平野。葡萄畑が迎へて送る。限もないまでつづく。何れも木造りで，中には覆見たやうなものに蔓を這はしてあるのもある。

非常に暑い。Roma から Firenze の汽車に懲りて，魔法罎に雪氷をつめて來た。罎に氷着した氷を無理に振り出さうとして，私は魔法瓶を破して了ふた。硝子を取り捨て，氷を拾つてそれでも妻は頭に氷囊をのせる事が出來た。私共は持參の團扇で連りに風を入れる。

午を持參の辨當で濟ます。

赫赫と日は照り，綺紹もゆる葡萄畑を汽車は北へ走る。水田の綠綠したのを見て，瑞穗の國の日子日女は言ひ知れぬ悅

喜に 滿たされる。

午後三時 Milano の 大きな 停車場に 着いた。

送迎自動車で 市の中央, Cathedral に 近い Hotel de Ville に行く。Firenze から 打電して 置いたが, Hotel 滿員で 私共は 最上五階の 街に面した室に 導かれた。Bath つきでこそあれ, 狹く 暑い。窓から 頭を出せば, 迫かの下を 轟轟と 電車が 小さく 通つて 居る。

水瓜を 取り寄せる。若い給仕は Dance の 足どりで持つて 來た。圓い 黑皮の 水瓜。小四角に 剖つて, 熟否を 見て來ただけ, 十分に 熟して 甘い 好い 水瓜で あつた。坡旦土の水瓜は 概して あまり 上品では なかつた。伊太利に 來てから 追追 食ふが, 羅馬のより Firenze のは 好く, Firenze より Milano のは 好い。私共は 生來の 水瓜黨で, 武藏野の 住居でも, 水瓜季節に 毎日 二個食ふ事は あつても 一個食はぬ事は なかつた。粕谷附近では 近來中〻好い水瓜が 出來る。今年は旅で, 食へぬかと 思ふたら, 好きなものは つきまとふと見え, 新嘉坡で 先づ食ひ, 埃及で食ひ, 伊太利に 來ても機きへあれば 此君を呼ぶ。

(二)

八月二十日。町を歩いて 魔法罐など 買ふ。ミラノは 人口約 六十萬, 伊太利一の 工業市で, Napoli や Roma や Firenze とは

すべての 氣分が 違ふ。此處の大寺院が これまで見ない Gothic 式で あるやうに, 此處には 獨逸魂が 餘程 入り込んで 居るさうだ。粘悍で きび きびした風が 一體に 見える。Hotel の Manager の 顏見ても 獨逸人かと 思ふた。

Firenze で 一日早く出した 私共の荷物が 屆かぬ。いつも 手荷物が 多過ぎるので, 今度は 六個預けにしたら, それが 屆かぬので, 私共は 汗の着物を 更ふる事が 出來ぬ。帳場に言ふて 何度も 催促さしたが, 停車場には 着いて居ても, 出す事が 出來ぬ と云ふ。

午後私は 十五五の Lift boy を 連れて, 馬車で Station に 往つた。其處に ホテルの 客引きも居る。停車場の 荷物部は, 鞄や Box の山をなして, 係も 客も 大汗の 血眼になつて居る。私共のは まだ 貨車の ままに なつて居ると いふ。無理に あけてもらつて, やつと 取り出す事が 出來た。

伊太利に 來ても 埃及, パレスチナのつづきのやうで, 歐羅巴の心地は あまり しなかつた。今日 Milano の 停車場に 往つて, 夥しい Trunk の數を 見た時, やつと 歐羅巴に 來た心地がするので あつた。

第七

COMO 湖畔

(一)

伊太利の長靴の踵の Brindisi から 上つて，向脛の ナポリに出で，羅馬 フイレンツエ，ミラノと 北上して，長靴の頂に來た。後の ツマミに 當る 水の都の Venezia も 見たいが，今度は やめにした。瑞西の避暑が 駄目になつたからは，Como の湖畔に 少し 旅づかれを 休めやうと，私共は 相談をきめた。Baedeker の 案内記は，Como と Lecco と 兩湖の 叉に當る Bellagio の 勝を 說いて居る。私共も 其 Bellagio に 行く事に きめた。荷物は 預かります，勘定は後で，と Manager が 快く 引受けたので，私共は Suit Case 1, Bag 2, バスケット 1, これだけを携へて 八月廿一日の正午を過ぐる三十分，Como 行きの 汽車に乘つた。

暑い ミラノを背 ，桑や 蔬菜や 果物の茂る 綠の畑，綠の林，綠の丘，それ等を 貫いて，午後の二時には 早くも Como の停車場に 來た。

汽車を 下りると，誰やら 後から呼ぶ。ふりかへつて，ばつたり顏を會はせたのは，一月前に別れた ナポリの 下さんであつた。

漫遊中の 高橋代議士に伴まれ，工場視にミラノに來て，Como に遊び，これから歸る高さんを 送つて 今し 停車場に 來たところ。高さんが 群衆の中から 日本人の後姿を見つけて，下さんは私共を見つけたのである。レツコオ廻はりで 歸る豫定の 下さんは，ベラジオ行きの 私共と 同行してくれる。初對面の高さんに 直ぐ別れの 握手をして，私共は 馬車で 下さんの泊 て居る Hotel Suisse に往つた。高橋君は 其年の暮 日本に歸り 今年更に出かけて，此書の校正中 米國シアトルで 亡くなつた。

下さんは 私共を 其室に 延き，滯伊四年 これが 最後のと 云ふ ミツワ石鹼など 妻の爲に 出してくれた。顏を洗つて 私共は 下の食堂で 湖の魚の フライや Mineral water で 晩い午餐して，下さん共に 埠頭から 湖上の汽船 "Volta" に乘つた。ナポリの海を 琅玕洞へ往つた あの船程は あらうかと思はるる遊散船である。

(二)

午后四時 "Volta" は 夏の裝した 男女さまざまの 人人を滿載して，Como の町を はなれた。私共は 日よけ下の 甲板のベンチにかけて，或は 下さんの Dante 談や Lecco の景色を 小說に描いた 伊太利の馬琴の談に 耳傾け，或は 刻々に移り行く 湖上の景を 眺める。

伊太利の湖水の中で，一番美しいと云はるる コモの湖。海拔

は650 呎，瑞西の方から 伊太利へ 二叉の Fork を 挿し入れたやうな形をして居る。東の股が レツコオで，西の股が コモ である。私共の行く ベラジオは，二股が 一つに合ふ處にある。南端のコモの町から 湖の北の端まで 三十哩。高いのは 八千呎に近い山山が 屏風の如く圍ふて，幅は 一番濶い處でも 二哩半に 出でず。而して 深さは 最深 1345 呎も ある。此山の高さ，此谷の狹さ，此水の深さ では，陰氣な 物凄い景色で あらねばならぬ處を，陽氣な伊太利人は，其水に傍ふて 色彩といひ 樣式と云ひ ぴつたりと 周圍に調和して 而して それを 明るくする 別莊やら 寺やら 住家やらを 建て，樹色花容り 美しい植物を 植ゑ，其嶮しい 崖に 自動車の 走る路をつけ，其湖に 輕く水を截つて 往復する四五隻の美しい汽船と 小さな 帆舟と 漕舟を浮べ，人なつこい 遊園こてし了ふた。

船は 此深い 綠の水の面を滑つて，東の岸から 西の岸，西の岸から 東の岸と，梭の如く 忙しく 行き交ふて，ベラジオまで 二十餘ケ所に 寄港する。日傾いて 東岸は明るく， 西岸は 陰になつた。眩しい日に 赤のパラソルをさして 若いレデイ が 立ち待つ 東の棧橋に 船が着く。踏板が 直ぐ渡される。下る者は下り，乘る者は乘つて，船は すうと また 斜に 西へ行く。船が少し行くと 陰になつた西の棧橋に 最早 乘客の顏が 待つて居る。

支那風の 石の丸橋に 綠蔦這ひ，白糸の瀑とでも 云ひさうな 小瀑が 掛つたり，藤の花が 今を盛りに 咲いたり，薔薇，グラヂ

オラス，蝦夷菊，ダアリア，杏竹桃，さまざまの花が 色を競ふて 咲いて居る。心憎い水莊，水門内に ボオトを 繫いで，誰が住むかと 眺められる。

葬送の 行列なども 見えた。

唯有る 左岸の Villa では，桃色服の 女主人が 今し來訪の白服の老婦人と 其孫娘を 送つて出て，咲き盛つた 園の花を 色とりどりに 折り採つて，少女に 持たして居る。主客三人の 笑顏が畫にかいたやう。水を出づる小閣，人待ち顏の石の女像を立たせて居るも 憎い。

私共は 下さんと 此山 此水 此家 此人 此船を眺めて，自然を 己が有にする事に於て，伊太利は 殆んど 行く所まで 行き，我等の鄕國は まだまだ 前途多望だ と云ふに 一致する。

下さんが 此處まで 先日 高さんと來たと云ふ邊まで來た時は，湖の大部分は 陰になつた。船の日よけが 捲くられる。快活になつた甲板のベンチに 私共三人は うつとり 夕景色を眺める。何處の寺でか 鳴り出した 夕の鐘の 琳琳と 好い音が 水を渡つて 響く。

Como 船上

あい

相せまる 山ふところに 水の路
たえぬと 見れば 又 ひらけ行く

赤く 白く 家居は 山に 水際に
緑に かくれ 花に かこまれ

水神か 女像 立ちたり コモの湖
靄と わたる 鐘の 夕ぐれ

七時半 船は ベラジオ に 着いた。Lecco と Como 間に 突き出でた岬の 突端にあつて，しかも 西に面した 明るい 感じの 殊に 輕快な 里である。

棧橋を渡ると，三十歩にして Hotel de Florence である。

Milano から 電報が 往つて居たので，私共の室は 正面二階の 南角に とつて あつた。下さんは 其隣の 一人室に 入つた。

私共の爲に 備へられた室は 快濶な 好い室であつた。西に一つ，南に一つ 觀音開きの扉があつて，小さな バルコニイが 扉から扉へ 廻はつて居る。日入つて 猶明るい 湖から 流るるやうに 涼しい 風が入る。妻の 化粧臺の上には，花が飾つてある。衣裳棚には 綠白赤 伊太利國旗の三色をした リボンで結はえた 香嚢が 入れてある。

日本を 出でて ここに七月，私共は 好い 中休みの 場所を 與へられた。

(三)

八月廿二日。Hotel 前は 湖に突き出した 白砂の廣場で，水邊は 棚作りに 蒔り込んだ Acacia の 天井が 蔭をなし，ペンキ 塗りの 鐵製や 藤製の椅子 テエブル が 數多ならび，早起きの客は 其處で 朝の珈琲を とつて居る。

私共も 洗面早々 其處に出て，朝餐をとる。朝日 きらきら 湖の面に 躍つて，すがすがしいとも 何とも 云へぬ。パンが うまい。コモのパンは 名代のもので 羅馬あたりでも 贅澤な人達は わざわざ 取り寄せる，と 後で，下さんの話に 聞いた。全く パンが うまい。バタもうまい。乳がうまい。オムレツ は 少し鹹いが，卵も うまい。田舍のお蔭だ。Yasnaya Polyana の 食卓の心地がする，と 私は 妻に曰ふた。

食後 少し歩く。

Acacia の 蔭の南は，緩勾配の 鋪石になつて，水には 遊散の 小艇が 多く 纜つてあり，波打際には 板の臺を据ゑ，前俛みになつて 若い 老いた 女達が 賑やかに 話しながら 洗濯を して居る。其向ふは，汽船の發着所。それと 相對した 一帶は，ホテル，Café，色色の賣店が並んだ ベラジオ の 河岸通りとも 云ふべき 片側街。人口 千五六百には 過ぎぬ 小さな遊散場としては，整ふて居る。繪はがきなど 買ふて 歩る。

大きな ホテルは 戰後の事で 閉ぢて居る。私共のが 開いて居る中での 好い ホテルだ。然し 勿論 Bath つきの室はない。Bath room で 一浴して 歸つて居ると，下さんが來た。 縮緬の羅紗から 朱錦繡で 表裝した 分厚な 小形の 折本を 出して 見せる。 D'annunnio や Nitti や 伊太利の 名ある人人が 奉書氏に さまざま ペンを揮ふて居る。鐵條網に 肉落ちた 片手が引きかかつて居る Pen 畫は 頭に來た。畫家が 戰場の 實見で あるさうな。 私は 羅馬のある阪町で，度度出會つた 手の無い腕を 思つた。 馬車で 其阪を 通ると，まだ若い 八寸髯の 其男は 通る毎に 馬車の内を 覗き込み 默つて 其手無しの腕を 突き出すのであつた。二度は 錢をやつたが，三度目には 唯目禮した。 先方も 此方の顏を 覺えて，尋常に 引さがつた。鐵條網に 引かかつて居る 此手が あの腕の先について居たので あるまいか，など思ふ。

"一つ 先生をお悅ばせする事が ありますよ。多分 お悅びにならう と 思ふのですが。"

下さん 玉手匣の蓋に 手をかけた と云ふ風で，鍵から棒に，さも 惜しさうに 言ひ出した。

"何ですね，それは？"

"Tolstoy の 家族が 來てますよ。"

"Tolstoy の 家族が？——何處に？"

"此處に。此 ペラジオに。加之 此ホテルに！"

下さんは 今其處の 繪葉書屋で 聞いて來たと云ふて，老夫人

をはじめ Tolstoy家の家族一同 避難して 先日から 來て居る と云ふ話をした。

Tolstoy の 家族が 此處に！何と云ふ 奇緣であらう。露西亞には 入れさうもなく，夫人に書いた手紙は テベリアの 英吉利郵便局でも 坡西上の 佛蘭西郵便局でも 受けつけて くれず，何も駄目と 思ふたら，ちやんと 此處に 居たのか。

昨夜 食堂で 彼共が 三人 一つの食卓についた時，少し 離れて 大勢の 一座を見たが，偖は それが それで あつたのか。下さんは 昨夜 アカシアの蔭で 子供が ころげて 泣いたのが，如何も 露西亞語らしかつたと云ふ。

兎に角 不思議な會見を 撮影す可く，下さんは 寫眞の Film を 買ひに 往つた。 私共は 間もなく 午餐に 日本服で 出て 會はうとして 用意に かかつた。 荷物は Milano に 殘して居るので，私は 單衣に 薄絹の 紋付羽織，妻は 縞の透綾に ぐたぐたになつた 絹の狹帶，草履もないので 私は Slipper 妻は 靴ばきで 御免を 蒙る。

午餐の 鈴が鳴つた。私共は 下さんと 食堂に往つた。 彼一族も 長い卓についた。花や 小さな國旗を 飾つた其卓には，男女老幼 十人近くもかけて居る。 主席に 此方 向いて 七十位の上品な 黑衣の 老婦人が かけて居る。 眼を とめて 昔の私の 喧嘩相手を 見る。違ふ。如何見ても 違ふ。私が トルストイ夫人を見たのは 十三年前だが，まさかに 見忘れはしない。これが 果して Sophia 夫

人で あらうか。もしか これが 果して それと すれは，あまりに 變り様が甚い。重ね 重ねの 苦勞で アクが ぬけたとしても，あまりに 此老婦人は やさしく 和らか過ぎる。

"違ふ——やうだ。"

と私は 云ひ出した。

"違ひますか。私なんか 高師の友達と 久しぶりに會つて 面忘れを したりする事が ありますから。"

下さん は 憚びない 顏を する。

"誰か 見覺えのある方が あの中に ありませんか。"

私は 家族の 一人 一人 を 見る。今一人 中老婦人が居る。それは 知らぬ顏。三十餘と思はる婦人。其妹かと思ふ娘。丈高な 十五六の少年。六歳ばかりの腕白を連れた 若い母。藤色の頭巾を かぶつた 若い婦人。其何れも 私が 識る 顏ではない。五十左右の でつぷりした紳士が 一人居る。少し高いが 鼻などは やはり トルストイ鼻，重い 顏立が，トルストイ顏でなくば 少なくも 露西亞顏を して居る。先年 Leo Tolstoy を 見忘れた事があるので，未だ會はぬ 長男の Sergei が 此れかな，と思ふても見る。

兎に角 ぶつかつて 見るより外は ない。

私共は 先づ 食堂を出で，客間に 待ち伏せした。

やがて 彼一族も 出て來た。私は 紳士を 捉へて いきなり問ふた。

"失禮ですが Tolstoy の 御一家でせうか？"

紳士は 手を擡つて，若い一婦人に 私を 識つた。婦人は 英語を話す。其話によれば，婦人は トルストイ伯爵家の人だが，本家トルストイで，ヤスナヤ ポリヤナ の トルストイではない。ポルセギキ が 誰も彼も 畑か工場へ 追ひやるので，兎角して 逃れて來たのだ。Odessa では 船に 抑留され，皿洗ひなどして，夜も 屋根のない所に 寢かされた さうだ。

"Tzar が 殺されたと 申すのは，本當でせうか？"

と 婦人が問ふ。まだ 其様な 問を するのか，と 私は 少し 胃をいためた。私は，不幸にして それは 事實で あるらしい，と云ふて，Tzar が 殺された 室に 血痕などの 迸つて居る寫眞を 新聞で見た事を 語つた。

"信ぜられません。私共自身でも 二度も 殺されたと 云ふ評判が 立つた位ですから。"

無理もない。婦人は 尙 言を つづけた。

"Who will help us?" "誰が 私共を 助けて 下さるのでせう？"

此問は また 私の 胸を いためた。

私は 辛ふじて 斯く 反問した。

"あなたは 日本が 兵力で 露西亞に 干涉して 欲しい と 云はれるのですか？"

"獨，露，伊，日，四國 盟の議が あると申すのは 本當でせうか？"

ここに 下さんが 圖に 入つて來て，話は 其方に 流れて 往つた。

やがて 立談の 一幕は 終つた。

トルストイ違ひに 私共も 下さんも 多少 がつかりした。然し私は 室に歸ると 妻に曰ふた。

"Tolstoy 違ひは 殘念だつたが，實は 其方が 好かつた。ヤスナヤの家族が 墳墓の地を はなれて 外國に ぶらついて居たら，それが 嬉しい事で あらうか。如何に ボルセボキが 血迷ふたつて，トルストイの 家族は トルストイの墓が 保護する。民が 保護せずには 措かぬ。"

然し 力ぬけがしたのは，矢張 事實で あつた。

同時に 彼の 矢張 トルストイの姓を 名のる婦人が 私に問ふた 彼の "Who will help us?" の 一語が，私の頭に くつついて，一方ならず 私を 惱まし 始めた。

* * *

下さんが 私共の室に來て，苦い茶を 飲みながら，さまざま 伊太利の話を してくれる。露帝は殺され Kaiser は逃げ，伊太利にも 遠慮會釋はない 無政府主義者はある。賢明な Umberto 二世は 首相の Nitti を招き，民意とあらば 王位を退いてもよい，と 御意があつた。Nitti は 感激して，決して 其御心配は 入りませぬ，萬萬一王國が 共和政に 變る事があらう共，其時 第一代の 終身大統領は 陛下です，と 言上した。賢明な父王には 賢明な太子が生

れる。戰爭で 盲目の上に 片手 萎へになつて 將校が 靴の紐が 結べずに居ると，跪いて 結んでやつたりして 件の將校を 感泣させたなども 一例である。一切が 改まる時代に，元首は 飾り物でない。伊太利は 賢明な王室を有つ事に於て 幸福である。

七首 仕掛の 笄を挿した ナポリノ姐御カモリスタの女の話，銀の鐘を 鳴らして 某の山寺に 參拜に行く 祭禮の話，ナポリの街に ころがる 浮浪兒を拾つて 育てる女の話，捨兒院の話，町の馭者か何かの 不埒から 伊太利に 幻想をつかした 日本の 學士が 田舍路に 迷ふて 純朴な村人の厚遇に 我を 折り 日本に歸つて 其家に 禮物を贈つて來た話，話上手で 情熱に富む下さんの話は，私共に 伊太利を しみじみと 味ははした。

私は 下さんの Album に 斯く 書いた。

(一)

初めて 相見し ナポリ の 海，
再び 相逢ふ コモ の 湖。
緣は 深し
伊太利の 美しき 其水の如。

（二）

素通り がちの 日子日女に，

心 とめよ と 斯く ばかり

伊太利 愛づる 君をしも

一たび ならず 遣はしし

父の 心も 汲みて 知る。

大正八年 夏 八月廿二日

伊太利 コモ湖畔の ベラジオにて

德富健次郎

＊ ＊ ＊

夕食後，私共は 下さんと Acacia の 蔭に徃つて 涼みながら話す。下さんは 明早朝の船で 立つと云ふ。下さんは 滯伊四年，夫人子供は 東京住居で，同心離居は 嬉しくない。今度は 四年ぶりに 飛行機で ダンヌンチオ と 日本に 歸るのである。伊太利の飛行機は 日本なんかのやうに 滅多に 落ちる事はないし，落ちてダンヌンチオと 心中するなら 本望だ，と 下さんは曰ふ。

Dの事から 私は 羅馬で Dに 會はなかつた 話をする。外國に出る 日本人は，ややもすれば 卓下に 過きる。空しい 倨傲自大は 沙汰の 外だし，謙虛益を求むる精神と 嘆美憧憬の情は 大切だが，自ら立つ處は ちやんと 踏まへて居たい。Dは 飛行機で 一氣に 空を飛ぶ。私共の旅は 大地を踏むで，然も 膝ぎり 踏み込んで歩く。貧弱な外見 と 醸醸する內容で，揉まれ 揉まれ 世界を歩く

事も さう 氣樂な ものではない。

話終へて いざ立つ時，下さんではありませんか，と 聲をかける 若い日本人がある。久原の人さうな。他に 今一人居る。下さんは 新來の 知人の爲に 出發を 延ばす事に なつた。

（四）

八月廿三日。今朝も アカシアの下で 朝餐。それから少し 北東の方を 歩く。私共の Hotel と 通路を 隔てて 北側に 水を控へた 大きな Grand Hotel は，閉ぢて居る。 阪を上り 北に折れて閉ぢたホテルの 裏に當る 淋しい路を 行くと，岬の端に來た。淋しい埠頭がある。石堤を 歩いて 盡くる處まで行くと，古い 小さな納骨堂が 立つて居る。戰爭で，伊墺の 戰つた 今度の 山岳戰の場から 此コモは そんなに 離れても 居るまいが，直接の血は 此處には 流れなかつた。納骨堂は 水死の人でも 吊ふたので あらう。此處は Lecco と Como と 一つに合ふ處で，湖の幅が可なり 濶い。湖の北端は 折れ曲つた 山の屏風に 隱れて 見えぬ。東に 水を隔てて 呼べば 響へさうな 邑が あるのが Varenna で あらう。西に 同じく 湖を 隔てて 少し 遠いのは Menaggio だ。少し 眺めて 歸る。女が 洗濯して居る。十三四の娘と 十ばかりの 男の子が遊び半分 洗濯を 手傳ふて居る。直ぐ上に見ゆる 小さな別莊の 子等で あらう。

私共は もとノ阪に 出で，今度は 阪を上つて 山手町を 歩く。小さな 帽子屋を 見つけ，妻は 薄鼠羅紗の 夏秋帽の 可なり 店曝らしに なつたのを 40 L で 買ふ。リボンを 取り換へさす。それから 尙歩いて行く。ベラジオは 木の Mosaic や 木彫物が 名物で，橄欖細工や 挽物店が 其處此處にある。大分 往つて 石段を 下り 下りして，湖岸通りの 南のはづれ近い 處に出た。衣服店がある。絹ノ莫大小 は 此邊の 名産である。妻は 銀鼠の Jacket を 一つ買ふた。100 L。ゆきが長過ぎるので，つめて もらう。廿一二の女が，三十分間で 仕立直して 置きますと云ふ。私共は 少し そこらを 歩いて見る。Grand Hotel と 南北相對した，Hotel Bretagne も 大きいホテルで あるが，これも 閉ぢて居る。ホテルの前から そこら一帶は 水に沿ひ，刈り込んだ 矮大の プラタヌスの並木の蔭線に，石や木ノ ベンチが 其處 此處に 据ゑられて，斜に ベラジオを見，水を隔てては Cadenabbia あたりを 眺めて，好い Promenade である。少し あるいて 衣服店に 寄つて見ると，まだ 出來てない。あとから ホテルに 屆けるといふ。

下さん達は 今日は 汽船で 湖の北の Colico まで 往つて來たさうだ。變つた景色もないと云ふ。

妻の Jacket が 屆いた。明るい處で 見ると，店曝らしらしく，色褪せた處，綻り疵などが 眼につく。

午後 少し 夕立があつた。

（五）

八月廿四日。朝は 例の アカシアの下で パンを食ふ。今日は 中〻暑く，寒暖計は 83 度に 上つた。然し 日が 熱する程，湖水は 微風を 送つて くれる。

日曜で 寺の 鐘が 鳴る。頭の上の寺で，面白い 拍子をとつて 鳴る。向ふ岸の カデナッビアの方からも 水を渡つて 鐘の音が來る。此岸の 次の村 San Giovanni の方からも 響いて來る。唯の鳴り方ではない。正に合唱だ。Art が鐘に入つて居る國民で，お寺の鐘にも 歌を 歌はせねば 安心が 出來ないのだ。

日曜なので，來る船も 來る船も 一日歸りの 游客を のせて來る。"Volta" "Como" などは 大きい Salon 船で，"Brunatte" "Barnadello" 等は 小さい外輪の船だ。それが 間斷なく 行き交ふので，湖は 賑やかである。マンドリンなど 頸にかけ，船を上ると いきなり彈いて歩るく 青年紳士がある。子供の爲に 風船をふくらまして 空に 拋げ 上げてやる 父の大供がある。遊覽舟も 引切りなしに 出る。水にも 陸にも 遊びの氣分が 漂ふ。Tolstoy の boy も お婆さん 姉さんなど のせて，甲斐 甲斐しく 腕まくりして 漕いで居た。

私共も 下町をぬけて，鈴かけの木の Promenade を Villa Melzi の方へ 歩く。巖に 咲いた 色美しい 撫子の花を 摘む。

下さん達は，今日は 對岸へ 遊びに 往つたやうだ。

午後は 水瓜を食ふ。昨日 町で 自身 買つたのは 少しふるかつたが，今日ホテルのは 甘い。

夕食後に また 食ふ。トルストイー族が 面識になつて，今は顔見る毎に 目禮を かはす。腕白が 母に 叱られながら ともすれば 私共の方を 振り向き 振り向きする。今日の 水瓜は 小さな Barin に 少し 殺生だつた。

(六)

八月廿五日。朝 入場料 2L を拂ふて，背後の丘の上の Vil'a Serbelloni を 見る。大きな 別莊は 空しく，然し 手入れの人が五六人も 入つて居た。家のほとりから ベラジオの 南面の 高臺を見下ろし，それを 見越して 左手に Lecco の湖を 見る。栃見たやうな 大木には，植物園のやうに 木標を 立ててある。更に つけられた 山路を 丘の頂に 上る。凝灰がある。松の間 から 湖水の緣を 見下ろす 崖の端に 來き。昨年の夏 私共が 瀬戸内海の 醉島を 歩いた 其日の 記憶が 手圖蘇つて 來た。今日散歩の 婦人達の手に 澤山 Cyclamen の 花を 持つて 居るのを 見たが，此處の山にも 自然生の 其花が 數多見えた。

Varenna から 汽車で 歸ると云ふて，下さんは 午後の三時 二人の 若い人達と 船に乘つた。棧橋に 見送り 握手して 別れた 私

共は 更に アカシアの下に 戻つて，前を Varenna の方へ 過ぎ行く 船に向ひ，私は帽を 妻は 手巾を 振つた。下さんの 眼鏡 の上の 濃い眉は，船と共に 遠くなつた。

いざ 歸らうと アカシアの下を 離るれば，眞青い空に 白雲が翔る。

ああ 秋だ！

北の角の室が あいた。移る事にし，掃除が済むと 二人で さつさと 荷物を 移したが，日も入る かはり 風も入る 先ノ室が 矢張好い と 謂ふので，また二人で せつせと 元へ 荷を運んだ。其驛ぎに 妻のピンは 落ちて折れた。ナポリで 買つたばかりの 鼈甲の ピン。妻は がつかりする。

夕方 散歩。妻は 新調の 帽，新調の Jacket である。服屋に往つて 先日の娘に 代を 拂ふた。すれたり，疵があつたりするのを 指摘すると，娘は 5L 引き，また 5L 引き，90 L を 受取つて ありがたうと 云ふた。それから 小間物屋で 妻は ピンを二本 買ふた。三本脚で，トマリが よいと云ふ。而して それは やはり 鼈甲で あつた。

菓子を 買ふ。カステラ もどきのもの。日ましであつたと 見えて，喰べたら ぱさ ぱさ したもので あつた。

夕食後 室に歸つて，果物を呼ぶ。"Subito —— 只今" と 云ひつつ，やがて 持つて來た。梨が うまい。

夜に入り，電が 物凄い。Porter が 大急ぎで 窓の Blind を

しめに 來た。

枕に 就く時，雨のたたく音，湖水の唄ぶ音が 聞こえた。

（六）

八月廿六日。昨夜の雨の後，今朝は 曇つて 涼しい，室内で朝食。

Milano の Hotel に 手紙して，ベラジオ滯留を 今一週間延ばすと 言ふてやる。

それから，柏谷の留守を頼む 篠の金さんに，來年三月歸る時畑が あいて居るやう，大小麥蒔は 見合はすべく 言ふてやる。

郵便を 出しがてら，夏外套を被て 私共は 出かける。下町はづれの 郵便局で 手紙を出すと，例の プラタヌスの Promenade を通り，Villa Melzi を，半周し，それから 東に折れて ゆるい 阪の大路を 上る。道傍は 葡萄畑や 蔬菜畑に なつて居る。畑の人を見つけ，玉蜀黍を 三本もらう。20 C やつたら，兩手を擴げ ベソかいて 見せた。更に 10 C やる。少し往つて，まだ 滿足して居なかつたと 妻が 云ふので 立戻つて 更に 30 C やる。阪が下りになる。下りて 北に折れる。聖母マリアを 畫がいた Fountain があ。それから 下りて 行くと Lecco 湖の濱りに 出た。絹織物の 工場がある。嶮しい 石徑を 上り 下りして 汗になつて Hotel に 歸つた。

午餐には 美しい リボンを かけた 特別の 果物籠が 私共のテエブルに 供へられた。昨夜の 果物以來，果物好きが 知られたのだ。花は 到着の最初から 日毎 新らしいのが 飾られる。花の色が好いのは，空氣が好いのだ。

午後は 玉蜀黍を 燒かせて食ふ。田園味が 私共を 居ながら鄉土に 歸らせる。

夕食前，時間が 少し 早いので，Piano を 据ゑた 小さい 客間に 入ると，トルストイー族の 丈の高い 孃と息子が居た。やがて先日話した 彼婦人が 來た。妹かと思ふた娘は，夫人の女で，息子は卽ち 子で あつた。姉は 西洋齡の十六，弟は十四。共に 私共を 見下ろす せいたかさんで ある。老婦人は 其人の母。他はすべて 連れの 亡命組。良人伯爵は 西班牙風で 七ケ月前に 露西亞で亡くなつた。夫人は 寡婦であつた。ボルセギキの 所業について，夫人は さまざまと 訴へるので あつた。一番つらかつたのは，あの 丈高息子を 十一日間 拘留した事である。殺す，と 脅かしたさうだ。すると Boy は，何卒 殺して下さい，亡くなつた父の許へ行くのは 悲しみではなく 喜悅です，と 云ふた。幸ひに Boy は母に歸へされた。

"I am helpless!"

夫人は 潸と 泣く。妻も 泣いて居る。

食堂の鈴が 鳴つた。

打連れて 食堂に行くとして，見れば 妻は Tolstoy 夫人の手を

濕つて居た。

食後 私共は 南の方へ 運動に行き，あの Promenade の ベンチに 腰かけた。

町の 火光は 明るいが，空は曇り，湖の面も 暗く，私共の心も 重い。

Tzar を殺され，良人に死なれ，故國を去つて，姑と二人の子女を連れて 流浪する夫人の口から，

"Who will help us?"

と云ふ 言葉が出るのは 自然であらう。

誰が 助ける？ 誰が 露西亞を 助ける？

其間は 重く 私共を 壓しつける。一方には ふるいもののふるきを失ふ悲哀。一方には 復讐的に 咆哮する デモクラシイの暴れ。私共は 其間に立つて ほとほと 堪へがたい 重荷を 感ずる。

誰が 露西亞を 助ける？私が助ける。日本が助ける。斯く言へたら，嘸 痛快であらう。

如何に 露西亞を 助ける？ 日本の兵力を擧げて ボルセヰキを擊滅して，Romanoff 家を 復興せぬまでも，昔のままの秩序に 露西亞を 復へさう乎？

否。否。 兵力の干渉は 決して 何の救助も なし得ぬ。露西亞を救ふものは，露西亞で なければ ならぬ。

革命は 決して 後もどりせぬ。また さしては ならぬ。

Bolsheviki が 暴れ過ぎやうとも， 外來の干渉は 唯それを募

らし，こぢらす ばかりだ。

私は 露西亞が 必自ら救ふ事を 信ずる。露西亞の 良いものが 必勝つ事を 信ずる。

私共は 信ずる。

然し 眼の前の はかない 飛花落葉は，私共の心を 重く せざるを得ぬ。

おお 露西亞！ 私共は ひたすら祈る， 卿の爲に祈る，もつともよきもの 支配せよ，もつともよきもの 卿を待て！

（八）

八月廿七日。今朝は また Acaciaの下の 朝餐。メロンが 甘い

それから 昨日の路を また 歩く。玉蜀黍を 買つたあたりで，今度は トマトを 三顆買ふ。代はいらぬと云ふ。5)Cやつて悦ばす。而して 夫妻道傍の 石の Seat に かけて， 悠悠と それを 食べる。

歸つて 一浴。

午後 晝寢をしやうとしたが，あの Saloon で Tolstoy 組ではない 咽喉自慢の Lady が 聲ふるはして しつこく歌ふのが 氣になつて，如何しても 眠られぬ。

其せいでも あるまいが，私は 日本へのたよりに，此樣な事を 書いた。"伊太利は 日本に似て居る。似過ぎて いやな事がある。

伊太利に 二ヶ月も居ると，藝術が 何でもなくなる。伊太利を 歐羅巴の日本 と謂ふが，日本には 日本の骨頭 日本の 面目が 當然發揮されねば ならぬ。世界に 唯一の 日本だ。”

（九）

八月廿八日。私共の Bellagio から 湖を隔てて 向ふを見ると 高さ 七千呎左右の峰が 二つ 山屏風の上に 肩を 聳やかして居る。高い方を Crocine の峰と云ふ。其頂に 十字架が 立つて 居る。あの上に登つたら さぞ 眺望が 好からうと 日夕 眺める。 上に路はちやんと 見えて居る。然し 私共は 上る事を 見合はせる。其中腹に 突起した 岩山がある。San Martino 岩と 云はれて，其處には寺院がある。其處の鐘の音が よく 水を渡つて 來る。せめて 其處まで 上らうかと 思ふが，あち 見えても 中々高い，と また 思ひかへす。それから 少し下つて，隨分高い處に 家が ちらほら して居るのは，別墅であらう。あんな處に よく，と思ふ。水など 不自由ではないか，など思ふ。此峰此岩，此山屏風の 麓に 水に沿ふて 横一文字に 人家の黄ろく 赭く 白く 見ゆるのが，Cadenabbia だ。山上りをしないかはり，今日は その Cadenabbia に 往つて見やう。其處の Villa Carlotta は 下さん達も 先日 見に往つて，Canova の 彫刻を したが ほめて居た。

朝食後，私共は 埠頭に 繋つてある 遊舟の一つに 乘る。艙に

半圓形の Seat が あつて，幌仕掛けの 日よけが ついて居る。顔馴染の 舟子が 一人で 漕ぐ。

美しい水の上を 三十分にして 舟は Cadenabbia の 埠頭に着いた。

Villa は 水に傍ふた 大道を 下にして，丘腹に據つて居る。門が しまつて居るので，側路から 少し上つて 開いて居た 通用門から 入る。路を 尋ねあぐむで居ると，耳の立つた 大きな 茶色の犬が 出て來た。少し 氣味が惡いが，案内顔の犬について 行くと，留守居の 居所に來た。Villa の 主は 獨逸の貴族で，今勿論居ないのだ。番人は 濟つたが，終に 彫刻の名作を 集めた 室の扉を 開けて くれた。Canova の Cupid と Psyche は 美しい 作である。

園丁の案内で，庭園を 見て廻はる。 南面して 日あたりの好い，コモ湖畔で 一番暖かいと云ふ 丘腹を占めて，大きな 泰山木，大きな 石楠花，躑躅や 日本物と云ふ 椿などが 蔥蔥と 茂つて居る。泰山木の花ざかりは 嗽芳しい事であらう。石楠花や 躑躅の盛りの色も 偲ばるる。黄土色に塗つた 邸宅の周圍の 明るい處には，花壇の花が 色美しく 咲いて居る。寒ぼほひは するであらうが，レモンなど 生つて居る。園丁が 五六人も 立働いて居た。 此處から 私共の Bellagio を見ると，綠の大蛇の 湖水に 水飲むやうな ゆたゆたした半島，それに據つて 水から 浮み出たやうな白壁紅樓參差として，畫にかいたやう。

園丁に謝して 正門から出で，待たして置いた舟で また漕がれ

て Bellagio に 歸る。舟賃 5L。

歸ると，夕立が來た。 凉しく，鬱陶しく，歸思頗に 動く。同宿の 露西亞の人達の心を 思ひやる。

(十)

八月廿九日。今日は 湖水の東岸を Lezzeno まで 遠足に 朝八時半から 輕裝して 出かける。町をぬけ， Villa Melzi を 半周し，Giovanni の村の 波打際から 道と 山の腰に上り，高い崖の上の路を行く。昨日 遊びに往つた Cadenabbia の Villa Carlotta が 湖の向ふに 指ざされる。路傍の草に きりぎりすが 鳴いて居る。野花を 摘みつつ行く。野生 Cyclamen の花などが 草叢に 咲いて居る。

Bellagio が 大分後になる。向ふ岸の 小さな邑が 次次に あらはれる。小さな汽船が 甲斐甲斐しく 駛つて行く。 汽笛が 響く。

道草を摘み過ぎて， Lezzeno に 着いたのは 十一時，乘つて歸るつもりの 汽船が 十分前に 出てしまつた處で あつた。

乘合自動車が 二時には 通るといふ。 然し 私共は 舟で 歸りたい。水邊の Restaurant に 下りて 舟を頼む。用意の 出來る間，珈琲菓子など とる。 此處に 間借りして 避暑して居る 家族と 見えて，日本人珍らしく， Lady や 小姐が 話しかける が，言葉が 通はぬので，例によつて 遺憾の物別れになる。やがて 家族は別室

に 午餐に 去つた。舟の用意が出來た と云ふので，私共も 下りて 乘る。舟賃，珈琲菓子代を 拂ふて，少きの Tip を 置いたら，主人が Lezzeno の 畫はがきを 二枚くれた。

十二時半に 舟が出る。非常に暑い。五月のテベリア湖は もつと 凌ぎよかつた。眞上から 照りつけるので，日よけも，帽も たまらぬ。漕ぐ舟子は，もとより 汗の珠を 滿面に 垂らして居る。

油の如く 滑らかな，とろりとした 水を 分けて，舟は 崖下を 行く。此邊が 湖水の 一番深い處さうな。 千尺以上の 深い水とも 云はず，舟は 輕く 其面を滑る。

崖から 滲み出るやうに，小さな瀧が 落ちて居る。

崖の 小さな 瘤のやうな 地所に 別莊が 建てられて居る。其處のであらう，巖蔭に 小舟を 繫いで，若い Lady が 讀書して居るのは，心憎い。

崖の根をうがつて，此處に 綠洞なるものがある。 舟を入れて 見る。半人工を 加へた洞で，琅玕洞と 比べものには ならぬが，暗い中の水から來る 綠の光は 美しいものであつた。

先刻から 咽が かわいて，しばしば 湖水を掬んで 見るが，舟が 動くので よく 手に溜らぬ。ホテルから持つて來た 固いパンを 二つに割り，中を空洞にして 掬ふて飲む。二杯にして ぐたぐたになる。

Giovanni を 右に見，いつも 其外を 半周する Villa Melzi を 水の上から見て，午後二時 舟は Bellagio に 着いた。

夕方から荒模様になる。

(十一)

八月三十日。風雨盡日。電光。雷鳴。湖上は風浪騷がしく，出好きの私共も終日一室に閉居。

夕方明るくなる。

室を出て行く拍子に，壁の出端で妻はいやと云ふ程小鼻をうつた。タオルで冷やしたりして，間もなく食堂に下りる。少し時が早い。妻を客間に待たして，私はキモノとスリッパアで藥買ひに走る。まだ風が盛に吹いて居る。秋も末方のやうな冷たい風。落ちた青葉が鋪石の上を吹きまくられて居る。夏は過ぎたのである。Glycerine の小瓶と絆創膏を買ふて歸る。

夕食の席で，妻の話に，露西亞人の家族が皆で話に來たさうな。老婦人は本野夫人を識つて居た。本野さん達が露都を引揚げる時，美しい家具など Tolstoy 家に贈つたさうだ。腕白兒の若い母さんも來て，露西亞語で話しかけて，妻は困つたと云ふ。昨朝であつた，朝餐に Acacia の蔭に行くと，あの連れの中の初老の紳士，私が Sergei Tolstoy かも知れぬと思ふた彼男爵が新聞を讀んで居た。私は“ドブルエ，ウウトラ——お早う”と云ふて手をさしのべた。彼は“A very good pronunciation! ——好い發音です!”と答へて，喜んで握手した。そんな事から少し

露西亞語が話せると思ふたのであらう。そんなに自國語を話さるるのはうれしいものなのだ。誰とでも其國語で話せたら嘸好いであらう。それでなくば，Bahai の說の如くに，萬國共通語を自國語外に萬人必修とする事だ。

歸って窓から見ると金色の弦月が空にかかつて，湖の波は白く Promenade に打ち上げて居る。

妻は氷嚢で小鼻を冷やした。

(十二)

八月卅一日。風雨のあと，からりと晴れて，朝が冷たい。夏は過ぎたのである。

玄關側の小食堂で朝食。

Villa Melzi を見に行く。ぐるりと廻はつて南門から入る。案內者が導いて見せる。Villa は水に臨んで，對岸の Villa Carlotta よりも廣濶だ。楡や松の大木がある。Platanus の並木は水に沿ふて居る。睡蓮の池がある。大きな花のペゴニアの花壇がある。鹿もみぢ，縞すすき，宮城野萩に泉水をあしらつて，日本風の庭園がある。案內者は香ばしい白い蔓ものの花と，葵の葉見たやうで芳しい葉を妻に摘んでくれた。

Dante が Beatrice を見上げて居る塑像がある。

西班牙の Alhambra を模造した天井に星を鏤ばめた小さ

な 堂が ある。

此處の 見晴らしは よい。 湖の水を見る眼は 突と 北に 走つて，瑞西からつづく 高い山の 白きを 見出でた。雪が 降つて居るのである。風の冷たさが 思ひ 合はされる。

最早 Como にも 秋が 來たのだ。

案内者は 私共を 北の門から 出した。

今日は 夏の終りの 日曜なので，Bellagio も 客で 賑合ふ。

前の日曜に來た 若い夫婦，翌日から 妻のみ 食堂に 出て居たが，今日は 夫も 來て居る。Milano あたりに 勤めて居る 男なのであらう。

私共は 室に籠る。妻は たびたび 氷嚢を 取り換へて 小鼻を冷やす。夕方 何にするぞと 怪しむ主婦に 談じて 生の馬鈴薯を 三つ もらひ，妻は 大形のナイフについた 小さな鋸で 薯を挽いて 紙にのし，それを 額と鼻に 貼り，それから 歯痛の箇所にも 含むだ。里芋のかはりの馬鈴薯——それでも 大變に 効がある，と 妻は喜ぶ。

小さな Poodle が 戸惑ひして，開けてくれと 外から 戸を引 爬く。あけてやると，悠悠と 寢そべる。Cairo の 小犬を 思ひ出す。

流浪のお供の 女中が 下で 時時 食物を やるのを 見うけた Tolstoy 家の 犬である。

（十三）

九月一日。美しい朝。確に 秋だ。一昨日の風雨は，夏を捲る風雨であつた。秋よ 私共を 追ひ立てる，白雲の 空を 行くやうに。私共の Bellagio 逗留も 追ゝ 二週間になる。最早 そろ そろ 神輿を 上げる 時だ。そこで 四日に 出立と きめる。若し 私共が 豫定の 如く 來年三月初に 日本 に 歸ることが 許されたら，八月は 丁度 此旅の 眞中である。旅の眞中に 此美しい景色，快適な ホテルに 二週間の休養は，非常な 恩惠である。

Acacia の下で 朝餐を濟まして後，舟で 東岸の Varenna に 往つて見る。Cadenabbia は 三十分で 渡れたが，Varenna には四十五分を 要した。大理石工場があつて，舟つきには 大理石屑が 散亂して居る。汽車で Colico へ 往つて見る つもりで，停車場まで 上つて見たが，發車後なので 見合はせ，街を 歩く。別に 何の 奇もない 町である。朝食から 持參した Melon を 食ふべき場所を 探がして，Royal Hotel と 云ふに行き，後園に 出て見る。此處にも 避暑の客が 居て，小さな女兒が 二人 遊んで居る。それから Victoria Hotel に 往つて見る。其庭園に行く。此處は 高く 湖を 見下ろし，私共の Bellagio の 半島を 頭の方から見る。少し 憩ふて居ると，先刻の女兒が 二人 やつて來た。Royal Hotel と 庭つづきなのだ。大きな方なのは 伊太利娘で，Elena と 云ふ。人形を

もつて居る。小さな方は 英語を話す。Becky と 自ら呼ぶ。靴が脱けると 年長の子を呼んで はめさせたり する。私共の風呂敷包の中に 何が入つて居るかと問ふ。Melon を 出して 食べないかと 問ふ と，否と 云ふ。妻が 伊太利娘の 畫はがきを 二枚やる。それから軟らかい紙で 鶴を 二つ 折つてやる。Becky は，如何して 飛ばするか，と問ふ。Melon は 其ままで，畫はがきなど 買ふて 私共は また 舟に 歸つた。

舟は 今し方遊んだ ホテルの下を 通る。上には まだ 兩兒の姿が 見えて居る。綠の水に 魚の 泳ぐのが 見える。高女生位の娘が 三人 達者 舟を漕ぎ，兄弟らしい青年が 舵を とつて居る。白い蝶蝶が 水の上を ひらひら 飛ぶ。

（十四）

九月二日。朝食後の 運動に，町はづれに 据ゑてある 自働計量器に のつて 見たら，私が 159 封度，妻が 117 封度あつた。私が 十九貫，妻が十四貫百目餘である。

みやげ物の 木彫の牛，木モザイクの箱，紙切り など 買ふて 歸る。

夕方 また散歩。對岸 Monte Crocine の 頂に 赤い火が見える。

（十五）

九月三日。朝食後 閉鎖した 北隣の Grand Hotel に 此のみ開かれた 電信局に往つて，Milano の Hotel に 明日歸ると 打電する。

それから 小舟で 今度は 對岸 Cadenabbia の もつと北寄りの Menaggio に 往つて見る。Varenna と 同じく 四十五分を 要した。舟子に Cadenabbia に 往つて 待てと手眞似で 命じ，私共は 上陸して 歩く。絹織物の 盛んな處で，町も Bellagio や Varenna より賑やかである。

汽車で 伊太利三湖の 一つなる Lugano に 往つて見やうと思ふたが，時間の都合で やめにして，唯停車場の お婆さんから 葡萄無花果など買ふて，それを 食べつつ ぶら ぶら Cadenabbia の 方へ 行く。山の裾，湖の畔，鈴かけの木の 綠の蔭うつ 並木路が ずうと 通ふて居る。傘を持つて來る事を 忘れた妻も，午近い日の下を 木蔭によつて 涼しく 歩く。母と娘と 自轉車で通る。老レディの 肱には 綠の鸚鵡を とまらして居る。私共の方を見て，“Giorno —— 今日は” と 挨拶して 過ぎる。ナザレの ホテルで鸚鵡と 犬を 食堂に 連れて 來て居た 英吉利 Kahki 夫妻を 思ひ出す。

一時間許 歩いて Cadenabbia に 來た。とくに 待つて居た舟

に 乘つて，正午近く Bellagio に 歸る。

＊　＊　＊

午餐に 食堂に下りて 見ると，食卓の 多くは 空しく，見馴れた顏が 大分 見えない。夏の季節は 過ぎたのだ。明日は 私共も去るので，最早 キモノで 始終 異彩を放つた 日本人の夫妻を皆は見る事も 出來なく なるのだ。露西亞の一連は，今日は玉蜀黍をうでさして，老伯爵夫人から 腕白に 笑るまで 嚙つて居る。私共の食卓に上つた 湖の 小魚の Fry も うまかつた。Brindisi の鯛と，Bellagio の 此小魚が，伊太利の 歡迎の 首尾だ，と 私は妻に 曰ふ。

Lecco 行きの 汽船の 發着が 不確實なので，私共は明朝 舟で Varenna に 行き，それから 鐵路 Milano に 歸ることに きめた。

夕食には，電燈の故障が あると見えて，食卓に 蠟燭が ともつて居る。食 半ばに 突然 ぱつと 電燈が ついた。それは Illumination のやう で あつた。皆が 手を拍ハて 慶ぶ。

私共は 先づ 食堂を 出で，待合室に 待ち受けて 露西亞の 人人に 別を 告げる。妻が 女達に告別する間，私は 息子と話す。モヤシの樣に丈高で，モヤシの樣に素直に無邪氣な顏をして居る。英語をあまり 話さないので，十分に 話が 出來ぬ。何になるつもりか と 私の問に答へて，軍人に，と云ふ。軍人は やめたがよい，と 私は曰ふ。あなたは Professor ですか，と 彼 問ふ。私は著作をする，と答へる。其處に 彼の姉が來る。よく母に肖て，母より

丈が高い。日本に 遊びにお出，と 姉弟に告げる。それから 老母堂と 握手する。手の 軟らかな事 綿のやうだ。つづいて 伯爵寡夫人と 握手する。

"Next time we meet, I hope, in happier circumstance!"

—— 此次には もつと うれしい境界で お目に かかりたいものです！" と 云ふた。彼女は 悅んだ。それから 紫頭巾のレデイに 握手する。浦鹽斯德までは 往つた事が あるさうだ。妻と 皆の Kiss の 包圍に 落ちて居る。やがて 伯爵夫人は，また 私の所に やつて來て，"此次に お目にかかる時は，何卒 お子さん おもちで" と云ふた。"ありがたう" と 私は 答へる。全く 良人に死なれ，國をなくした彼女も，子女兩人を 有つて居る。彼女は 母だ。其點に於て 彼女は 富んだ者で ある。

斯くて 私共は 不思議に會ふた 此 Tolstoy の 本家一族を，神の手に 委ねて 別を 告げた。—— 露西亞を 神の手に委ねた如くに。

＊　＊　＊

此ベラジオも 今夕が 名殘の 食事かへり，トルストイ 家族の人達に一言の 別れを告げやうと，早くすました わたくし達は 近くの バラに待つた。やがて 家族の人達が來る。

わたくしは まづ ときに立つた 黑いボンネットに 輕い黑服を裾長に着た，春の すらりとした 上品な 老伯夫人に ちかよつて，"私達は 明朝早く 此處を去ります，どうぞ お大事に，神の惠が皆さんの上に 裕でありますやう 祈ります" との心をこめ "ドスヰ

イダニア”と露語の一言をいつた。老夫人の眼には涙が光つた。眞綿のやうなやわらかい小さい手がわたくしの手にぴつたりからみついた。そしてたえられぬとやうにわたくしの肩に手をかけ額から頬へ吻して“今度はペテログラアドで是非おゐにかかりたい。”と顔をよせ，“ペテログラアドでね”と重ねてくりかへし，他に露語で一言二言ハはるるがかなしい事にはわたくしには分からぬ。殘の言葉らしいとばかりわかつた。老夫人は近よつて來た娘寡夫人にもうおたちになるさうだよとがつかりしたやうな語調で告げらるる。伯寡夫人は“私どもはあなた方の御心切にひどく感謝して居ます。ありがたう。”としつかりわたくしの手を握りしめ，わたくしの頬をKissする。眼には涙をたたへて‘ああこれから佛蘭西へ。日本へは何時おかへりになりますか?”などと，うらやましげである。わたくしはいひたい事が胸にあふれながら言葉をなさぬ。やつと“長く此處に御滯留になりますか?”と問ふた。寡夫人は悲しい聲で其息子の方へちらと眼を走らして，“體の爲には此處よよい處ですが，子供の教育が出來ませんので，今二週間もしたら瑞西の方へゆかうと思つて居ります。”寡夫人の白い頸には眞珠の玉が三重にまはされておちついた光りを放つて居る。ああ此頸飾が此夫人たちを保護するやうな時が來はすまいか。老夫人の夢寐にも忘られぬペチログラアドが何時果してよろこんで抱きむかへるだらうか。其ますらひの日がいつはつる事であらう?と心細い前途が思はれ

て，わたくしは其顔を再び見得なかつた。姉嬢が寄つて來た。丈高嬢は體をまげてわたくしをKissしつよく手を握る。別れを惜む情が言にあまるらしい。わたくしも祝福の心をこめてつよく手をにぎりしめた。衆朝の女史，腕白の母夫人，一同に皆握手した。皆わたくしをKissした，其處にいつも私共の食卓の隣りに一人卓をしめて居るおばあさんが階をのぼつて來て，わたくし達が此處を去るときいてトルストイ嬢に英語を教はつて別れを惜むのであつた。此おばあさんは伊太利の物持ちらしい。果物好きで葡萄酒に砂糖と水を和してのむなど私共の嗜味に似たお婆さんで話はしなかつたが互に忍みかはして居たのであつた。

夫が一同に握手して後，

“おさきに失礼しやうじやないか。”とわたくしを引立てる。わたくし達は動きも得せぬ皆の間をぬけて部屋の方へ歩をうつした。少しいつてふりかへると，力ぬけしたやうな皆が其處に立つたままわたくし達の去るのを打ちまもつて居た。

あい

＊　＊　＊

翌早朝まだ暗い中に起きて，扉を開けやうとすると，小さな白いものが床の上に落ち居た。とり上げると名刺。“Madame Léneide Tolstoy.”——昨夜扉の下から夫人が挿し入れて置いたのだ。

第八
MILANO（二たび）

（一）

夏の終りの二週を其處に快く過ごして長い旅の疲れを休めた Como 湖畔の Pellagio に別を告ぐる日が來た。

九月四日の未明，五時半と云ふに私共は埠頭に下りた。Porter が手荷物を持つて來る。まさに小舟に乘らうとする時，一個の黑い影が出て來て握手の手を伸ばすを見れば，若い宿の主人であつた。昨日私は 12.6 Lire の勘定を拂つて，愉快な逗留を謝しつつ外に 10.0 L の茶代を置いた。主人はひどく悅んだ。其結果である。私共も悅んで握手して小舟に乘る。主人が Acacia 下の電燈のスヰッチを捻つて足場を明るくしてくれる。

私共の舟は埠頭をはなれる。お馴染の Acacia の下も後になる。やがて Pellagio 其ものが後になる。

東の山の端が少し明るく，其處には明星が輝やいて居る。風がそよそよ面を吹く。水鳥が鳴く。舟子に問へば "モオエエ" と云ふ鳥。湖の面はまだ暗く，湖畔の其處此處には灯がちらちらして居る。Cadenabbia の上の San Martino 岩の上の寺の

邊りに燈明がまだ見えて居る。行く手の Varenna の山の上から曉の鐘の音が降る。

がちやがちやと湖水を驚がして，青い紅い光ちらちらと汽船 Cadenabbia の方から來るのは "Como" で，Lecco の方へ行くのは "Paradello" である。共に私共より少し早く Bellagio を出たのだ。

舟が Varenna の岸に果てると，夜があけた。

私共は直ぐ停車場に上る。荷物を持つて來た舟子が，列車の着まで待つて車內に運び入れてくれる。

七時發車。電車である。洞道が多い。

Bellagio の岬が可なりついて來たが，終に後になつた。車內から望む Lecco の湖は，Como より寂しく，而して山はより裸でより雄大である。

車內の客の鞄に Suisse の Brieg の宿札を貼つたのを見て，瑞西なつかしくなる。

ホテルからくれた辨當を喰ふ。ごろごろしたものは卵かと思ふたら，桃であつた。果物好きがよく呑み込まれて，嬉しい。

七時五十分 Lecco。絹織物の繁昌地。Napoli の下さんが所謂伊太利馬琴の——名は忘れた——生地。此處から人が大勢乘る。私"の室にも中流も富んだ家族とおぼしい母と 11 歲位の娘が入つて來た。母は私共の向ふに坐を得た。妻は娘の爲に半座を分

かつた。一二停車場を過ぐると，娘は立つて通路に立つ やや老いた其父に代らうと すすめて居る。父はもとより 肯じなかつたが，娘の しほらしい 所作が私共を よろこばした。

九時二十分には早くも Milano に着いた。

荷物自動車で Hotel de la Ville に着く。Manager が歡迎する。唯有る室に待つて 珈琲など 喫つて居ると，用意が出來たと云ふて 私共は三階の 315 に導かれた。回字形の内側で 濶くもないが Bath, W.C. つきで，靜かな事は 市の中央に あるとも思はれない 程である。"Ragione di Stato" ——"國家の 理"と題した銅版の額が 掛けてある。ナポレオンが 子無き故に 去らと Josephine に 宣告して 去る場の 光景である。

早速 一浴。

着物で 午食に 下りる。Bellagio の後に Milano は 中々暑いが，扇風機が 涼を送り，Dessert の 水瓜が うまい。歸ると Lift に 乘り合はした 若い Lady が 私共を Roma の Excelsior Hotel で 識つて 居ると いふ。

有平糖を 砂糖にして，支那茶を 室で入れる。

夕食後，廣間の椅子に かけて居ると，先刻 Lift で 會つた 若い Lady が 話に來る。此方が 佛語が いけず，向ふが 英語が いけぬので，よく 話が 出來ぬ。露西亞人である。伊太利人に嫁して 廿二年，子供がないといふ 他の 露西亞婦人を 彼女は 私共に 引合はせた。其女は少し 英語がいける。私が 順禮紀行を 取りに往

つて 歸ると，其女は もう居ない。若い Lady は Kremlin の 寫眞を見て なつかしがり，自身も 莫斯科の者 と 云ふ。Tolstoy の 寫眞も 彼女を 悦ばせる。彼女も Yasnaya Polyana を 知つて居るといふ。彼女の名は Egeny Chossuolovsky。嫁して八年，まだ子供がなく，其人は Bolscheviki で 莫斯科に 居る。昨夕は其 Bolscheviki に追ひ出された 本家 Tolstoy の 一族に別れ，今夕は 其 Bolscheviki の 一人の 妻に會ふ。彼は 氣の毒だが，世も 平民的で 惡くない顏をして居る。何で 良人と離れて 歩いて居るのか。諜報か。宣傳の爲か。何れにせよ，話せないのが 殘念だ。

（二）

九月五日。妻は Como に行くといふ Bolscheviki の 婦人に 三越から 買つて來た みやげ物の 紙入の一つをやつた。勿論 大悦びで あつた。

巴里への 汽車の時間を 調べる。朝發車するのは，遲い汽車。寢臺車は 夕 發車し，瑞西を 夜中に 經過する。瑞西を 寢て過ぎるは惜しい。何れにせよ，先づ 出國の 許可を 得ねば ならぬ。

案内者を 連れて，私共は 警察署に行く。何か 騷擾があつたと 見えて，署の庭から 階段まで 兵士が ーぱい ごろ ごろ 寢て居る。係官が 裏書請求用紙をくれた。日本領事の 裏書入用と 云ふ。

Hotel に 歸つて，Hall Porter に 請求用紙を 塡めて もらふ。

而して 午後また 案内者を連れて 日本領事館に行く。領事は居ない。英語を 話す 女書記に 裏書を してもらう。料も 取らない。領事に 名刺を 殘して，私共は 徒歩 ニたび 警察に行く。最初用紙を もらつた室で，また 何かの 記入をしてもらう。英語を 話さぬ 案内者，而して 多分文字の よめぬらしい案内者は，紙入から 3Lを出し，一寸私に 見せて 窃と係官の デスクの 抽斗に 入れる。私は 默つて居る。係官も知らぬふりで 居る。それから 私共は 最後の印を もらうべく 良久しく 唯有る室の 前に待つ。向ふの方にも，長い行列が 戸の前に 造られて居る。到頭 私共の 順番が來て，件の 願書用紙を 出す。領事の裏書が これでは いけぬ，出願者の 寫眞を貼つて もつと 細かに，と 謂ふのである。何の役にも立たぬ 案内者を せき立てて 馬車を 雇はし，大急ぎで また 日本領事館に 行く。領事は 居るが 伊太利人で，一人も 日本人は居ぬ 日本領事館であつた。先刻の 女書記を 頼み，幸ひ 持ち合はせた 私共の 寫眞を 出して ニたび 書いて もらう。料はとらず 禮も“日本政府に 使用されて居る者 ですから”と 云ふて 彼女は 何も 受取らぬ。Port Said で 私共に ピアノを 彈いて 聞かせた 而して 私共が 英文不如歸を やつた Fioravanti の Tosca 孃に 似た 娘で あつた。私共は 謝して 大急ぎで 三たび 警察に 歸つた。而して し更切り 間近に やつと 間に合ふて，私共が 伊太利を 出る 許可の署名は 與へられた。

夜汽車ときめ，寢臺の 世話を Hall Porter に 頼む。

此處の料理は そんなに まづくない。Roma の ホテルより 却て好い。砂糖は 相變らず 不自由だが，Dessert の Melon や 水瓜が 何時も好い。Como の 鱒も うまかつた。煎豆腐のやうなをうまく 喰ふて，後で 聞いたら 羊の 腦味噌で あつた。

（三）

九月六日。今朝は つい近くの 大 Duomo に 往つて見る。繪畫や 寫眞で 久しく 見馴れた 此大寺院も，羅馬 聖 彼得と 同じ樣に，あたりが 近くて 邪魔になる。市中にしては，四周に 相應の 餘地を 置いては あつても，まだ アキが足 ぬので，十分大きさが 分からぬ。それから 不快なは，Duomo の 周圍を 歩いて居ると，夥しく 尿臭い事だ。“人は 安息日よりも まされり”で，Tzar が 殺され，耶蘇の像が 踏みにじられる 時代だから，ミラノ大伽藍 が W. C. になるのは 本望かも 知れぬが，やはり 惜しい心地はする。

1386 年に 着手された 此伽藍の 建築は，聖彼得が成る迄は 世界一を 誇つた 大伽藍であつた。形は 十字架を 型どつて，今は 薄鼠になつて 居る 大理石で 煉瓦を包んだ Gothic 式の 大伽藍。尖つた屋根の數は 98，筍の林の如く，其一つ 一つに 像が 立つて居る。屋根から外部の 像が すくて 約二千，內部が二千四百と 數へられる。最高塔は 地上 356 呎。其頂には，聖母 Madonnina の

鍍金の 銅像が ぴか ぴか 光つて 立つて居る。 兩手を横げ，頭には 十二の星の 後光輪を いただき，横には 十字形を なした 長柄の斧が 立つてゐる。 Maria Nascenti 昇天の 瑪里亞へ と 銘せられて，此伽藍は 阿母に 献げられたものなのである。伽藍の長さ 436 呎，幅 189 呎，面積七千餘坪を 占め，四萬人を 容れると 云はれる。然しあたりに 可なり 大きな 建物が あるので，そんなに 大きくも思はれない。

私共は 先づ 2L を拂つて，Milano を 大觀し，Alps を 遠望せん爲に 塔に 上る。外に つけられた 300 の 階段を 上つて，所謂 Duomo の 屋根に 來た。此處は 最早 地上を去る 223 呎，空近く，前後 左右 上下に 簇簇と 聳り立つ 尖塔の上に 危く立つ像が 近く，遠く，低く，高く，私共を 繞つて もの言ひさうである。畫はがき 案内記など 賣つて居る。屋根の上に 小用所がある。上り下りの 客が 相應に 賑合ふて居る。

私共は 更に 塔内に つけられた 螺旋階の 194 段を上つて，最高の 展望所に 來た。頭の上には ぴか ぴかの聖母が まだ 可なり高く 立つて 居る。

私共は 失望した。此處から 北望すれば アルプスの 連嶺が 西は Mont Blanc から Matterhorn, Mont Rosa, 東は Jungfrau まで 一目に見ゆる 筈なのだ。それは大抵 朝早くに 限られると 云はれて 居る。 其つもりで來たが，九時でも 少し 曉かつたか，北の方は 濛氣が あつて アルプスの 片影も見えない。唯綠野の

中に 緒く 白く うち廣がつた Milano の市が 殘りなく 俯瞰される。私は 愛をもて Milano を 眺めた。十三年前 私が 坡西土まで 特別三等に 同船した 日本人三人の中 二人までは，Milano の 大博覽會に 來る 若い人であつた。

繪葉書など 買つて 下りる。而して 寺内を あるく。薄暗く潤く，床は Mosaic，五十二本の柱は 其一を 妻が 試みに 歩いたら 周圍十五歩 あつた。私が 帽を 冠つて 居たので，堂守でも なささうな男が 脱帽すべく 注意した。私は おとなしく帽を ぬいだ。一隅には 禮拜が まさに 行はれて 居る。 世界第一 と云ふ Stain edglass の 窓を 見上げて，私共は 寺を出た。

（四）

九月七日。ミラノ ば 中々暑い。高山が 北に 立ちふさがつて 居るから であらう。昨夜は 窓の硝子をあけ Blind だけしめて寢たが，夜中も 寒暖計が 78 度を 下らなかつた。

妻は 荷造りに かかつた。

九月八日。 朝は 馬車で Santa Maria delle Grazie の寺に Leonardo da Vinci の "最後晩餐" ノ畫を 見に行く。今日は 閉されて 居た。

歸りには，蠟石細工の 美しい 紅白の 器物，逆立ちして居る 天童の 石膏人形など 買つた。

九月九日。朝 再び 馬車で "最後の晩餐" を 見に行く。今日は 扉が 開いて居た。二L拂つて入る。何の 風雅もない 長方形の バラックのやうな 室の 行き當り，其處に "最後晩餐" の卓が 据ゑられ，一人の師を中に，十二人の 弟子は 今も さまざまの 容子を "聞書の内 一人 吾を 賣る者 あり" の言に 爲して居る。畫は 後人の手に 塗り 直され，其れ ら 薄れ，自己の 生活本位の 尼さん達が 出入口を とる爲に，耶蘇を 足ぎりに 切つて しまつたり 散散に さいなまれながら，矢張 はつきりと 活きて居る。Vinci が 最初 壁に 直ぐ油繪で 描いたと 云ふは，惜しい 試みである。"最後の審判" に 於ける Michelangelo の 耶蘇，"Disputa" の Raphael の 耶蘇に 比して，此 Leonardo da Vinci の耶蘇は Vinci 自身を 語つて 居るから 面白い。M の意，R の情，V の智が 爭はれぬ 確かさを 一基督の上に 表はして居る。墺地利の飛行機 襲撃を 慮つて，Milano に ある R の 名畫などは，安全地に 移されて 居たさうだ。V の 此大作は 移しやうが ないので，其ままに せられた。M と R の 代表作が 伊太利の 中央に 時めいたに 反し，V が 北陲の 此 Milano の 小さな 尼寺の壁に その 代表作を 遺したのを，氣の毒にも 思ふ。

亞太利加人らしい 男女の 群れが 入つて 來た。やや しばらく 待の前に 立つて，皆は 出て往つた。私共も 出て行く。歸りの 狹い 通廊には，"最後晩餐" の 摸寫が 幾枚も 掲げられて 居る。而して 唯一つも 原作に近くすらも 描かれて 居ない。

歸途 馬車を とどめて，Unione Cooperative と 云ふ博品館で 赤ン目を して居る 女兒の 馴染な人形一，其他色色の 買物をする。

歸つて よく見ると，赤ン目女兒に 龜裂が いつて居る。午後は それを 取り換へ かたがた Milano の 名殘に 私共は 共にキモノで 馬車に乘り また Unione Cooperative に 往つた。日本服が 皆の眼を 惹く。こころよく 取り換へて くれたので，また 他の人形の 一對を 買つた。それは 若い 伊太利を代表するやうな 少男少女の 一對で あつた。

馬車屋が まつて居て くれないので，私共は 草履 ぱた ぱた 餘程 歩いて やつと 一臺の馬車を 探がし 出した。而して その馬車で 新公園と Drive する。道路の一部が 修繕されて，Asphalt が白く 日に 光つて 居る。

Hotel に 歸ると，Bolscheviki の 女に會ふ。今日 Como から 歸り，明日 Torino に 行くと云ふ。私共が 明日 巴里へ立つと 聞いて，一緒に 行きたい と 云ふ。然し Bolscheviki と 云ふ事が知られて 居るので，旅券の面倒が 大抵では ないと こぼす。握手して 私共は 彼女に 別れた。

Hotel も 戰後の 修繕で，汽車の 切符發賣所も，館内郵便局も 閉鎖して 居る。入り口の Hall は，床の Mosaic を 修繕中で 工人が 日ゝ入り込むで 居る。折角立派に出來たと 思ふものを，意に滿たぬと また 破はして，新に たたき直す。その 仕事振りが

私共の氣に 入つた。

今夜は 十五夜の 滿月が 私共の 三階の窓から 眺められた。伊太利で 眞かな月を 二回見る。私共の 伊太利は 思ひの外の長逗留で もつた。

第九
伊太利を後に

(一)

九月十日。今日は 伊太利を 去る日である。日本を立つ時，伊太利は 私共の 頭に なかつた。往つてもよい，往かなくても，とさへ 思ふた。然るに 坡西土に 着くと 直ぐ 伊太利關係の南さんの 世話になり，カイロに行けば Veuezia 生れと云ふ女中の世話になり，果ては 伊太利の船に 乘つて Brindisi に 上つてから，Napoli, Roma, Firenze, Milano, Como, Bellagio, また Milano と 悠悠 ここに 二月餘を 伊太利に過ごしたのは，全く 案外で あつた。然し 案外では あつたが，不思議でも 何でもない。日本によく 肖た 伊太利，日本を 歐羅巴に 押出したやうな伊太利，それを 私共は 見過しに せられうか？ 其處の自然，其處の歴史，其處の藝術は，必しも 私共を 醉はせも 壓倒しも しなかつた。然し二ケ月の 逗留は いやでも 私共を 伊太利の 命脉に 觸れさせた。伊太利を 見るのは，日本を 省みるのだ。伊太利を 鏡にして，私共は そこに 色色の 明示 暗示を見た。一國の 問はるべきは，如何に 多くの 過去を有つかでなく，如何に 多くの 未來を 有つかである。もとより 火山は 死んでも 内の 生命を 語る。大なる過

去を 有つ事は，必しも 大なる未來を 保證せぬかはり，また 大なる 將來を有たぬ證左にも ならぬ。

伊太利は 光榮ある 過去をもつ。大なる將來を 彼女は 有つであらう乎。私共は Vesuvio Etna を 有つ 彼女の內的生命を 疑ふ事は 出來ぬ。彼女は 自ら 新にすべく 奮ふて 居る。彼女の 努力は 報ひられる で あらう。私共は 彼女の 未來を信じ，祝福を以て 今 伊太利を 去る、

(二)

私共の 愉快な Milano 逗留については，此處の Hotel の Manager の 厚意に 負ふ所が多い。伊太利貨幣を 用し切つたので，千L足らずの Bill を 日本から 携帶の France 紙幣で 拂ふと後，Manager に 扇子一本を添へて 100 法札を 贈る。それから 先日荷物調べに，停車場に 同行した Lift boy が 右手を 傷めて 居るのに，扇子と 若干 L をやる。室附の 給仕に 古い扇をやつたら，女中取締がそれを 欲しがつたので，其女にも 妻が別に 扇を 取り出してやつた。交渉ある者は，それ ぞれに 受くべきものを 受けた。

午後四時過ぎ，私共は Manager 外 玄關の一同に 送られ，荷物と共に 自動車で Milano 停車場に 往つた。

此頃の 旅客輻輳，寢臺係に 30 L の 心附をして やつと 手に

入れたと Hall Porter の 吹聽した 寢臺車の 私共の室は，No 1 No 2. と 札うつた 上下 二つの Berth になつた 狹い室で あつた 右は 通路になつて，左の窓は 今曉に 西日がさし入る。やがて 騾馬から來た 汽車に，私共の寢臺車も連結された 容子で ある。

午後五時廿五分，汽車は Milano を 後にした。

改札係が 來る。一等乘車券，寢臺券，急行で あつたので，更に 急行料 25 L を 追徵される。

それから 他の係が 私共の 預け荷物の 引換券を 受取つて行く。ややあつて 立ち歸り，これではないと 云ふ容子をする。戻したそれを 見れば，それは Brindisi 上陸の際 もらつた 入國許可證で あつた。笑つて Pocket book を かい探り，本物の引換券を 出して，二度目に來た 彼に 渡す。

窓の外の 日は 追ゝ沈み，あたりの綠は そろ そろ 山に近づく。私共が 食堂車に 往つた頃は，汽車は もう 伊太利三湖の一で 一番大きな Maggiore 湖の 沿岸を 走つて 居る。Como の湖よりも打開けて，平遠淡蕩 の 景に 富んで居る。殘照明るい 湖面を 眺め 眺め Dessert の Melon を 食べる。

室に歸ると，日は 落ちて，汽車は 轟轟と 山に かかる。石磊磊の 谷を 上る。

Domodossala の 停車場では，多分下車して 荷物の稅關檢査が あるであらう，と 期して居たが，何時過ぎたともなく 過ぎて，一向 其樣な 容子もない。唯私が一寸席を はづした間に，妻の言

によれば 伊太利か瑞西か知らぬが 稅關吏らしいものが來て 一わたり 手荷物を 見渡して 去つた だけである。

日は いよ いよ 暮れた。汽車は ます ます 山を上る。電燈の光に 照された 私共は，窓から外を 眺める。大分上つて來た。隧道が 隧道に つづく。やがて 停車場に來た。ほとりに 轟轟と 明るいのは，發電所らしい。

やや 久しく 止まつて居た汽車は，やをら 停車場を 後にして，やがて一の 隧道に 入つた。

第六篇

佛蘭西

第六篇
佛蘭西

第一
巴里へ

(一)

長い隧道だ。煙が來ないは電氣を使つて居るのであらう。上りに上る。十分あまりも立つた所で，Simplon の隧道を通つて居るのだとやつと氣がついた。私が此前順禮行の年1906年に開通した瑞西と伊太利を連ぬる12哩四分の一の隧道で，卽ち世界一の長隧道なのだ。Milano から巴里へ行くには，伊太利三湖の中央の Lugano 湖畔を北上し，St. Gothard の長隧道を通つて瑞西に入り，Lucerne 湖を掠り Basel を經て行く路もあるが，同じ夜汽車でも世界一の隧道を通つて見やうと謂ふので，Simplon 線をとつたのだ。それを半過ぐるまで Simplon と氣がつかないなぞは，隧道だけに間のぬけた話だ。

やつと上りつめた。此邊は海拔2303呎で，頭の上には七

千呎の 山塊が のつかつて居る。やがて 隧道は 下りになる。汽車は疾風の如く 瑞西に 下りて 行く。

隧道を 出る。それは 入つてから ほぼ 25 分の 後であつた。

隧道を 出ると やがて，機關車ども つけ更へる ので あらう，一の小驛に 止まつた。窓から 覗くと 十六夜の 闇い 小きな月が 出て居る，恐ろしく 高い山の 上に， 山高月小の句を 其ままに。其山懷に 月明りに ほの白いのは 雪であらう。瑞西に 來たのだ。アルプスに 來たのだ。流水か，瀉水か，洒洒と 響いて來る。

十六夜の 月に さざめく 山みづの
音 さらさらと 瑞西に 入りぬ
い

汽車は 再び 進行して，電燈明るい 大きな 停車場に 來た。此處は もう 瑞西の Brieg である。時は九時。廿五分の 停車がある。私は 下りて Restaurant に 入つて，一杯の Siphon を 傾け，大きな 林檎を一つ 買ひ，魔法罐に 水を 滿たして もらう。Lire を 出すと，帳場の婆さん 瑞西小貨で つりを 呉れた。持ち歸つた 水を飲んで "おお 冷たい。アルプスの 雪が 融けたのですね。" と 妻が 悦ぶ。

歩廊で 運動して居た 若い Lady が 三四人，私共の窓を 頻に眺めて居たが，やがて 其一人が 窓下に 立寄つて 妻に 佛蘭西

語を お話しですか と 云ふ。Non。日本から お出ですか。Oui, 日本から。笑貌が 交はされる。あとは 例によつて 双方の遺憾。

汽車が 出る。

給仕が來て 私共の Bed を 作る。通廊に出て，窓下の Seat にかけて 眺める。

汽車は 川に沿ふて 走つて居る。汽車が奔れば 川も走る。大きくはな が 水多く 流れ急に 月が ちらり ちらり 其面を流れる。Rhone 川である。

Bed は 出來た が，寢るには 惜しい 夜である。室に歸つた 私共は 尙しばらく 下の Bed に かけて 窓から 眺める。汽車は 轟と 川音を 亂して，Rhone を 彼方へ 渡り， 此方へ渡る。川岸の Poplar が 月に 光る。高い 山の屏風は 何處までも つづく。時時 びつくりさる程 高い處に 電燈が 光つて居る。

"本當に 瑞西は 美しい 邦だ こと！"

と 隣室に 女の聲が 嘆つ。

夜も 更けるので，私共は 窓帷を しめて，寢衣に更へ，私は 上の Berth に，妻は 下の Berth に 横に なつて，電燈を 消した。

"Kantarah——Ludd の 軍用汽車より ちつと ましだね。"

私が 上で 言ふ。下では

"本當に ありがたいこと！"

と 妻の聲が した。